平成２７年３月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

３月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「平成２７年度中部地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成２７年度中部地方向け地域放送番組編成計画」について報告があった。続いて、金とくスペシャル「東海北陸７県対抗！クイズバトル７×７（セブンバイセブン)」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　森棟　公夫　（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
委員　　大島　宇一郎（中日新聞社取締役管理局長）
　　加藤　勇二　（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
　　小寺　功子　（三重県漁協女性部連合会会長理事）
　　立花　貞司　（トヨタホーム（株）取締役会長）
　　田中　章義　（歌人・作家）
　　中村　智景　（四季料亭「助六」女将）
　　野田　雄一　（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）
　　長谷川明子　（日本ビオトープ管理士会中部支部会長）

（主な発言）

＜金とくスペシャル「東海北陸７県対抗！クイズバトル７×７（セブンバイセブン)」
（総合　３月１３日(金)　後 7:30～8:43　中部ブロック）について＞

○　あまり知られてない名所や祭り、食べ物などが紹介されていて、全体的には大変楽しく見ることができた。しかし、それ以上の感想が特に出てこない番組でもあった。あえて言うなら、クイズのテーマが各県でばらばらだったので、例えば、歴史的遺産や食文化に絞ってもおもしろかったのではないかと思う。双方向機能を利用しての視聴者参加については、県ごとに競うならば、正解率だけでなく、人口との対比で参加率も一つの基準として表してもよいのではないか。ゲスト解答者の正解・不正解と視聴者の正解率を見ると、結果的には、あまり正解率にこだわらなくてもよいのではな

いかと思う。　正解率も一つの基準だが、参加率のような基準もアイディアとしてあるのではないかと感じた。

○　番組の騒々しさが頭に残った。もう少し落ち着いて見られたら、クイズで取り上げている内容がすんなり頭に入ってきたのではないかと思う。司会進行の岡田圭右さんはやたらと叫んでいるようで、それにつられて黒崎めぐみアナウンサーも早口になってしまっていた。解答者は、クイズを考える時間に音楽に合わせて踊っていて、真面目にクイズを考えさせる演出にしたかったのかどうか疑問に思った。生放送なので予想外のことが起きるのは分かるが、解答者がパネルを裏返しに出していたりと、全体的に落ち着きのなさが目立った。クイズの中身については、地域の知られざるところを取り上げていて興味深かった。視聴者の正解率が思ったより高く驚いた。考える時間がある程度あると、その間にインターネットで調べることもできる。また、正解率だけで競うのも、各県の参加者数にばらつきがあって難しいだろうと思う。勝敗を決める何かよい方法がほかにないものか、視聴者参加のクイズ番組というものはとても難しいという印象を受けた。福井県からのクイズは、１問だけ、地元の正解率が低かったが、問題自体が難しすぎてほかの設問とのバランスに欠けていたように感じた。もう少し工夫してほしかった。

○　リモコンを手に取り生放送を視聴したが、生放送だからなのか、初めから司会者が時間に追われている感じがして、とてもあわただしかった。生バンドが入っての演出は、ボリュームが大き過ぎる印象だった。そのために司会者も声のボリュームを上げるし、解答者側のゲストもコメントや司会とのやり取りが騒々しく耳障りだった。生バンドの音とのバランスを事前に調整できればよかったと思う。一方、出題ＶＴＲはスタジオとは違って落ち着いており、大変よかった。各県のクイズは、知らないことばかりで大変勉強になった。岐阜県の温泉を使ってのフグの養殖は知ってはいたが見たのは初めてで、バナナやドラゴンフルーツの栽培やチョウザメの養殖は初めて知った。もっと地元のことを勉強しなければと感じさせられた。クイズの内容はどれも興味深く感心したが、あわただしくまくしたてるような番組の進め方には少しがっかりした。「バラエティー生活笑百科」のような、ゆっくりと時間が流れて、司会者と解答者の受け答えものんびりしているものがＮＨＫらしいクイズ番組ではないかと思いながら見ていた。視聴者参加型の生番組に取り組む意義は理解できるが、少し違和感があったことは否めない。

（ＮＨＫ側）

今回、クイズの参加が１万 864 人あった。延べ解答数は３万

以上で、近年の名古屋局の双方向番組としては、一番多かった。各県の参加者は、おおよそ人口比率と比例していた。参加者数や参加率なども伝えながら展開する方法も検討していきたい。視聴者がインターネットで調べて答えるということは、我々も想定し、故に２０秒というぎりぎりの考える時間を設定した。これからの時代の双方向クイズは難しいというのが実感で、どのような演出がふさわしいか今後の課題だと思っている。全体的に騒々しく落ち着きがなかったというご指摘は、重く受け止め今後の演出に生かしていきたい。生バンドについては、演奏の音量や、それによる司会者の対応など、課題を検討し次に生かしたい。クイズの内容について、ＶＴＲはご好評をいただいているが、設問の難易度や出題のしかたなど、より緻密に考えていきたいと思う。今後に向け、もう少しテーマを絞ったクイズ番組も考えていきたい。全問正解者は、視聴者参加１万 864 人中、たった１人と、ゲストの静岡県出身の筧利夫さんだけだった。こういった情報も出せればよかったと思う。

○　生バンドの登場は、気合が入っていることを感じさせた。ただ、ニュースの後だったので、その落ち着いた雰囲気から、いきなりボリュームが高くなり驚いた。おそらく音量を的確にコントロールしておけば問題なかったと思う。騒々しく感じたのは、演奏の上に司会者の声がかぶったためで、番組の導入部分は非常にもったいなかった。また、せっかくの生バンドだったので、クイズとうまくコラボレーションできるとよかったのではないかと思う。クイズの内容は、中部各地の知られざる場所や文化が紹介されていてよかった。「クイズバトル」というよりは、楽しくクイズを見るという感じならば、違和感はないと思う。三重県の“キジ”のクイズは、視聴者もなぜそんなに簡単な問題なのかと思うかもしれないが、今ではキジの鳴き声を聞く機会も少なくなっているので、あえてこういう問題を出すことも意味があると思う。キジは三重県だけでなくどこにでもいるが、「サービス問題」という位置づけで、組み立てを工夫してもよかったのではないかと思う。愛知県の祭りのクイズは大変興味深かった。ナレーションの声が聞きやすくとてもよかった。気楽に聞けて、子どもにもなじみやすい内容になっていた。ＮＨＫらしい、いわゆる紀行番組で取り上げられていそうな題材が、クイズになって出てくることで、地域の魅力がより引き立つ効果もある。福井県越前大野の「天空の城」など、ぜひ、行ってみたいと思わせてくれるＶＴＲだった。ぜひ次の機会も、子どもから大人まで楽しめる番組を目指して取り組んでほしい。

○　双方向のクイズバトルという試みは、よく分かった。各地の伝統行事や名所を紹介する情報番組としても大変よかった。ただ、クイズ番組としての組み立てには、もう少し工夫が欲しかった。大逆転ができるような演出はなく、後半はほぼ勝負が決まっている状況で、“バトル”としてはあまりおもしろくなかった。７県７問の構成ではあるが、ボーナスクイズなどを用意してもよかったのではないかと思った。クイズを考える時間に、ゲスト解答者は考える間もなく演奏に合わせて踊っていたのには、騒がしい印象だけが残った。視聴者参加について、１問目の解答数は４千人台だったのが、最後は１万人台の参加者になっていたが、県別の参加者数、参加率、正解率などいずれの数を出しても、アンバランスになる可能性はあると思う。そこが、視聴者参加の難しい点であり、双方向の課題だと感じた。番組の最後に全国放送の「ＱＢ４７」の案内をしていたが、このような企画をブロックごとに行い、最後に代表が競うという企画があってもおもしろいと思う。三重県熊野の木津呂や福井県の越前大野城など、この番組で初めて知ったところもあった。近くにこのようなすばらしい所があると知ることができたという意味では、ためになる番組だったと思う。

○　ＮＨＫのクイズ番組ということで楽しみにしてチャンネルを合わせたが、出だしが本当に騒々しかった。司会者もふざけているように見え、いきなり残念な思いを感じながら見始めた。ＶＴＲによるクイズの出題はとてもよかった。しかし、解答のときになると、再び騒々しくなり、音楽に合わせて踊るゲスト解答者たちは、いつ考えているのかと思い、少し残念に思った。クイズの内容については、三重県に木津呂というすばらしい絶景の集落があることを初めて知った。クイズに登場した店は木津呂の中にあるのかどうかなど、出題に関係ないところも興味深く見ていた。各県代表のゲスト解答者には、あまりに教養に差があり、ゲスト選定をもう少し考えてほしいと思った。

○　新しい試みに挑戦したことに関しては、意義があったと思う。全体を通して、それぞれのクイズのＶＴＲ部分が大変よかった。構成がしっかりしており、視聴者の知りたい、行ってみたいという気持ちに応えるものだったと思う。しかし、スタジオが騒がしかった。騒がしいのが悪いというわけでは　ないが、ＶＴＲの内容とスタジオの進め方が合わなかったところに問題があった気がする。生放送の難しさも理解できるが、あらかじめ決めた内容にとらわれてしまい、生放送での変化にうまく対応できていなかったのではないか。司会やゲストの芸能人は番組に慣れているから、その場のノリで踊ったり、おもしろいコメントをしたりするのだろうとは思う。結果として、気づけば、騒々しい印象で終わってしまったという感じなのではないか。双方向クイズに取り組み、視聴者参加をしてもらううえで、今後、順位付けするための数字やデ

ータをどう出していくか、工夫をしていってほしい。

○　ＶＴＲ部分は家族みんなで見たいと思わせる内容で、とても楽しめた。時代の流れとして、双方向にチャレンジしていく姿勢は評価したい。生バンドに関しては、もったいないというのが正直な印象である。せっかくバンドを入れたのであれば、場面ごとにいろんなバリエーションを持って音楽を挿入できるだろうし、曲によって地域の特色を生かすこともできると思う。生バンドならではの演出もあったのではないかと思った。司会の岡田さんは、普段のイメージから想像できる進行だったので、騒々しさはあまり気にはならなかったが、解答者も含めた全体的なゲスト選定に検討の余地があると感じた。例えば、各県出身タレントと地元をよく知る識者など、様々な職種の人を組み合わせたりすれば、幅広く対応できるのではないか。難しい設問にも独自の切り口で対応でき解説できるような人がいれば、唐突に踊りだす印象ばかりが残ることはないと思う。幅広く視聴者に見ていただくために、より受け入れやすいゲストも必要かもしれないが、一方で、地元の知恵袋のような人や教養派のゲストの納得のコメントも、このようなクイズ番組を引き立ててくれるように思う。ＮＨＫのクイズ番組には、バラエティー的要素を求めている視聴者もいるかもしれないが、知的教養を求めている視聴者層も必ずあるはずだ。そうした層の期待に応えるには、出題ＶＴＲの特色に合ったキャスティングも必要だったのではないかと感じた。ぜひ、音楽やＶＴＲ、出演者のバランスを考え、次に生かしてほしいと思った。

○　生放送だったので、出演者の皆さんは、緊張し興奮している状況だっただろう。演出に賛否あるとは思うが、生放送で双方向の視聴者参加番組に取り組んだ意味はあったと思う。生バンドの演奏は音量があり過ぎて、出演者も聞き取りにくかったように見えた。双方向の参加者が、１問目の４千人くらいから１万人を超えるくらいに増えていった。このような試みを繰り返していけばもっと双方向の認知度も上がると思う。クイズの内容は、難易度に差があったと思う。三重のキジのクイズは、解答者も自分の思うキジの鳴き声にこだわっていたが、確かに実際に聞いていると解答者の言うように聞こえる。絵本の中ではケーンケーンと鳴いているので一般的かもしれないが、鳴き声の問題は、どのレベルで答えるのかをもう少し考えるべきだったと思う。福井のはまな味噌（みそ）のクイズは本当に難しかった。出題ＶＴＲの中にヒントがあって、それに対して答えていくという構成だったら、ある程度の考える時間が必要だろうと思うが、今回のような当たるかはずれるかというだけの解答のしかただと、待っている時間が長すぎた。それゆえ、音楽に合わせて解答者が踊るということになったのではないか。視聴者参加のクイズというのはよい試みだと思う。双方向で子どもも参加できる。クイズのレベルは、ぜひ調整して、今後も取り組んでいってほしい。

○　中部各地の地域色豊かな話題を紹介し合い地域間の親和性を高めることであり、それをより効果的に行うためにクイズ仕立てで興味喚起を図り、更に競争させることで参加意欲を高め視聴を促すという主旨だったと思う。視聴者の郷土愛をいかに刺激するかが重要だと思うが、主旨にそぐわない点もあった。まず、競争スタイルのクイズ番組として最低限担保されねばならない設問の難易度が一定でなかった。例えば、静岡の桜エビと福井のはまな味噌（みそ）では、認知度に差があり過ぎた。ゲストの解答能力の差もあったが、難易度にばらつきがあるのは公平性に欠けていた。次に、クイズの作り方があまりに稚拙だった。映像をクイズ化する意義は、映像を通して得た情報に、教養を加味してあれやこれや考える知的活動に楽しさを覚えさせることにある。いきなり「温泉を使っていないものは何か？」と問うてはクイズにした意味がない。人によって聞こえ方の違う動物の鳴き声を選ばせる設問、答えが問題であるような珪藻（けいそう）土の設問、史実に基づく確証のないはまな味噌（みそ）の設問も適切とはいえなかった。また、制作側に主旨を全うしようという志が薄く、適切な管理がなされていなかった。クイズの難易度や内容の質などの問題点を事前に指摘し均一化を図るべきだった。出題ＶＴＲも、県によってテーマ性や取材内容の質に差があった。船上でイカに醤油（しょうゆ）がかかりすぎたシーンや男性キャスターが温泉に浸かっているシーンなど、おかしいと思えるシーンは撮り直すべきである。このようなこだわりの無さが、全問正解と全問不正解が出るというばらつきを生じさせ、地域によってはゼロポイントという郷土愛を無用に損なう結果を生んだように思う。ＮＨＫとしての矜恃（きょうじ）をもったクオリティーと地方に対する真摯（しんし）なこだわりはもっと持ってほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

今回、ナレーションは、アニメなどで活躍する声優の方にお願いした。三重県の木津呂について、登場した店は木津呂の近くにある。もう少し分かりやすくする必要があったかもしれない。視聴者参加のデータに関して、参加人数や各県の正解率、参加率などをもう少し綿密に検討し示すことも検討していきたい。スタジオ部分について、楽しい雰囲気が伝わった面もあると思うが、ゲスト解答者については、どのくらい答えられるのか事前には分からず、結果に差が出てしまった。ＶＴＲの内容が深められるようなゲストの選定を考えていく。ＮＨＫのバラエティーに求めているのは、一つは知的教養なのではないかということ、子どもたちにも見てもらえるのではないかということばを頂いた。今後、徳川家康の没後 400 年に当たり静岡、浜

松、岡崎などゆかりの地を軸に、クイズ仕立ての番組を制作したいと考えており、東海北陸の視聴者の方に幅広く楽しんでいただけるよう、さらに議論を重ねていきたい。

（ＮＨＫ側）　概して、ＮＨＫの番組はＶＴＲは評判がよく、スタジオがもう少しと言われる。ＶＴＲがあまりにもきっちり出来ているとＶＴＲの中で完結してしまう。スタジオをうまく進行するには、ＶＴＲを見た出演者や視聴者が少し疑問を残すくらいの作りにしておくと、その部分の話題でスタジオがうまく展開するのだが、なかなか難しい。クイズ番組に生バンドを入れるというのはよい挑戦だったと思う。しかし、生バンドを入れたらどんなことができるか、どうすると効果的かというところまでもっと思いが至るとより生かされたと思う。双方向については、全国放送はもちろん、各地域放送局でその機能や演出を高めるためにさまざまな形で取り組み可能性を探っている。今回も、限られた時間で、参加者が４千人から１万人と倍以上に増えている。最初は番組を見ているだけでも、次第に参加してみようと思ってもらえるよう、クイズのほかにも双方向でできることを考えていこうと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　２月２７日(金)静岡流「提言！静岡経済　元気の素(もと)」(総合　後 7:30～8:13 静岡県域)は、４３分間の気合いの入った地域の経済番組という感じだった。アナウンサーと３名のゲストで進行し、よく取材されたＶＴＲを交えて分かりやすい構成だった。数値を示しての解説もよく、静岡経済がどういう現状にあるのか、それを解決するためにどんな試みがなされているのか、よく分かる内容だった。ただ、ゲスト３名の人選は、地元銀行の関係者に偏っていたので、もう少し考慮すべき点があったのではないかと思う。ぜひ、第２弾を放送してほしいと思うよい番組だったので、次は、キャスティングに配慮し取り組んでほしい。

○　２月２０日(金)ナビゲーション「福井　高学力の秘密～学校と家庭に隠れたヒント～」は、全国学力テストで常に上位にいる福井県の取り組みを分かりやすく取り上げた内容だった。学校と家庭との連携、教師同士のサポートや教科担任制度、小中学校

の連携など、大変参考になった。ただ、本当によいことずくめなのか。番組のホームページに、勉強に追われる中学生の娘を心配する父親の声があった。そういった負の側面に触れられていなかったことは気になった。よい面、悪い面、両方をうまく取り上げるとよかったと思う。福井県が成果を上げているのは事実だと思うが、ではなぜ他県はできないのかについては、触れていなかったように思う。各県の状況も取材し、問題点などを指摘することで、福井県の取り組みがよりクローズアップできたのではないかと思う。

○　２月２０日(金)ナビゲーション「福井　高学力の秘密～学校と家庭に隠れたヒント～」について、福井の子どもの学力が高いことは以前から知っており、共働きが多く祖父　母との同居や近所に住むことも多いため、祖父母が子供の世話をしているからだと認識していたが、それだけの理由ではないことが分かった。先生側からのアプローチ、教師の育成、小中学校の連携などを分かりやすく解析しており、納得するものばかりだった。価値観を押し付けでないように習慣づけることは時間がかかるが、辛抱強い北陸の人間だからこそなのかと感じた番組だった。

○　２月２０日(金)ナビゲーション「福井　高学力の秘密　～学校と家庭に隠れたヒント～」は、テンポよく簡潔にまとめていた。高知県の教諭の客観的で論理的な話は分かりやすく、番組のテーマ訴求に貢献していた。フリーライターの太田あやさんの解説も、取材に基づく説得力と納得性の高い内容だった。教育現場の取り組みは、高学力との因果関係は不明ながら、実際に行われていることなので取り上げることは妥当だったが、家庭に勉強しやすい環境が整っているケースとして紹介した、祖父母が勉強を教え共働き夫婦がさらに家庭で教えるというような世帯がどれだけあるのか、他県と比べてどうなのかの明示がなく、教育現場の件と同等のように紹介するのは適切ではなかったように思う。太田さんの言う「是非は別として、高校は公立、大学は国立が全てという価値観を学校も家庭も共有している」という社会像に触れたほうが現実味があったのではないか。

○　２月２０日(金)金とく　現場再訪ルポルタージュ中部「イタイイタイ病～現代への警告～」は、2013 年１２月の企業側と被害者側との合意を機に出てきた未公開資料を基に制作された番組で、学ぶことが多かった。1972 年の高裁判決のあと、日本経済が不景気に陥ったためと、企業を守るためという２つの理由によって、政府の態度が被害者にとって厳しいものに変わったという話だった。時代的な背景としては明らかなことだろうが、２つの理由を政府を相手にした裁判の中で立証することは難しいだろうと思って見ていた。多少、情緒的に番組が作られたのではないかという気がす

る。内容に同意はするが、立証という観点で見ると疑問が残った。

○　３月６日(金)「忘れない　未来のために　いま、選択の時」(総合　後7:20～8:43中部ブロック)を見た。第１部「被災地・被災者のいま」では、被災者に今できることはなにかという問いへの記者の実感を伴った回答が「忘れないことだ」であり、第２部「防災体制の選択」での結論は「難しい」であった。黒崎めぐみアナウンサーとゲストとの対話は被災地の現況を哀れむだけもので、名古屋大准教授の話も震災当初から言われている一般論に終始していた。胸に迫るメッセージ性もなく、放送自体が形骸化しつつある印象を持った。そもそもスタジオにいるキャスターもゲストもほとんどが直接的に被災地に触れていないため、話が全て伝聞、感想でしかなく、現実味が感じられなかった。視聴者に忘れないでいることの大切さを訴えるのであれば、キャスターやゲストは現場に赴き、実感を通して現状や課題を訴えるなどの覚悟が必要なのではないか。自分自身も含め被災地との向き合い方を見直すべきタイミングに来ているように思えた。

○　２月２２日(日)ＮＨＫスペシャル「腸内フローラ～解明！驚異の細菌パワー～」を見た。本屋に行くと関連書籍が多く見られ、改めて関心の高いテーマだと思った。“腸内フローラ”とは、腸内細菌の生態系のことだそうで、美容や健康、人間の性格までもつかさどっているということに驚いた。ゲストのパパイヤ鈴木さんが「性格を直すには、まずは大豆を食べなさい」と言っていたのがおもしろかった。老化や肥満、がん、糖尿病などさまざまな病気などにも影響することも知った。アメリカのある重症患者が、便微生物移植という便を入れ替える治療法で病気が治ったと紹介していた。性格もよくなって、病気も治るなら、多少気持ちが悪い治療法でも我慢するかと思いながら見ていた。

○　３月１日(日)ＮＨＫスペシャル「史上最大の救出～震災・緊急消防援助隊の記録～」は、阪神・淡路大震災をきっかけにできた緊急消防援助隊を取り上げたもので、このような地方組織があることを初めて知った。東日本大震災の際には、発生直後から現場に入り救助したそうだ。命懸けで救助したにもかかわらず、もっと多くの人が救えたはずだと反省する隊員のことばに、大変立派だと感じた。屋根の上で助けを待つ被災者が、自分よりももっと危険な人を先に救助してほしいと言っていたという話には、日本人として誇らしく感じた。これだけの記録映像がよく残っていたと思う。震災を風化させないためにもこのような特集を今後も継続して放送してほしい。

○　３月９日(月)ＮＨＫスペシャル「もう一度“ふるさと”を　～岩手・陸前高田の４

年間～」(総合　後 10:00～10:49)を見た。市の中心部の大町商店街は、震災により４割の方が犠牲になったそうだ。お菓子屋さんや居酒屋さんなどが、ふるさとを残そうと努力する姿に感動した。また、４年間にわたって取材し続けたことに感心した。行政への取材も加わるとさらに内容が厚くなったのではないか思う。

○　３月１１日(水)ＮＨＫスペシャル「“あの日の映像”と生きる」(総合　後 10:00～10:49)を見た。津波が来た時、自らは高台に行き助かったが、別行動をしていた父親は亡くなってしまったという男性は、避難途中の父親の姿を映す映像を見つけ、父の最期の行動を知ることができてよかったという。撮影した青年は、そのとき撮影をしてよかったのか、ほかに何かができたのではないかと葛藤を続けてきたが、遺体を見つけることができ感謝しているとの遺族のことばに、青年がどう感じたのかよく伝わってきた。会社に残った自分が助かり、避難させた家族が亡くなったという男性は、震災当日の午前中には家族で子どものお宮参りに行っていた。午前の幸せな映像と、午後に撮ることになってしまった津波の映像、幸不幸２つの映像を見たときは、とても同じ日の出来事には思えなかった。津波で流される自分たちの映像が撮影されていた夫婦は、その映像を使い、記憶を風化させないために自分たちの経験と命の尊さを伝える活動をしている。次の世代に伝える大切なことが映像によってリアルなものになり、また、映っている側と撮っている側両方に違った思いが生まれてくることも教えてくれた。今後も震災の記憶を風化させないよう、災害の映像を放送していってほしい。

○　３月１４日(土)ＮＨＫスペシャル「世界″牛肉″争奪戦」は、中国台頭で進む牛肉の消費拡大、飼料である大豆取引の相場の不確実性などを取り上げており、食料の奪い合いが世界規模でどう行われているかがよく分かった。商社の交渉現場を軸に、世界各地での映像が加わった構成は、ドラマ性もありながら、現状や課題が良く理解できる内容だった。圧倒的な消費量が武器の中国、価格が全てと言うブラジルと対峙(じ)する日本の商社マンの姿から、現状の深刻さが伝わってきた。

○「ドキュメント７２時間」をよく見ている。２月２０日(金)「赤羽・おでん屋エレジー」は、知らない世界が広がっていておもしろかった。おでん屋を訪れる人たちの人間模様が見られ、皆、頑張って生きているのだと励まされた。定点観測のような演出もおもしろい。ナレーションの西田尚美さんの声もとてもよかった。

○　２月２２日(日)サキどり↑「“山のやっかい者”を資源に変えるゾ大作戦！」、３月１日(日)サキどり↑「じわじわ来てるョ！“ジビエ”ブーム」を見た。全国で野生動

物による農産物の被害額は200億円近くに及ぶとのことだ。私の住む地域でもイノシシが殖え始めた。驚異的な増殖力のイノシシに対して、ハンター不足が大きな問題で、国がハンター育成に積極的に取り組んでいる様子が紹介されていた。また、捕獲した野生動物の肉をジビエ料理として広めようと活動しているシェフも紹介されていた。イノシシの肉やシカの肉はまだ一度も食べたことがないが、ＶＴＲの中でみんながおいしそうに食べていたので、ぜひ一度食べてみたいという気になった。伝統肉協会やシェフたちの努力でジビエ料理が少しずつ広まりつつある中で、野生の肉が流通し食卓に上るには安定供給や安全性などの面からまだ大きな壁があるとのこと。今後、法律の改正や企業参入などで状況が変化していくと思う。引き続き取り上げていってほしいテーマである。

○　２月２５日(水)しこく８「学生俳句チャンピオン決定戦！～２０１４“俳句戦国時代”～」(総合　前 2:15～3:28)は、全体的なしつらえや展開、少し変なキャラクターの学生たちなど、民放のような演出だったが、俳句を詠むだけにもかかわらず１時間以上見飽きることがなかった。進行役のオジンオズボーンさんが上手に学生に俳句に込めた気持ちを聞き出したり、俳人の夏井いつきさんが分かりやすい解説をしたりなど、視聴者の関心を高めるおもしろいアイディアにとんだ番組だった。四国４局の制作だが、全国放送レベルのクオリティーで大変丁寧に作られており感心した。

○　３月３日(火)ひるブラ「若者“かがやく”ガラスの町～富山市～」を見た。なぜ今、富山でガラスかという疑問はあるが、ＮＨＫの全国放送で取り上げるということということは、大きな反響があり、その地域にとってはとてもありがたいことだと思う。北陸新幹線の駅舎が１４日にオープンしたが、そこにも、富山のガラスが使われているということを伝えていた。県外の人だけでなく、地元の人たちも、番組を見て地域に関心を持つというのも番組の影響力だろう。富山でガラス造形が始まって３０年。多くの若い作家が活動している。いわゆる観光地のガラスでもなく、工場のガラスでもない、伝統工芸にもなってない“ガラス造形”というものを取り上げられる効果というのは大きいと思う。テーマにふさわしいゲストを選んでいるのか、ゲストがどのくらい取り上げるテーマを事前に理解をしているか、取材される側の意をきちんと生放送の中で表現できているのか気になるところもある。視聴者にどう伝えていくのか、ゲストやアナウンサーの力量が試される番組だと思う。

○　３月３日(火)クローズアップ現代「人間は不要に?“人工知能社会”の行方」を見た。後半の自動運転の話など、どんどん便利な社会になっていくというのは分かるが、前半の人工知能が新聞記者の代わりに文章を書くという話は、この先どうなっていく

のだろうと思った。どれくらいのレベルの文章を書いているか知らなかったが、バスケットボールの試合のシュートシーンから、過去の記事を検索し、成功率が何パーセント、何パーセントを切ったらこの人がスランプなどという記事を一瞬にして人工知能が書いていることには大変驚いた。今いる新聞記者の仕事の何割くらいをコンピューターが行うようになるのだろうかと不安を抱いた。自分のしている仕事がこれからコンピューターに取って代わられどうなるのか、不安を覚えた人もが少なからずいたであろう。人間のやることはよりクリエイティビティーの高い仕事、判断が必要とされる仕事に変わっていくとのこと。ためになる内容だったが、社会全体をいかにして方向づけるかという議論をもう少し深めるとさらによかったと思う。

○　３月１０日(火)クローズアップ現代「論文不正は止められ　るのか～始まった防止への取り組み～」を見た。東京大学で分子細胞生物学に関して大規模な論文不正があり、１５年間で３０億円もの研究費が費やされたことから、論文不正に対していろいろな対策が考えられているということを取り上げていた。対策の一つとして、文部科学省が倫理に関するガイドラインを出し、また、倫理観向上のためにｅラーニングなどの手法も使われるようになったとのことだが、このようなことは何の役にも立たないと思う。不正を働くのは研究者の心の問題。いくら正しいことを説いても悪いことをする人はする。むしろそのことを明確にすることが重要だと思った。東京大学では実験データを全部保管することを義務付けたとのことで、後に検証するときにも非常に役に立つと思う。自分の論文のデジタルデータを全部公表するということも重要だと思う。画像の解析ソフトが不正を見抜くということを紹介していたが、そのようなソフトは大いに進歩してほしいものだと感じた。全体から考えると不正というのはごく一部の話だと思うので、正当な研究がきちんとなされているということも伝える必要もあるのではないかと思った。

○　３月４日（水）「あさイチ」を見た。今は、第４次焼き芋ブームなのだそうだ。これまで焼き芋といえばベニアズマなどホクホク系が中心だったが、安納いもなどねっとりとした甘みの強いイモが出てきたことが一つの理由らしい。もう一つは、電気式自動焼き芋機が出てきて、手軽にうまくできるようになったことだそうだ。女性に関心の高い話題をうまく取り上げていたと思う。もう一つの話題は、「ＥＰＡ」と「ＴＰＰ」についてで、「ＴＰＰ」は広域型で「ＥＰＡ」は２国間だという説明していたが、実際は、ＴＰＰは“広域型のＥＰＡ”だというほうが誤解を生まないと思う。経済連携協定の広域型がＴＰＰであることをきちんと解説してほしかった。また、「ＥＰＡ」と「ＦＴＡ」は勘違いされやすいので、「ＴＰＰ」と合わせて３つを並べて解説すると分かりやすかったのではないか。輸入品が安くなるという利点を強調してい

るように感じた。ＴＰＰを結べば食糧難のときに優先的に食糧を譲ってくれるなどという簡単な話ではない。ＴＰＰの中に含まれるＩＳＤ条項という訴訟の問題や、先にＦＴＡを結んだアメリカと韓国の現状など、世界の動きにも目を向けて、視聴層に分かりやすい解説をしてほしかった。

○　３月８日(日)日曜討論「東日本大震災から４年“復興加速”の道筋は」を見た。被災地の各知事と復興大臣らによる討論で、福島の原発関連の処理及び３県の住宅問題以外は順調に復興が進んでいるとのことだった。実際に住宅問題は遅れている。津波によって流され土地がない、移転するにも住民の合意形成が得られないなど、さまざまな問題が存在する。県、市町村がそれぞれ取り組むがそこに法律の制約もある。今後、同じような大規模災害が起こったときに、本当に大丈夫なのか。まだ仮設に住んでいる人が大勢いる。被災者に早く安心できる住居を提供するためにも、さまざまな問題を考え直す必要があるのではないかと思う。今後も、住宅問題にスポットを当て、番組で取り上げていってほしい。

○　３月１３日(金)ファミリーヒストリー「片岡鶴太郎～羽　子板と闇市の恋 下町・泣き笑い物語～」を見た。片岡鶴太郎さんは、俳優で元プロボクサーで芸人、そして、感受性豊かな芸術家というイメージだった。片岡さんは、自分がどうして４０歳を過ぎてから突然絵を描くようになったのか疑問だという。本人に代わってその人の歴史をさかのぼりそのルーツをひもとくというのが「ファミリーヒストリー」のおもしろさだと思う。しかし、今回、なぜ絵を描くようになったのかを探って、先祖が羽子板の絵師だったからというのは、少し唐突だった気がする。絵を描くきっかけになった何かはあったと思うので、そこのところが知りたかった。

○　このところ北陸新幹線の金沢開業で民放もＮＨＫも再放送を含め多数の関連番組を放送していた。確かに注目されており多数紹介されるのは理解できるが、ちょっと多すぎはしないだろうか。全国放送なのか中部ブロック放送なのか、または県域放送なのかは分からないが、とにかく北陸新幹線の話題が多かった。

○　３月８日(日)小さな旅・選「とと楽の港町～石川県　輪島～」(総合　前8:00～8:25中部(除く静岡))を見た。再放送ではなく「選」としたのはなぜなのか気になった。

○　３月１１日(水)探検バクモン「北陸新幹線のはじめか　た。金沢開業ＳＰ」は、新幹線車両や乗務員のメカニックな面からの視点で番組を構成しているところが新鮮

で楽しく見ることができた。

○　３月１２日(木)あさイチの「ＪＡＰＡなび」のコーナー　は、長野・新潟・富山・石川４県のリレーという形式で構成されていた。１県や１か所といった形での紹介となりがちなところ、４県が連携していた点が観光振興からも望ましいと感じた。

○　２月２０日(金)大科学実験「立て！トラック」を見て、やはりこの番組はすごいと思った。この回の実験は、トラックを１点でどうやって立たせるかというもの。ナレーションの細野晴臣さんもすばらしい。

○　Ｅテレの「お願い！編集長」は、視聴者からのリクエストで過去に放送された番組を放送するというもので、２月２１日(土)は、1991 年に放送された「まんがで読む古典　源氏物語」を紹介していた。番組構成がとてもおもしろく、加賀美幸子さんならぬ「加賀美辛子」なる人を登場させたり、ほかの番組をおもしろくうまく取り入れていて、懐かしくも新鮮な気持ちで見た。ネットでリクエストを募り、100 人に達すると再放送してくれるという企画は、視聴者の声で過去の番組を放送化するというもので大変おもしろい。もっと幅広く知ってもらえるとよいと思った。

○　２月２１日(土)ＥＴＶ特集「薬禍の歳月～サリドマイド事件５０年～」は、被害者それぞれが障害や差別、家族の問題を抱えつつも乗り越え、力強く生きている様子がインタビューを通して丁寧に描き出されていた。過去と現在、個人と社会を行き来するなどメリハリのある構成だった。インタビューに答える被害者が皆、自己憐憫（れんびん)がみじんもなく、人が生きる意義や価値をさまざまな形で発露体現しており、人間としての魅力や高邁（まい）な人間性にあふれていた。サリドマイド薬禍という社会問題のみならず、人間の生き方を問う、迫力に満ちた見応えある感動的なドキュメンタリーだった。

○　２月２２日(日)日曜美術館「自分のことばじぶんの書　　～書家で詩人・相田みつを～」(再)は、生涯、書とともに生き、自分の書を求めて、葛藤を続けて、独特の世界を作り上げた相田みつをを取り上げたもので、興味深く見た。相田さんが、古い伝統に縛られている書の世界から離れ、師匠を持たずに書の世界でやっていくことを悩み、それを１人の女性書家に話していたことや、１８歳で生涯の師となる禅僧・武井老師と出会い、老師から学んだことが原点になっているということなどがよく分かった。仏教の教えに向き合い、もがき苦しみ、そこから生まれたことばだから人の心に響く書になる。書家として独自の道を進む半面、家族を養うためになりふり構わず仕

事を求めて、包装紙のデザインをして収入を得ていたということなども初めて知った。彼の夫として、父親としての姿も取り上げるとさらに楽しめたと思う。

○　３月１９日(木)「考えるカラス～科学の考え方～」を見た。ナレーションの斎藤工さんがとてもよい。改めてそのキャスティングに納得した。内容も、今回は、鉄球とマグネットの動きをクイズにしていたのだが、新たな発見があり、“なぜ”と考えさせる手法が非常におもしろいと思った。

○　３月１１日(水)ニッポンぶらり鉄道旅「発見！日本一　明知鉄道」(再)(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 3:00～3:29)は、岐阜県の明知鉄道を取り上げ、俳優の内野謙太さんが鉄道沿いの日本一を探すという内容だった。名産の自然薯（じねんじょ）は、地元の人が一生懸命に説明していた姿が印象的だった。地域が誇るシクラメンは、高校生と農家が一緒になって新しい品種を開発する姿に驚いた。明智と岐阜県をシクラメンで元気にしたいと言う学生の笑顔が大変よかった。恵那の景観、里山も日本一。一本道が続く農村、うっすらと雪が積もった田畑は、趣があった。かやぶきの家をみんなで守っていたのが印象的だった。山岡町からは寒天料理を紹介していた。手間暇をかけて寒天を作る作業はすばらしいと思った。終点にある日本一大きな水車では市場が開かれ、農家の人の生き生きとした表情が映し出されていた。身近にこんなに日本一があるということに驚いた。地域のよさをうまく引き出したよい番組だった。

○　３月１４日(土)ザ・プレミアム「京都 ふしぎの宿の物語」　は、雑誌編集記者役の外国人アットキンさんが日本のおもてなしとは何かの答えを見つけるという内容だった。もてなしとは、何かを慈しむこと、分かち合うこと、と導き出した答えが印象的だった。

○　３月１２日(木)英雄たちの選択「大敗北が家康を天下人に　した　知られざる三方ヶ原の戦い」を見た。徳川家康は今年没後 400 年で、民放含め多くの関連番組が放送されている。その中で、この番組では家康の負けから学ぶという独自の切り口で、興味深い内容だった。ゲストのバランスもよく、それぞれの主張を議論する様子を楽しく見ることができた。負けから学ぶ家康の姿に我々現代の人が学ぶべきことは何なのかを考えさせられるよい番組だった。

○　３月１５日(日)プレミアムドラマ「４６１個の“ありがとう”～愛情弁当が育んだ父と子の絆～」は、福島の原発２０キロ圏内に故郷があるシングルファーザーのミュージシャンの話をドラマにしたものだった。思春期の子どもにどう接していったのか。

高校に行かない時期もありながら、立ち直っていく子どもと、毎日、461 個もお弁当を作り続けた父の姿にとても感動した。父親役の別所哲也さんは、あまりミュージシャンらしく見えなかったが、息子役の子がかわいらしく、キャスティングはよかったと思う。父親が息子に対してどんな思いで弁当を作り続けたのかを考えると、同じ父親としてほかのいろんなエピソードも知りたくなった。あくまで今回はドラマとして描かれていたが、息子が実際にその味をどんなふうに感じたのかというドキュメンタリーなども見ていたいと思った。決して華やかではないが、大切なものは何かを教えてくれる素敵なドラマだった。

○　３月１４日(土)東海北陸文学紀行「わたしの好きなふるさとの風景」(ＦＭ　後7:20～9:00　中部ブロック)を聴いた。井伏鱒二の作品などを各局のアナウンサーが朗読するもので、音楽も入れた構成で、長い時間だが聴きやすかった。普段テレビで見ているアナウンサーの声をラジオで聞くのはとても新鮮だった。ただ、アナウンサーであるがゆえに教科書を読んでいるような感じの人もいて、通常のアナウンス技術と朗読とは別物なのだと感じた。役者さんが語り手となる番組も多くあるが、それぞれ味のある声と表現力で引きつけられる。新しい朗読のスタイルを追求しながら、これからも取り組んでいってほしい。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２７年２月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

２月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２７年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について説明があった。引き続き、「平成２７年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」の諮問にあたって、説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、業務報告および３月の番組編成、放送番組モニター報告、視聴者意向について説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　森棟　公夫　（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長　　松本　耕作　（加賀味噌食品工業協業組合理事長）
委員　　大島　宇一郎（中日新聞社取締役管理局長）
　　加藤　勇二　（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
　　小寺　功子　（三重県漁協女性部連合会会長理事）
　　佐野　俊和　（コマツサービスエース(株)代表取締役社長）
　　立花　貞司　（トヨタホーム（株）取締役会長）
　　田中　章義　（歌人・作家）
　　中村　智景　（四季料亭「助六」女将）
　　野田　雄一　（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）
　　長谷川明子　（日本ビオトープ管理士会中部支部会長）

（主な発言）

＜「平成２７年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　「国内放送番組編集の基本計画」にある「ビッグデータの多角的分析を活用するデータジャーナリズム」という部分について、“ビッグデータ”という概念が世に出て、今は、その定義が確立してきている時期にある。通常のデータベースでは処理できないデータを解析するという意味では、これまでの放送で扱われてきた“ビッグデータ”は、非常に少ないサンプル数のものをグラフにしたりする程度でかなり失望感を覚えることが多かった。今後は、ビッグデータの定義に基づき番組に反映させていってほ

しい。番組でデータを出すときには、凡例をきちんと示し、データの根拠や検証をしっかり行い、これからのデータジャーナリズムのさきがけとしてＮＨＫらしい番組を制作していってほしい。

○　この何年か、Ｅテレの幼児・子ども向け番組の編成が気になっている。小さい子どもがいる親から、Ｅテレの朝の番組は何とかならないだろうかという声をきくこともある。ＮＨＫが幼児に見せる番組としてふさわしいのかどうか。７時台の「シャキーン！」や「すすめ！キッチン戦隊クックルン」は、テンポがとても速くガチャガチャした印象である。食育は大切なテーマだが、“戦隊”ということばを毎日、幼児に見せることに違和感を覚える。新年度からは、加えて「ゆうやけシャキーン！」も始まる。幼児番組を、たとえば「ＮＨＫスペシャル」などの制作者が見たらどう思うのか、高齢者に親しまれている「ラジオ深夜便」の制作者が祖父母の視点で、孫たちに見せたい番組だと思うのか、さまざまな角度から考えてほしい。「おかあさんといっしょ」などすてきな番組もたくさんある。新しく道徳が教科になるにあたってできる「ココロ部！」は、おもしろい試みで、どんな番組になるのか楽しみにしている。今後、Ｅテレの子ども向け番組、特に、朝のレギュラー番組について、重点的に改革してほしい。

○　ＢＳプレミアムの午後６時台は、かつて民放で放送された番組なども編成し、特色を出している枠で、「フランダースの犬」や「あらいぐまラスカル」など、もう一回見たい番組、「幅広い世代が楽しめる知的エンターテインメントチャンネル」というに値する番組が編成されている印象だった。しかし、新年度編成の「美少女戦士セーラームーン」は、果たしてふさわしいコンテンツなのか。ＮＨＫがなぜ、数あるコンテンツの中からこの番組を選んだのか、内部の評価はどうなのか気になった。「セーラームーン」も“戦士”、「キッチン」にも“戦隊”という点も気になる。子どもたちにぜひよい番組を届けてほしい。

○　編成計画を見ると数多くの番組があり、実際に見ている番組はほんの一握りだとわかる。国際放送も含め各波のチェックをきちんと行っていくために、モニターなどさまざまな工夫をこれからもしていってほしいと思う。

○　新設番組「アニメ　英国一家、日本を食べる」は、食をアニメ化して取り上げることで内容が分かりやすく見やすいものになるのだろうと期待している。しかし、放送時間帯が午前０時４０分から１時で、視聴ターゲットをどのように捉えているのか気になった。昼間の時間帯に再放送するなどの検討をしているのかぜひ知りたい。

（ＮＨＫ側）

「アニメ　英国一家、日本を食べる」は、英国人が日本の食を異文化の視点で見ていくという内容をアニメで描く新しいタイプの番組であり、トライアルとして深夜に編成した。視聴者の反響などを見て違う時間帯での再放送も検討していきたい。ＢＳプレミアムの子ども向け番組の編成については、衛星波は地上波と比べ、かなり個性の強い番組でないと、視聴者の獲得が難しいという事情がある。幅広い視聴者に接触していただくために、なるべく多彩な番組を編成しようとしているという点をご理解いただきたい。Ｅテレも、子どもたちに何をどう伝えたら届くのかというところをさまざまに試行錯誤している。データジャーナリズムについては、総合テレビの日曜日の夜に、データジャーナリズムを生かした番組を新設する。これまでよりさらに分析力を上げて、取り組んでいきたい。

＜「平成２７年度中部地方向け地域放送番組編集計画（案）」について＞

○　愛知県はモノづくりが盛んで、観光といえば産業観光というイメージが強いが、歴史という魅力ある観光資源も有する所である。三英傑を輩出した土地であり、長久手や桶狭間という歴史的に有名な古戦場もある。しかしながら、そこへ行っても資料館などの施設が充実しておらず、観光客を集めるインフラが十分にはできてない。いろいろな機会に地域の良いところを発信することで、資料館ができ、あるいは土産物屋ができという話に発展してくると思う。観光ＰＲだけの問題ではなく、愛知県をぜひ歴史という視点からも捉え、その魅力を積極的に放送で伝えてほしい。

○　各局の編集計画に「公平」ということばが多く使われている。選挙報道では公平は大切な要素だと思う。一方で、世の中の主流派ばかり報道するのではなく、少数派や社会的弱者への温かい視点や彼らに寄り添う姿勢をもっと表してもよいのではないかと感じた。独り暮らしの人や声を上げづらい立場にいる人の思い、マイノリティーの人たちの現状を、地域の放送局だからこそ、耳を傾け発信していってほしい。

○　各局が自然のすばらしさを番組に生かしていこうというところに共感する。大自然のすばらしさは、番組を通して視聴者に伝わりやすいと思うが、一方で、例えば、自分たちが食べる米はどう作られているのかなど身近なことは意外に知らない人も多

い。水田の再生への取り組みなどの事例と合わせて伝えることで、未来の自然環境を考えるきっかけになればとよいと思う。自然環境の再生や保護の現場は、実は、あまり脚光を浴びておらず、高齢者の方々を中心に細々と行っているのが実情なので、ぜひ、地域放送で取り上げてほしい。

○　テレビの番組表から事前に番組情報を確認するときに、その番組がどこの放送局制作の番組かが分かるとありがたい。録画予約をする場合にも役立つ情報ではないかと思う。

○　深夜の番組をよく見ている。せっかく２４時間放送しているのであれば深夜の時間帯をさらに充実させてほしいと思う。録画して見ることもできるので、全国の視聴者に、ローカル放送したよい番組を積極的に提供してはどうか。深夜の枠を活用しうまく全国放送とローカル放送を連動させ、地域から全国に発信していければよいと思う。

○　１つの県だけを見ても、県内の各地域ごとに特色ある行事や祭り、文化がある。有名な観光地も取り上げつつ、あまり知られていない小さな町などにも焦点を当ててほしい。県内をつぶさに、かつ、幅広くさまざまな視点から取り上げられるのも地域放送ならではだと思う。

○　自分の住む県でもまだまだ知らないことが多い。県内の隅々まで、小さなことでも取り上げ、伝えていってほしい。逆に、自分の住む近くの町や知っているところがテレビに映っていると、とても親しみを感じる。地域放送の特性を生かした番組作りに期待している。

（ＮＨＫ側）

愛知県には、魅力ある観光資源が多くあると思う。行政や経済界、市民による具体的な取り組みや動きがあれば、ぜひ、取材し発信していきたい。選挙報道における公平･公正はもちろんのこと、さまざまな場面で少数意見を取り上げるということも公平・公正な放送をしていく上で大切なことだと理解している。地道な活動をしている地元の団体や人を取り上げたり、知られざる物に焦点を当てたりできるのは、地域放送の特長でもある。深夜編成については、ローカル番組を深夜に全国向けに放送することもあるが、各局の側がもっと視聴者に見やすい時間に編成してほしいと希望することも多い。また、放送設備の整備・点検のために各局が個

別に深夜の放送を休止する場合もあるので、ご了承いただきたい。総合テレビの「ろーかる直送便」という枠では、各地方局が制作したローカル番組を全国放送している。ぜひ各局の特色ある地域番組をお楽しみいただきたい。

○　諮問された「平成２７年度中部地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、番組審議会として原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２３日(金)みえスペシャル「あいまい　三重！？」を見た。三重県民に、三重県は東海地方なのか近畿地方なのか？と問い、各地域の代表の人たちが意見を交わした。東海だ、関西だと意見が飛び交う中で、伊勢の人は「伊勢は伊勢だ」と言い、「三重と名前を付けることがおかしい」という独特の意見が出るなど、結論は出ないが、とてもおもしろい番組だった。食文化から三重を探っていくところでは、「みそ」に焦点を当てていたが、これも、豆みそ、赤みそ、合わせみそ、米みそまであり、結論は出ず。「雑煮のお餅」も、やはり、角餅あり丸餅ありで、結局すっきりしない曖昧な結果に終わったのだが、それぞれの主張は三重県人としてはなるほどと思うことが多く興味深かった。番組の最後には、三重県は東海地方だ近畿地方だと決めなくてもいいのではないかというアンケートの結果をもとに、三重県は、それぞれのよいところを融合した文化を持った県なのだと結論づけた。県域放送だったが、大変おもしろい番組だったので、ぜひ、ほかの県の人にも見てほしいと思った。

○　１月１７日(土)「ウイークエンド中部」を見た。時期が年明けということもあり、中部各地の神事・奇祭・伝統行事が次から次へと紹介され、地域独特の地方色と、それを通して全体として日本らしい新年を感じさせる、見飽きることのない内容だった。福井のかき餅作りの中継や岐阜県郡上市の旅企画は、地元の人とリポーターとのやり

取りも大変自然で、日常の一部が上手に切り取られていたように感じた。取材の間に挟まれる道路情報や気象情報などの生活情報のバランスやタイミングもよく、また、川柳コーナーのアナウンサーとキャスターとのたあいのないやり取りにも適度なカジュアルさと一定の品があり、とてもＮＨＫらしさがあってよかった。週末早朝に見るには大変適した内容の情報番組だと思う。

○　１月１６日(金)ナビゲーション「水素がエネルギーを変える　～燃料電池車が切り開く未来～」について、発売されたばかりの燃料電池車について、車の機能や開発にまつわる技術的な紹介も興味深かったが、その社会的意義や国の政策についても大変分かりやすく網羅的に紹介されており、鳥瞰的に燃料電池を取り巻く状況を把握するのに大変よい番組だったと思う。特に、水素の社会的な普及が課題とされる中、水素活用について先進的なドイツの事例を複数の視点から、映像や現地取材を通して紹介していた点も、番組のテーマ訴求に厚みを持たせており、よかった。また、今回解説に当たった豊田太記者と大和総研の町井克至さんは、大変滑舌もよく、若いながら質問に対して的を射た回答を簡潔かつ適切にテンポよく答えていた。報道番組として質の向上に大いに寄与していたと思う。

○　１月２３日(金)ナビゲーション「あなたは悪くない　～詐欺　被害者　閉ざされた苦悩～」を見て、振り込め詐欺の被害件数や金額についての問題意識は持っていたが、詐欺被害者の自責による精神的な苦悩にまでは気が行き届かなかったので、振り込め詐欺の罪の大きさを改めて痛感した。実際の被害者への取材を通して、番組の中では被害者の苦悩をリアリティーをもって視聴者に訴求しており、この犯罪がもたらす目に見えない悪影響を上手に顕在化していた。振り込め詐欺の隠された犯罪性の高さと、犯罪に遭った人たちの救済が放置状態だということを、極めて明瞭に暴き出した、意義深い内容の番組だった。

○　戦後７０年となる今年は、戦争に関するさまざまな番組が放送されると思うが、１月３０日(金)ナビゲーション「戦争に翻弄された科学者～島田実験所　７０年目の真実～」は、大変興味深い内容だった。軍事技術と科学者の関係をテーマに、殺人光線の研究を推し進めるため、いかにして科学者を集めたのか、科学者と軍の関係者の共同研究を巡る思惑などを貴重な資料や証言から浮かび上がらせていた。遺族が持っていた資料からそれぞれの情報を結び付けて、過去の出来事を復元していくのだが、裏付けとなる資料や関係者の証言、緻密な取材があってこその内容だと感じた。戦争の経験を証言できる人たちがだんだん高齢になっていく中、戦後７０年というこの時期に、もっとこのような番組を増やしていってもよいのではないかと思う。戦後、科学

者たちは戦争目的の科学研究には従わないとし、兵器開発によって進められた技術は、生活に役立つ技術に転用された。しかし、科学は、軍事利用と民生利用の二面性を持っていることを改めて問いかけていた。２月９日(月)の午前７時４５分からの北陸地方のローカルニュースで、この番組を短くまとめた形で放送していた。ぜひ、全国にも展開してほしい。よいドキュメンタリーだったと思う。

○　２月６日(金)ナビゲーション「監督不在　勝利へのマネジメント　～日本一・星稜高校サッカー部～」は、大会直前に監督が入院して、そこから勝ち上がって全国制覇をしたと大きく報道されていた話だったので、期待して視聴した。概して高校生は、なかなか上手に話してはくれないと思うので、おそらく取材は難しかっただろうと思う。しかし、丹念に取材されており、コメントもきちんと取ることができていて、非常に分かりやすくストーリー性を持たせて作られていた。ゲストコメンテーターに経営コンサルタントを選んだのは大胆な試みだと思った。納得できる点もあれば、高校サッカーを一般企業に照らし合わせる違和感もあり、ゲストの選定はなかなか難しいと感じた。

○　２月１３日(金)ナビゲーション「専業主婦が生きづらい」は、身近なテーマであり関心を持って見た。なるほどと思わせる内容だった。働く女性を支援するためには「夫を早く家に帰してやってほしい」というコメントは、企業の側にとっても難しい面もあるが、真剣に考えなければいけない時期にきたのだと実感した。

○　２月１３日(金)ナビゲーション「専業主婦が生きづらい」はとても興味深いテーマだった。専業主婦を羨ましいと思う人もいるが、専業主婦が持つ社会からおいていかれるという不安な気持ちがよく分かった。結局は、専業主婦でも兼業主婦でもやはり夫の助けが大切だということも分かった。また、自分自身を認めてもらえることが、会社でも家庭でも、大事なことではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ナビゲーションについて、「戦争に翻弄された科学者～島田実験所　７０年目の真実～」は、今後、全国放送の展開も考えている。３月の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の特集で放送したうえで、また夏にもう少し長い時間で放送できるよう、追加取材を進めていきたいと考えている。「専業主婦が生きづらい」の回は、番組に対する意見をメールやツイッターで募集しているが、通常の３倍以上来た。特に当事者世代の、現役の専業主婦の方、兼業主婦の方、

その夫からも来て、「よく気持ちを代弁してくれた」という声がある一方で、「働いているほうが大変なので、もっとそっちを取り上げてくれ」、あるいは旦那さんから「気を遣っている夫のつらさももっと描いてくれ」という意見があった。このテーマについては、４月から中部域内で、この地域の女性の生き方を探っていく年間シリーズをお送りする予定だが、その中でも引き続き取り上げていきたいと考えている。「あなたは悪くない　～詐欺被害者　閉ざされた苦悩～」は、静岡局が年間通して夕方のニュース番組で取材を続けている蓄積が生きたものだった。反響も大きかったので、２月１９日（木）の「クローズアップ現代」で、追加取材をして放送する予定である。

○　１月２３日(金)金とく「グレートバリアリーフを名古屋に」は、リニューアルした名古屋港水族館が、生きたサンゴを育てる取り組みを取り上げたものだった。進行役のさかなクンは、その名のごとく、海や魚が大好きなのが伝わってきて、楽しく見ることができた。サンゴは植物ではなく、イソギンチャクなどの仲間で動物だということを初めて知った。また、水質や水量、光の強さ、共生する魚の種類まで選ぶというなかなかデリケートな生き物だそうで、飼育するのは難しいとのことだ。自然を人が再現する難しさをあらためて感じた。飼育員の奮闘ぶりは真剣そのもので感動した。生きたサンゴを飼育している水族館は、日本では少ないと言っていたが、実際にどれだけの水族館で取り組んでいるのか知りたかった。

○　１月２３日(金)金とく「グレートバリアリーフを名古屋に」　は、とてもよい番組だった。１点だけ分からなかったのは、サンゴはストレスを感じるとよだれみたいな粘液を出すそうだが、それが一体何なのか、説明してほしかった。これから名古屋港水族館もサンゴをもっと大きくしていってほしいと応援したい気持ちになった。

○　１月３０日(金)金とく「北アルプス　立山　祈りの山の四季」を見た。立山が霊山だということは知っていたが、それを女性の目線で体験していくもので共感した。布橋というあの世とこの世の境については、非常に重く深いテーマがそこにあるのだと思った。最後に、登山や山の自然のすばらしさも見せていて、ブロッケン現象という自然現象も見ることができた。とてもよい番組構成だった。金曜日の午後８時という放送時間なので、あまり重くなりすぎないよう少し明るい要素もあるとさらによかったと思う。

○　ドラマ１０「全力離婚相談」全７回を全部見た。主人公は弁護士だが、白黒はっきりさせるだけではなく、依頼者の相談に乗って歯車の外れかけた夫婦をちゃんとかみ合わせるようにして修復させる。依頼者の姿に自分を重ねながら、互いに理解しあえるよう元に戻す作業をしていくところがとくによかった。ただ、毎回、宮地佑紀生さんや中尾ミエさんが名古屋弁を使ってしゃべるところに何となく不自然さを感じた。ことさら名古屋らしさを出さなくてもよかったのではないかと思った。

○　ドラマ１０「全力離婚相談」は、夜、仕事から帰ってゆっくり神経を使うことなく見ることができ、毎回楽しみにして見ていた。特に最終回はおもしろかった。主人公の娘・佳苗の幼いときの誕生日の家族写真が出てきたときには、自分の家族のことも思い出した。出演者の不自然な名古屋弁は気になったが、それぞれの離婚エピソードも随所に出てくる名古屋の名所も、毎回、内容に工夫があってよかったと思う。

○　土曜ドラマ「限界集落株式会社」は、とても楽しみにして見ている。似たような葛藤を抱えている地方の小さな町や人は、たくさん存在すると思う。超過疎の状況に、最初、反町隆史さんはかっこよすぎる印象があったが、回を重ねるごとに反町さんの姿もなじんできた。地方の抱えている問題を正面から土曜ドラマで扱っていこうという方針には大賛成である。このようなドラマを多くの視聴者に見てもらえる土曜日の午後９時という時間帯に放送することは意義があると思う。

○　土曜ドラマ「限界集落株式会社」は、身近に同じような状況のところがあるので、注目している。多少、状況は違ってもこのようなテーマを取り上げてもらえるのはありがたい。

○　土曜ドラマ「限界集落株式会社」を見ている。主人公・正登役の反町隆史さんほか豪華なキャスティングで、果たして農業がテーマのドラマに合うのか疑問もあったが、違和感なく見られる。特に、娘役の松岡茉優さんは、清純な感じで、役のイメージにぴったりだと思う。実際に、日本で有機野菜を販売して生活することはなかなか難しい。インターネット販売をしたり、ブランド化してほかの農作物と差別化したりしても暮らしていくのに十分な値がつかず、有機野菜を育て失敗することは現実にもある。正登の父が言った「人は裏切られてもいつか許してくれるが、土は許してくれない」ということばには共感した。農業は土づくりが基本。生産過剰だからと一度農地をつぶしたら再生するのにものすごく大変だということをドラマを通してぜひ知ってほしい。また、豪雨の中、洪水で土が流れ、数少ない集落の人々が力を合わせて土のうを積んで、流出を防いでいる場面に、これがまさしく農村社会だと感じた。多くの人

にドラマを見てもらい、人々が助け合う社会を作っていく意識につながるとよいと思った。

○　１月１７日(土)アスリートの魂「ふるさとに誓う勝利　バドミントン　山口茜」は、勝山市出身のバドミントンの山口茜選手を取り上げていた。映像を含めて多くの情報から彼女の努力の在り方や成長をよく描いていたと思う。山口選手は、弱点を克服し、全日本で優勝する。地元の先輩たちとの練習やプレーの解説も非常に分かりやすくてよかった。彼女の表情や話ぶりは高校生らしく、これからも頑張ってほしいという気持ちになった番組だった。

○　１月２５日(日)ダーウィンが来た！生きもの新伝説「大追跡！“タチウオ千本刀”」を見た。タチウオは、海の中では群れを作って、千本刀のように立って泳いでいるという伝説があるとのことで、関心を持って見た。タチウオが立ち泳ぎしているときは魚群探知機にも映らないという。初めに、よく釣れるという豊後水道で撮影するもタチウオの千本刀が見られず、西伊豆でも見られず、やっと東京湾でタチウオの大群が一斉に立ち泳ぎを始めた姿が撮られたのだが、その姿は想像以上に美しく、見事で、まさに“タチウオ千本刀”というにふさわしい映像だった。穏やかな場所でしか立ち泳ぎをしないのに、なぜ潮の流れの激しい豊後水道で撮影をしたのかという点が疑問に残った。

○　１月２６日(月)クローズアップ現代「ふるさと納税　ブームが問うものは」で、人気過熱のふるさと納税、問われる税の本質を見た気がした。2008 年に導入されたふるさと納税は、もともと都市と地方の格差是正が狙いだった。しかし、昨年度は 130 億円の寄付があったが、６０％の自治体がお礼として特産品を送るなど、まるでギフトカタログのようになってきているとのことだ。北海道のある町では税収を超える額の寄付を受けたという極端な例も挙げられていた。その町はお礼として、霜降りの和牛を送っているそうだ。そんな中、政策で勝負する自治体も出てきたと埼玉県宮代町を紹介していた。町では寄付を林の整備に使うという。短時間ではあるが、民主政治における税の在り方を改めて考えさせる、よい番組だったと思う。

○　２月９日(月)クローズアップ現代「少年犯罪・加害者の心に　何が～“愛着不形成”と子どもたち～」を、大変関心を持って見た。昨今、「障害」と名の付く病気をよく耳にするが、「愛着障害」という病名は初めて知った。この病気の原因は、幼少期に親から虐待を受けるなど愛情を受けられなかったことにあるという。親の大切さを痛感した。３歳くらいまでは、子は船、親は港、港が安心していられる場所として機能

していることが大切だということばが印象的だった。少年犯罪があとを絶たないが、スキンシップから出てくるホルモン、オキシトシンが不足していると犯罪を起こすそうで、オキシトシンを投与して治療する取り組みがあることに大変驚き感心した。このような番組を見て、子どもたちを愛着障害にさせないようにしてほしいと思う一方、問題のある親は、おそらくこのような番組を見ないだろうとも思う。親だけではなく第三者が港になっていかなければいけないのだと実感した。

○　２月１２日(木)クローズアップ現代「今夜ももう一杯～酒場と日本人の新たな関係～」を見た。「クローズアップ現代」というと深刻な問題を取り上げることが多い。今回は、大衆酒場に集まる人々と酒という時代を映す鏡からグラス越しに現代社会を見る、という切り口がうまいと感じた。人と関わることが苦手で、自分の居場所がなかなか見つからないなどの問題を抱えている今の若い世代。大衆酒場に来て、人との関わり方、自分のいられる空間を見つける姿を捉えた内容で、なるほどと思わせてくれる番組だった。

○　２月１８日(水)クローズアップ現代「戸籍のない子どもたち　Ⅱ　どうしたら救えるのか」を見た。日本には、無戸籍の人が現在、533 人いるという。継続的にこの問題にスポットを当て、日本の置かれている現状を取り上げていってほしい。

○　１月２６日(月)プロフェッショナル　仕事の流儀「ラグビー日本ヘッドコーチ　エディー・ジョーンズ」を見た。彼の人間性や、外国人監督がいかに日本の気質に合わせて闘っていくかを知り、今の日本ラグビーが強い理由が分かった。人物を正面からだけでなく違う側面から映し出した番組は非常に見応えがあると思う。今年はワールドカップに日本が出場する。また、2019 年には日本でのワールドカップ開催が決まっている。この地域には強豪のラグビーチームもあるので、ぜひラグビーを取り上げていってほしい。

○　２月１日(日)ＮＨＫスペシャル「追跡“イスラム国”」を　見た。“イスラム国”の内情を知る関係者 100 人以上に取材し、“イスラム国”がどのように生まれ勢力を拡大してきたかをたどっており、現在に至るいきさつがよく分かった。全体を通して、その取材力に驚いた。中でも、“イスラム国”の幹部がシリアの部族の長と話し合い、油田の採掘に協力を迫るところや、イギリスで、パキスタン系の若者に“イスラム国”への支持を巧みに誘う場面は、どうしてこういう場面に巡り合えたのか、ぜひ裏話を聞きたいと思った。若者を教育し、自爆テロも辞さないという人材を育てている様子に、日本にいるから安全だということではないのだという危機感を感じた。

○　２月５日(木)地球イチバン「世界一オーロラに出逢える街　アラスカ・フェアバンクス」は、タレントのルー大柴さんがフェアバンクスに行って、４日間トライしてオーロラを見るという内容だった。３日目にオーロラが見えたが、緑色の渦状のものがぼんやり見えただけで、それが実態なのか、あるいはカメラの問題なのか、よく分からないが、美しいオーロラの映像を期待していただけに残念に思った。また、ルー大柴さんがわざわざ地元の人に、「あなたはオーロラを見たことがありますか？」と、軽い感じで聞いていた場面は、必要性を感じなかった。全体的に、物足りない内容だった。

○　２月６日(金)ファミリーヒストリー「羽田美智子～文化財を　建てた宮大工　祖父の戦死の真相～」を見た。先祖に、文化財となっている小学校を建てた宮大工がいたなど、本人も驚くような話もあった。羽田さんの祖父は３８歳のとき、戦地でマラリアで亡くなったそうだ。実は、戦友に薬をあげて、その人は生き残り、そのあと自らは病に倒れて亡くなってしまったとのこと。その生き残った戦友を、数少ない手掛かりから突き止めたのにはとても驚いた。その人の家族も羽田さんも驚いていた。その人は、８０歳まで生きたとのことだ。徹底した取材と調査で“ファミリーヒストリー”をひも解いていくところに番組のすばらしさを感じた。インターネットで簡単に検索できる時代、しっかりと自らの足で取材を重ね、資料に向かい調べていき映像化した番組は、とても見応えがある。改めて地道に取材することの大切さを感じた。ローカルでもこのような番組をぜひ制作してほしい。

○　２月４日(水)スーパープレゼンテーション「進化するｏｒｉｇａｍｉ」を見て、今の折り紙が、非常に再現性が高いことに驚いた。折り紙作家のロバート・ラングさんのプレゼンテーションはとても軽快で、ときに上手にジョークが混じっていて、感心した。

○　２月１１日(水)スーパープレゼンテーション「人はなぜ浮気をするの？」は、タイトルに引かれて見た。心理セラピストのエステル・ペレルさんが、セックスを真正面から捉えて、心理的な側面から夫婦やパートナーとの関係を考えるというものだった。ＮＨＫがＥテレで取り上げるテーマとしてふさわしいかどうか、局内でも議論があったのではないかと思うが、学術的な内容であり、評価できると思う。この番組は、プレゼンテーションを題材にしているので、英語訳の字幕と、パワーポイントを使って解説している部分の両方を追うのは難しい。視聴していて疲れてしまう。プレゼンテーションのしかたの勉強にもなり、関心の高い番組だと思うので、副音声を利用して日本語で聞けるようにするなどの工夫の余地がないか検討してほしい。

○　ＢＳプレミアムの深夜番組を見ている。「ＢＳ洋楽グラフィティー８０’ｓ」は、各年代のミュージックブデオをその当時の映像とともに流すもので、２月１日(日)の「Ｖｏｌ．７」は８０年代を取り上げ、バブル真っただ中の音楽を楽しめた。音楽に合わせて懐かしい思い出が走馬灯のごとく浮かび上がり、「よし頑張ろう」という気持にもなれる。深夜の時間にふとタイムスリップできる番組があるのは、視聴者としてはチャンネルを合わせやすいと思う。

○　「美しき世界の山々」は、ＢＧＭだけで、ナレーションなど　がない。美しい映像がとてもすばらしく、余分な音が入らないよさも番組にはあるのだと実感した。また、その貴重な映像は、教育現場などでも役立つのではないかと思った。

○　２月３日(火)イッピン「パチンと響く　かわいいレトロ～　京都　がま口～」を見た。番組を見て初めて、京都でがまロが生産されていることを知った。今の世の中、大量生産され、人件費の安い海外で作った物があふれている。物を作っている人の顔が見えない中、日本を見直し、物を大切にする気持ちを思い出すことができる番組だった。物や人にスポットを当てて、丁寧、かつ分かりやすくまとめられている。案内役の中越典子さんの進め方も、余計なことを言わず、作り手に寄り添いながら、思いを込めて伝えていて、とてもよかった。物作りのプロセスとそれに携わる人にスポットを当てたよい内容で、次の回も見てみたいと思える番組である。

○　風景とともに、松たか子さんの快いナレーションで始まる「新日本風土記」が好きで見ている。２月１３日(金)「漬物」は、全国の漬物の旅として、それを作る人たちの人生や思いが非常に強く伝わってくる本当にとてもよい番組だった。ひとつの漬物に対して日時をかけてあれだけの濃い取材ができるのは、地元に密着しているからこそできることだとつくづく思った。カブは、育つ場所でさまざまな色や形を変え、全国各地で漬物に使われる優れものだということ、野沢菜もカブの一種だと聞いて驚いた。「漬物の数だけふるさとがある」ということばが、心に残っている。これからも、このような、心がほっこりする番組をＮＨＫには制作してほしいと思う。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２７年１月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

１月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「東海北陸フレッシュ便　さらさらサラダ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	森棟　公夫	（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長	松本　耕作	（加賀味噌食品工業協業組合理事長）
委員	大島　宇一郎	（中日新聞社取締役管理局長）
	加藤　勇二	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	小寺　功子	（三重県漁協女性部連合会会長理事）
	佐野　俊和	（コマツサービスエース(株)代表取締役社長）
	立花　貞司	（トヨタホーム（株）取締役会長）
	田中　章義	（歌人・作家）
	中村　智景	（四季料亭「助六」女将）
	野田　雄一	（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）
	長谷川明子	（日本ビオトープ管理士会中部支部会長）

（主な発言）

＜「東海北陸フレッシュ便　さらさらサラダ」
総合　(月)～(金)　前 11:30～12:00）について＞

○　生放送で時間のコントロールは難しいと思うが、うまく収まっていた。トークは軽妙でよい。話題と話題のクッションになる映像がうまく入っていた。公開放送を見に来ている参加者の年齢層が高めだったのが気になった。１２月２２日(月)の「さらさらクッキング」は、クリスマス前ということで季節感漂う料理を紹介し、手際よく進行していた。今回は洋食だったが、中部７県向けになったため、特に和食は地域によって特色があるので、取り上げるには工夫がいるだろうと思った。ゲストが出演する回では、２０分という割に長い時間をつなぐのが厳しいのではないかと思っていたが、２４日(水)の「さらさらカフェ」は、スギテツさんがゲストで、話題も豊富でうまく

進行していた。出演者の選定は難しいことだろうと思う。金曜日のおでかけ企画「飛び出せ！さやか」で、２６日(金)は石川県七尾市を訪れていた。旅の部分はうまくまとめられていたと思うが、物を食べる場面でリポートするさやか結さんが「うまい」と言った場面は気になった。芸人さんとはいえ、できれば「おいしい」と言ってほしかった。番組後半は各県からおしらせと気象情報を放送しているが、どのようなパターンで気象情報が出されているのか気になった。

○　東海３県での放送を開始してから１２年続いている番組。１月１３日からの「北陸ウイーク」企画のようなテーマ性のあるものは、中部７県に放送範囲が広がったことを考えると効果的だと思う。以前、ゲストとして中村中さんが来られた回を見たが、中村さんがどういう生い立ちで、どういう思いを持っているのかにとても引き込まれた。ふだん、生放送を見られない人でもゲストによっては見ることもある。ゲストの選定には力を入れてほしい。ほかの番組などとの連動でプロモーションの要素が目立つことが、民放を含めてよくあるが、せっかく地域放送でゲストを呼ぶのであれば、四季折々の話題に関連する人や地域ならではの人に来てもらうこともよいのではないかと感じた。１月１３日(火)は、「猫寺で涙のガチ修行」と題し、福井県の寺を訪れる企画だった。体験する芸人さんが頭を剃ってまで頑張っているのは伝わったが、寺で修行するのに３日間の体験で“ガチ”な修行といえるのか。大げさな印象を受けた。１２年続いているということは、親しまれる理由があるのだと思うので、引き続き、よい放送を届けていってほしい。

○　「クッキング」「ライフ」「ゲスト」「おでかけ」などの企画を１週間の中で組んでいるとのこと。１２月２２日(月)のクッキングの回を見て、実際に挑戦してみた。材料をそろえ、うまく料理ができたと思う。２４日(水)のゲスト回に出演したスギテツさんのことは、この番組で初めて知った。その活動内容や確かな演奏技術に興味を持った。１組のゲストを取り上げるには、比較的長い時間を取っていると思うので、人材発掘や、ある人材を応援するという見せ方もできるのではないかと感じた。番組が終わり昼になると、民放も含め、全国放送でゲストが登場する番組が続く。地域ならではのゲストの取り上げ方もあるのではないかと思う。２６日(金)のおでかけ企画は、石川県七尾市を訪ねるものだったが、地元ゆかりの長谷川等伯という歴史上とても重要な人物を紹介するには、リポートのしかたが軽い印象を受けた。事前の取材を深めてほしいと感じた。また、銅像を見ての表現やそのほかの話題とのバランスなど、もう少し配慮があるとよかった。

○　平日午前というのは、ふだん、テレビを見る時間帯ではないので、新鮮な気持ちで

見た。軽快で肩も凝らず、リラックスして見られる番組づくりの趣旨が随所に感じられた。しかし、「おでかけ」企画での長谷川等伯については、取り上げ方が軽かったのではないかと気になった。また、ゲストの選定については、番組宣伝の印象が残った。ゲスト回の放送を連続にしないなどスケジュールを考慮したり、週１回にしてほかのテーマを入れるなど工夫の余地があるのではないか。ゲストの田中俊介さんがスパゲティーを作るというので注目して見ていたら、野菜を切って炒めただけの単純なものだった。それであればトークだけでもよかったのにと感じた。一方で、スギテツさんの回は、トークが少し息切れ気味だったのに、その割には、彼ら自身の演奏をじっくり聞く時間が取れていなかった。もう１曲入れてもよかったと思う。そのほか、地域の情報などについては、盛りだくさんで、分かりやすく説明されていた。お出かけ企画もぜひ七尾市に行きたいと思わせるものだった。さらに工夫を加えながら、よりよい情報を提供していってほしい。

○　「東海北陸フレッシュ便さらさらサラダ」はよく見ている。どちらかというと、特に見たい番組がないので、何かをしながら見ていても気にならないこの番組にチャンネルを合わせている感じだ。視聴者は主婦層が主だと思う。昼食の準備などをしながら気楽に見られるところが、長く続いてきた理由ではないか。後の時間帯には、民放のおなじみのトーク番組やバラエティー番組が控えている。その流れでの中で、主婦の方がチャンネルを合わせやすい番組なのだと思う。一方で、せっかくなら、もう少し印象に残る企画になればよいとも感じた。クッキングでは、たとえば、東海北陸各地ではお雑煮ひとつ取ってもそれぞれ特徴があるので、各地の比較をしてみるのもおもしろいと思うし、この地方の伝統野菜などを積極的に紹介するのもよいと思う。食文化の違いを取り上げていくと、放送時間帯の特性も生かされると感じた。旅企画は、民放を含めほかの番組でも多く存在するので、番組独自の目線で見た旅ができるとおもしろいのではないかと思う。ゲスト回は番組連動の印象があったが、視聴者にとっては、意外に、番組宣伝は受け入れやすい気がする。別番組の紹介にどれくらい重きを置いてトークをするのか、バランスをうまくとって組み合わせていってほしい。以前、火野正平さんが全国放送番組で東海地方を自転車で回ったことがあったが、例えば、そういう機会に地元の目線で話をきけたら視聴者にとっても興味深いと思う。全国放送との連動で「さらさらサラダ」にゲストとして来るというのもＮＨＫならではだと思う。

（ＮＨＫ側）　番組はＮＨＫ名古屋放送センタービル１階のプラザウェーブ２１から公開放送をしている。小学生から、お年寄りまで幅広い年齢層の方が観覧に来られている。ゲストによっても観覧者

の特徴が出てくる。ゲストの選定については、著名な方がよいのか地元で活躍する方がよいのか、ほかの番組の連動も含め、バランスを考えながらやっている。週２回、ゲストを迎える回を設けることで、スケジュール調整をしやすくしている面もある。地元を応援する意味でもこれからの活躍が期待される地元の方にもぜひ出ていただきたいと思っている。また、東海３県向けに放送していた期間が長かったので、静岡や北陸の方にも知名度が高まるよう、今後も１月１３日からの「北陸ウイーク」のようなテーマ性を持った企画を組んでいきたい。タイトルの表現が大げさだとの指摘があった。なるべく多くの人に見ていただきたいという思いからだが、さまざまな点を考慮しながら付けていきたい。「飛び出せ！さやか」のおでかけ企画については、あらかじめ万端の準備をして訪れるというよりも、行った先で出会った人や場所をきっかけに展開していく演出で、地元の人とのふれあいを一番のテーマにしている。事前の取材を深めながら、視聴者の理解を得られるようにしていきたい。料理については、これからも、地域による食文化の違いに注目する内容や季節感のあるもの、家庭で作ってみたいと思うものを取り上げていきたい。

○　初めて番組を見た。長く続いている番組で、しかも生放送ということで注目して見た。１２月２２日(月)は、料理人の中辻健太さんがとても爽やかでよかった。視聴者層に合っていると思った。ただ、データ放送でのアンケート調査に関するコメントには違和感を覚えた。２４日(水)のゲストのスギテツさんは、バイオリン演奏や新幹線などの乗り物と音楽の話が大変楽しかった。司会者の衣装など、もう少しクリスマスらしい季節感を出してもよかったのではないかと感じた。２６日(金)の七尾市の旅は、見たあとにすぐに行きたいと思わせてくれる企画だった。短くまとめテンポもよく、次も見たいという気持ちにった。ただ、食べたあとの「うまい」という表現は、気になった。

○　１２月２２日(月)の「クッキング」は、手軽にできる料理を紹介するとしながらも、実際には肉を２時間煮込むなど簡単なものではなかったのが残念だった。オレンジのワックスは塩でもんで取るなどの生活の知恵や、野菜や肉など食材の機能性を伝えたりしていくこともよいと思う。伝統野菜や地域の食文化はぜひ紹介していってほしい。データ放送での２択アンケートは、クリスマスの料理を自分で作るか作らないかだっ

たが、昨今、その間の少し手間を加えるという人も多い。２択だと投票が難しいのではないかと気になった。料理家の中辻さんは、視聴層に合っていると思う。２４日(水)のゲストの回は、スギテツさんの“冗談音楽”を楽しく見た。乗り物の話など一般的には分かりづらい話題もあったので、あらかじめ分かっていたなら、簡単な説明を入れるなどの工夫があるとよかった。本格的な音楽ももう少し聞きたかった。

○　１２月２２日(月)に取り上げた「牛肉の赤ワイン煮」については、画面いっぱいに材料が映っていて、手順が分かりやすかった。ただ、料理に時間がかかり、なじみのない食材を使用するなど、実際に作ろうとは思えなかった。もう少し身近で手軽な料理を取り上げていくほうがよいのではないか。２４日(水)のゲストの回は興味深くおもしろかった。２６日(金)の「飛び出せ！さやか」では、能登の“花嫁のれん”に興味を持ったが、もう少し詳しく紹介してほしかった。そのほか、市場を訪ねたところで紹介していた冷凍マグロを氷水でとかすという方法は、とても役に立った。

○　以前に、「さらさらサラダ」の公開放送の様子を見たことがあるが、現場が汚かったことが印象に残っている。番組を見ていても気になる。１２月２２日(月)の「クッキング」でも、調理器具の汚れが気になった。また、出演者のコメントに、料理番組として不適切な表現があり気になった。視聴者からの「オリーブの代わりにピクルスを使ってもよいか」という質問には、全く答えられておらず、そもそも質問を受け付ける必要がないのではないかと感じた。２６日(金)の「飛び出せ！さやか」は、地域を取り上げるにあたり事前知識がなく、長谷川等伯や花嫁のれんなど地域の宝に接した際の対応は、いかがなものかと思った。行く前にその地方の特徴的なことはある程度取材して臨んでほしい。地元の人への取材、市場での映像、また、ＶＴＲを受けての司会者のコメントなど、問題が散見された。全体を通して、番組進行役２人の“近所のおばちゃん”という感じのやり取りや、間に入る天気予報表示のデザインなど、細部へのこだわりやデリカシーに乏しい印象だ。番組全体の作りをもう一度考えてほしい。

○　総じて気楽に見られた。知らないことを紹介してくれ、温かみのある番組だと感じた。機会があればぜひ、歴史的な名勝や隠れた名医、たとえば各所の知られざる神社など、身近な所を紹介してくれるとありがたいと思った。

○　毎回いろんな工夫がされている。主婦が手仕事をしながら見るには十分な番組ではないかと思う。金曜日に「飛び出せ！さやか」という旅企画があるが、週末に旅行に行くことを想定すると、よい企画だと思って見ていた。さやか結さんは大須の芸人さ

んということだが、山本志保アナウンサーではできない表情や表現ができるので、バランスはよいのではないかと思う。間に入る気象情報について、地域区分などが分かりづらく、少し工夫してもらえるとありがたい。長く続いている番組であり、このような形で継続していってよいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）　さやかさんについては、ＮＨＫのアナウンサーでは言えないような表現や発言で親しみやすさを持ってもらいたいという思いもあるが、ときに不快感を与えることもあるというご指摘を受けとめ、番組作りに生かしていきたい。各局の地域放送と連動しながら各地の伝統野菜を紹介するということはぜひ取り組んでいきたい。番組後半の２択アンケートについては、データ放送を利用した双方向機能を活用してみようということで取り入れている。現在は、分かりやすい２択で行っているが、内容を工夫していきたい。ゲスト回について、ゲストの話を補足するため、あらかじめ準備できるものがあれば工夫していきたいと思う。料理については、２２日(月)はクリスマス前ということで特別なディナーになったが、普段は、家庭でも手軽にできるものを中心に紹介している。全体を通して、主婦の方が昼食の準備をしながら見られるような番組作りをしているということでご理解をいただければと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１２月５日(金)「静岡流　ふるさとの未来をつくる～みかんの里　Ｆ級グルメ甲子園」(総合 後7:30～7:55　静岡県域。中部では２１日(日)総合 前8:00～8:25で放送)は、とてもよい番組だった。高校生たちが、どんな思いで地域を盛り上げているかがとてもよく伝わってきた。彼らが取り組んだのが“Ｆ級グルメ”。Ｂ級グルメはよく聞くが、Ｆ級グルメは初めて知った。静岡の三ケ日に全国２０の県の高校生たちが集って自分たちの地域の食材を活用したアイディアを出し合うという内容で、地域放送だけではもったいないほどの内容だった。ぜひ、全国の人にも見てほしいと思った。

○　１２月２５日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で、中部で１２月５日(金)に放送したナビゲーション「農家に希望を～福井発“異端農協”の挑戦～」で取り上げた内容を、１０分くらいにまとめた形で紹介していた。情報を追加しつつ、うまくコンパクトにまとめられていると思った。このように、地方発の取り組みを全国放送

に展開していくことは、地方局の制作力や技術の向上にもつながっていくのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」のＪＡ越前たけふの特集企画は、「ナビゲーション」から展開したもので、全国ニュース用に再編集し放送した。「ナビゲーション」は、毎回、できるだけ全国放送に展開したいと考えている。「ＮＨＫニュース　おはよう日本」や「ニュースウオッチ９」あるいは「クローズアップ現代」といった情報・報道番組の編集責任者と連絡を取り合って進めている。全国放送への展開をしていくことで、地方からの情報発信を積極的に行うとともに、今後の制作力の向上や人材育成にも役立てていきたい。「静岡流」については、再編集し、全国放送で、１月３１日（土）「目撃！日本列島」の枠で放送する予定になった。

○　１月９日(金)「ＮＨＫナゴヤニューイヤーコンサート２０１５」(総合 後 7:30～8:43)は、コンサートの模様にうまく映像を取り込んで仕上げていたと思う。オーケストラに対しての歌手の声、バンドネオンの音がどのようにバランスよく調整され放送されているのかが気になった。コンサートで生で聴く音と、放送でテレビを通して聴く印象は、違っているので、このようなコンサートを収録した番組では、どのような工夫がされているのか興味を持った。

○　１２月２０日(土)スペシャルドラマ「妻たちの新幹線」(総合 後 3:10～4:23)を見た。年間 100 回くらいは東海道新幹線に乗っているが、その新幹線開通にあたってこんなエピソードがあったのかと大変おもしろかった。中盤、音楽が仰々しすぎる場面もあった。あえて音楽に頼らなくても十分ドラマチックで、感情移入できたように感じた。“妻”を描くならば、主人公の母親、千代の妻がどんな思いで夫を支えてきたかも見たかった。全体としては、スペシャルの名に値するすばらしいドラマだったと思う。

○　１２月２１日(日)ＮＨＫスペシャルメルトダウン　Ｆｉｌｅ．５「知られざる大量放出」(総合　午後 9:15～10:13)については、とにかく事実が知りたい、事実を描き出してほしい。その１点だけ、ぜひとも伝えたい。

○　１２月２６日(金)「ニュースハイライト２０１４」(総合　午後 7:30～8:42)を見た。2014 年を振り返り、あらためて暗いニュースの多い年だったと思った。構成要素が多

く、目まぐるしい展開になっていた。年末なのでもう少しゆったり見られるとよかったと思う。ニュースの本題となる部分が連続していた感じだったが、側面から見たエピソードなどを厚めに入れると見やすくなったのではないかと感じた。たとえば、エボラ出血熱の話題を取り上げたところでの、弟を失った兄が診療所で看病の手伝いを続ける話や、ノーベル賞の話題でネパールの山奥でＬＥＤが活躍しているという紹介などのようなエピソードをもっと入れてもよかったのではないかと思う。政務調査費は大事な問題だが号泣する県議の映像は本当に必要なのかなど、ニュースの優先順位も気になった。

○　１２月２６日(金)ＮＨＫスペシャル　シリーズ東日本大震災「３８万人の甲状腺検査～被ばくの不安とどう向き合うか～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。福島の原発事故の被災者で１８歳以下の子どもたちの甲状腺への影響について、その検査の実情を取り上げていた。検査は継続的に実施していくことにはなっているが、２回目からは３０％台の受診率しかないとのこと。近くの診療所で検査ができるようにしたり、検査の有用性を説明するなどして住民の考えが変化してきたとのことだが、番組を見て改めて福島の人々の心配な気持ちを理解することができたと思う。何か起こったときに正直に実状を伝える、異常があれば全力でそれに対して責任を持って対応していく姿勢が危機管理の大切なところなのだが、福島の現状を見てそのことを実感した。地方自治体レベルで対応するには限界があるので、将来、人々が動いていくことを考えると国がやらなければならないのではないかということには、そのとおりだと感じた。

○　１２月３１日(水)の「第６５回ＮＨＫ紅白歌合戦」は、演出を変え、いわゆる“歌合戦”から脱皮しようとしている印象を持った。各所からの中継などが入る時、ＮＨＫホールの観客にはどのように見えているのかや、ステージの転換場面など現場ではどのように進行しているのか興味を持った。テレビを見る側からすると、うまくできている感じがするが、現場の様子はどうなのだろうと思いながら興味深く見ていた。「ブラタモリ」は、１月６日（火）の特集番組に続き、来年　度からレギュラー放送するということで楽しみにしている。

○　１２月３１日(水)の「ゆく年くる年」(総合 後 11:45～１月１日(木)前 0:15)は、富山駅からの生中継があった。１月１日（木）には、高岡市の射水神社から中継があり、北陸新幹線開業を取り上げていた。今後もさまざまな番組で取り上げることがあると思うが、新幹線が来ることによってどういう対応をしなくてはいけないかをさまざまな角度から、これからも継続して伝えていってほしい。

○　１月１日(木)ＮＨＫスペシャル「京都御所～秘められた千年の美～(総合 前7:20～8:18)は、元日から大変すばらしいものを見ることができたと感じた。通常見ることができないものを、臨場感あふれる高精度の画像で、細部にわたって見られた。好奇心を満たす以上に映像から伝わってくる歴史の重みや、人々の思いに圧倒された。至宝の数々に加えて、その維持に関わる職人たちの存在や技量には、日本人としての誇りすら感じ感動した。貴重な至宝が現存することが歴史的価値以上に、人々の精神性や社会、文化に影響を及ぼすものだということを痛感する。今回の番組では紹介しきれなかった映像もあると思うので、今後もまた、見られる機会があるとよいと思う。

○　１月１日(木)ＮＨＫスペシャル戦後７０年　ニッポンの肖像　「プロローグ　私たちはどう生きてきたか」(総合　午後9:00～10:13)を見た。戦後の日本がどう変化してきたかを年代ごとに追っていく構成で、自分の経験ともだぶらせながら振り返ることができた。何が大切で、何が失われたのだろうかということを考えさせてくれるよい番組だった。1960年代の安保闘争、高度成長、新幹線開通、東京オリンピック、1970年代の万国博覧会、公害問題、オイルショック、昭和から平成になり、さらにさまざまな出来事が起こった。貴重な情報と映像が残っていて、まさにＮＨＫの強みだと思った。今後、戦争を体験した人たちは減っていき、何が失われて、日本がどうであったのかがだんだん分からなくなっていくだろう。今までの日本を振り返り、これからどうしていくのかを考えさせてくれるものだった。番組の進行に関しては、タモリさんが出ていたことはとてもよかったと思う。ちょうど７０歳になるということもあり、タモリさんがいたことで少し引いて全体像を見ることができた。本当は、若い人たちにこのような番組を見てほしい。若い世代にどのように伝えたらよいのかを工夫していってほしいと思った。

○　１月２日(金)「日本列島誕生～大絶景に超低空で肉薄！～」(総合 後 7:30～8:43)は、日本列島の成り立ちに関して、退屈になりがちな地質学的な話を、バラエティー形式を取りながら大変分かりやすく紹介しており、知的好奇心が大いに満たされる番組だった。地形の成り立ちを、具体的な日本各地の名所や絶景ポイントを映しながら説明しており、大変効果的であったと思う。また、無人機や４Ｋカメラの映像を基に精緻なコンピューターグラフィックを作成する測量方法など、最新技術を活用した映像にも引き込まれた。特に、西ノ島の無人機を使った撮影は、映像を基にした解析はもとより、300 キロメートルを無人で飛ばすこと自体が大変ドラマチックであり、見応えがあった。ハイビジョンから４Ｋ、８Ｋと高解像度化が進むごとに、映像が美しくなるという知覚的な価値以上の意義はあまり認識していなかったが、この番組を通して、改めてその活用の可能性や意義を実感した。

○　１月３日(土)「７０年です！のど自慢　全部見せます歌います　スペシャル」(総合後 9:00～10:13)を見た。「ＮＨＫのど自慢」は、楽しく見ている。参加者のパワーや応援の熱気を感じ、微笑ましく思う。番組では、予選会から本番当日のスケジュール、音合わせ、リハーサルの様子を紹介していた。参加者に連帯感があり、仲よく、本番を盛り上げていることが分かった。「ＮＨＫのど自慢」は７０年も続いているとのことだが、当時は鐘がなく、スタッフが横で「もう結構です」と言って歌唱を止めていたなどおもしろいエピソードも紹介していた。「ＮＨＫのど自慢」は、歌がうまい人だけしか参加できないという番組ではないところに、みんなに愛される魅力があると思った。

○　１月４日(日)ＮＨＫスペシャル　ネクストワールド　私たちの未来「第２回寿命はどこまで延びるのか」を見た。あと３０年もすると平均寿命 100 歳の時代が来るという。老化のメカニズムが解明され若返りの薬ができるとか、がん研究の進化で副作用のない治療ができるとか、予知医療が実現するとか、本当にそういう時代が来るのだろうかと思いながら見ていた。そのほかビッグデータの解析を進めるＩＴ立国のエストニアの例、寿命が１日５時間ずつ延びているというデータなど、さまざまな取り組みや進歩を取り上げていたが、とにかく驚くことばかりだった。番組がおもしろかった理由の一つは、ドラマがうまく入っていたことだと思う。３０年後の設定で、若返りの薬をめぐり、いつまでも若く生き続けるのか、それとも自然に命を全うするのか、人々の生き方や死に対する考えを問うものだった。強いストレス社会にあり、子どもの貧困や経済格差が報道される世の中で、果たして寿命が本当に延びていくのだろうか、自分ならどういう選択をするのかを考えさせられる番組だった。

○　１月４日(日)ＮＨＫスペシャル　ネクストワールド　私たちの未来　第２回「寿命はどこまで延びるのか」を見た。2050 年には自然と共生する社会を作るという国際合意がなされている状況であるのに、自然との共生が伝わらない内容だったのが残念だった。限られた時間なので、あらゆる視点から物事を見ていくのは難しいとは思う。ただ、寿命が延びることはよいことかもしれないが、同時に、食糧問題など考えなければならない課題に我々がどう取り組むべきかを見せてほしかった。幅広い世代に見やすい構成である一方、映画「バック・トゥー・ザ・フューチャー」を見るような感覚で終わってしまったのはもったいない気がした。タイトルどおり、「ネクストワールド」を丁寧に見せてほしかったと思う。

○　１月４日(日)にＮＨＫ大河ドラマ「花燃ゆ」がスタートし、楽しみに見ている。今の時代に、吉田松陰らがどんな思いで日　本を変えていこうとしていたかを描き出す

のは、意義のあることだと思う。視聴率に一喜一憂し過ぎず、本当に描きたいもの、発信していきたいと思ったものをぶれずに表現していってほしい。

○　１月６日(火)ドラマ１０「全力離婚相談」の第１回を見た。　恋愛あり、ライバル心あり、夫婦の問題ありで、寄せ集めになってしまった印象がある。子どもの父親が違うというストーリーも展開が一貫せず分かりにくかった。「ハゲタカ」「ダークスーツ」のようなＮＨＫらしいストーリーがしっかりしていて、重みがあるドラマ展開になるとよいと思う。離婚というメインテーマがしっかりと柱になると、もっと内容に引き込まれるのではないかと感じた。

○　１月６日(火)ドラマ１０「全力離婚相談」の主人公・竹内美晴は、真矢みきさんのイメージに恐ろしいほどぴったりと合っていて、思わずドラマに入り込んでしまった。ただ、息子のＤＮＡ鑑定の話はあまりにも唐突な印象だった。ストーリーを構成する要素が盛りだくさんだと、継続して見ていくのは難しいというイメージを視聴者に抱かせるのではないかと感じた。名古屋局の制作のドラマなので、今後も、注視していきたい。

○　ドラマ１０「全力離婚相談」について、ＤＮＡ鑑定のところには疑問を持った。第１回は「母の涙」というタイトルだが、本当は「父の涙」ではないかと思った。第２回のほうが話が分かりやすかった。元中日ドラゴンズの山崎武司さんが登場し驚いた。山崎さんが出てきただけでも見る価値があったと思う。

○　ドラマ１０「全力離婚相談」を楽しく見ている。まだ、２回目までの放送だが、この先、疲れる展開になりそうだという印象を受けた。第１回のエピソードはおそらく２回目以降の鍵になってくるだろうと思い見ていたが、できれば、あまり記憶力を必要としない疲れない展開にしてほしいと思った。

○　１月１０日(土)ＮＨＫスペシャル　シリーズ日本新生「ニッポン“空き家列島”の衝撃～どうする？これからの家と土地～」(総合　午後 9:00～10:13)を見た。現在、空き家が 820 万戸あるにもかかわらず、毎年 100 万戸前後が新築されているとのことで、人口減少の問題や、空き家の危険性を問い、今後どうあるべきかを議論する内容だった。その中で出された地域の“コンパクト化”という考え方についての賛否の議論は、大変勉強になるものだった。日本は、欧米とは逆で中古住宅の流通性が極めて低い。その理由の一つは、建てられた家の価値判断が築年数で決まるということにある。そこを改善し中古住宅の流通性が高まると、空き家の問題も少なくなっていくの

ではないかと思う。その点を取り上げていなかったのは残念に感じた。日本の住宅は昭和４１年に作られた住宅建設計画法によりどれだけ住宅を増やしていくかという量の時代があった。その後、「量よりも質を」との考えから中古住宅の流通性を高め、リフォームを充実させていく流れに変わってきということも伝えると問題の本質が分かりやすかったのではないかと思う。出演者に、前国土交通省事務次官の方がいたので、今までの日本の住宅施策のあり方や今後のことを国がどのように考えているのかなどの話がきちんと聞ければ、全体としてまとまりのある番組になったのではないかと感じた。

○　１月１１日(日)ＮＨＫスペシャル　ホットスポット　最後の楽園ｓｅａｓｏｎ２　第４回「天空の秘境　パンダの王国～中国　南西山岳地帯～」を、“パンダ”にひかれて見た。福山雅治さんがパンダの保護区域に行き保護の様子などを伝えていた。パンダはとてもかわいらしく、ぜひ行ってみたいと思ったが、パンダ王国というタイトルではあったが、ほかの絶滅危惧種の話のほうが長かったので、もう少しパンダについて深く知りたかった。全体を通しては、大変興味深く感動できる番組だった。

○　「ホットスポット　最後の楽園」も好きで見ている。“ホットスポット”とは、特に大自然ということではなく、固有の植物や生物が多いにもかかわらず、７０％が破壊されているような所をいうことばで、実は日本全土がホットスポットに指定されている。自分たちが住んでいる所にとても重要な自然があることを伝えてほしい。そうすることで身近な自然や緑のある環境を大切にしていこうという発想につながるのではないかと思う。自然を守り持続可能な社会を作っていくために我々がどうアプローチしたらよいのかを分かりやすく伝える番組を発信していってほしい。

○　１２月３０日(火)先人たちの底力　知恵泉（ちえいず)「観光立国ニッポン　１２０年前のまちおこし術　道後温泉を築いた伊佐庭如矢」を見た。ゲストの、観光開発では、徹底したコンセプトづくりが大切であり、ずっと利用し続けてくれる人はなぜ利用していてくれるのかという観点で自分の強みをしっかり知らなければいけないという話に共感した。伊佐庭は、資金難の中、道後温泉を築いたとのこと。反対する多くの町民を説得するには、自らも覚悟を示さないといけないと言い、町長としての給与は返上し、町民に自分の考えを説明して回った。その姿勢に、反対町民も感動して、同意をしたということだ。国を挙げて、観光に力を入れている中、それぞれの強みをしっかり持ってさまざまな企画を実現していくことなど、今にも生かせるヒントがあったと思う。ただ、点でなく面として観光を立ち上げないといけないという話では、具体的な事例を挙げた方が、より理解が深まったと思う。

○　１月２日(金)「１００分ｄｅ日本人論」(Ｅテレ 後9:30～11:10)は、分かりやすいアニメや図表があり、ゲストの解説や主張を大変興味深く聞くことができた。さまざまな名著から日本人論を解き、それに対するゲストのディスカッションもそれぞれ大変刺激的で、おもしろかった。話の中には、哲学や宗教に関心がないと理解しにくい部分もあったが、進行役の伊集院光さんが平易にしようと努めていたことは、効果的だったと思う。議論を戦わす番組ではなかったが、それぞれのゲストがお互いを配慮してか､見解や理解が常に同一方向にしか流れていない点は､もったいない気がした。特に、現代の出来事に番組内で述べられた精神性が発揮されているかどうかについては、個性的なゲスト４人の独自の観点での主張があってもおもしろかったと思う。全体的によくまとまっており、Ｅテレらしい、よい正月スペシャル番組だった。

○　１月４日(日)日曜美術館「中国によみがえる“雪舟”」は、中国で今、なぜ雪舟なのかと思い、興味深く見た。中国では、南宋時代に水墨画が最盛期を迎えたが、その後、元の侵略を受け衰退した。それが今、雪舟の作品が研究されているという。中国の絵師が雪舟について熱弁していて、雪舟のすごさを改めて学ぶと同時に、作品の多くが中国に渡ってしまうのではないかという思いも持った。日本人ももっと自らの文化を勉強し、すばらしさを知るべきだと感じた。大変分かりやすい番組だった。

○　１月１１日(日)美の壺・選　Ｆｉｌｅ２３２　「金沢の着物　加賀友禅」は大変興味深い内容だった。シックで優しい加賀友禅ときらびやかな京友禅の違いを大変分かりやすく説明していた。加賀友禅作家は、一年中、外に出て自然の写生にいそしみ、写生をしたものから下絵を描きデザインをするそうだ。“加賀五彩”と呼ばれる黄土と草色、古代紫、藍、墨という地味な五色が、加賀友禅の美を引き出す技だと知った。加賀友禅は、娘を嫁に出す際に親の思いを込めて持たせるもので、長く大切にしているということが印象に残った。加賀友禅と家族との関わりも知ることができた大変よい番組だった。

○　Ｅテレの「考えるカラス～科学の考え方～」と「大科学実験」は、大人が見てもおもしろい内容だと思うので、ぜひ、夜中にも総合テレビで編成してほしい。寝る前に何気なくチャンネルを合わせて見るにふさわしい。大人にも刺激を与えてくれる番組だと思う。

○　１２月２７日(土)関口宏の“そもそも”「詐欺ってなんだ？」を見た。なぜ人は人をだますのか、なぜだまされるのかを問い、詐欺について脳の働きと人間の性（さが）の面から解説していた。一番興味深かったのは、なぜ電話の声を息子だと思い込んで

しまうのかという点で、４組の親子による実験では、息子をほとんど判断できないということだった。専門家によれば、電話そのものが人の声の違いを伝達するために作られておらず、聞き分けることが難しいという。その結果に今の技術でどうして電話の機能向上ができないのか納得できなかった。詐欺師については、詐欺のマニュアルなどを取り上げていたが、もう少し短くてもよかったのではないかと思った。振り込め詐欺がなかなか減らない中、銀行や警察がさまざまな対策をしていることが伝わってきて、それぞれが真剣にこの問題を考えていかなければならないと強く思った。

○　１月４日(日)「風に立つライオン～さだまさし・大沢たかお　ケニア命と自然の旅～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　午後 10:00～11:29)を見た。とても重みのある内容だった。海外で働く日本人で、しかもなかなかスポットライトが当たらない人を取り上げるということは意義があると思う。

○　１月１２日(月)青春ブレイクスルー「壇蜜」(再)(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　午後 3:15～4:14)を見た。壇蜜さんというタレントはあまり知らなかったが、最後までおもしろい内容だった。彼女は幼い時から友達もできず、仲間も作れない、いじめられっ子タイプだったそうで、大学へ行ったり、調理学校へ行ったり、和菓子屋をやったり、何をやっても全部失敗していたが、それがたまたま応募したグラビア写真のモデルでブレイクしたとのこと。彼女が番組で話すことばは大変興味深く、すばらしい内容だった。頭の中でいろいろと考えていることが分かる。非常に共感した。何事にも無気力で、熱中することができない若者がたくさんいる中、彼女のようにブレイクできればよいができない若者たちはどうなるのかと、不安も持った。まさに「青春ブレイクスルー」という題にぴったりの人を選んだと思う。

○　１月１日(木)蜷川幸雄のクロスオーバートーク「第１回　ジャニー喜多川」は、嵐やＳＭＡＰなどを擁するジャニーズ事務　所のトップがどんな人なのか、大変興味深く聴いた。ジャニー喜多川さんは、あまりメディアに出ないイメージなので、ＮＨＫのラジオで元日の放送に登場するというのは、すごいことなのだろうと思う。ラジオだけで終わるのはもったいないとも感じた。めったに聞けないジャニーさんの声に、関心も高かったのではないかと思う。多くのタレントを売り出し、結果を出している“ジャニーズ”を取り上げられた成果はすばらしい。これからの企画に期待している。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年１２月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

１２月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、新日本風土記「伊勢志摩の海」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	森棟　公夫	（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長	松本　耕作	（加賀味噌食品工業協業組合理事長）
委員	大島　宇一郎	（中日新聞社取締役管理局長）
	加藤　勇二	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	小寺　功子	（三重県漁協女性部連合会会長理事）
	杉浦　宇子	（弁護士）
	立花　貞司	トヨタホーム（株）取締役会長）
	田中　章義	（歌人・作家）
	中村　智景	（四季料亭「助六」女将）
	野田　雄一	（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）

（主な発言）

＜新日本風土記「伊勢志摩の海」
（１１月２１日(金)　ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 9:00～9:59）について＞

○　伊勢志摩の海の海女さんの目を通して見つめた、文字どおりの“風土記”という印象の番組だった。海の美しい映像や、人々の生活の様子などを飽きることなく楽しんだ。ふだんの生活の中にある伊勢エビなどの豊富な魚介類から、ホテルの豪華な料理まで、特に、“食文化”は、大変興味深かった。また、海女の生活や伝統にも興味をひかれた。海女小屋にある神棚や潜水時の衣装に縫いつけるセーマンという星のマークの意味など､危険と隣り合わせの仕事に向かうときの祈りや自然に対する畏敬の念は、昔も今も全く変わっていないということをうまく織り込んでいた。“神”というキーワードも番組構成に生かされていたと思う。答志島の寝屋子制度については、以前にプ

レミアムドラマ「ヤアになる日～鳥羽・答志島パラダイス～」を見ていたので分かりやすかった。一方で、知っているがために、少々、新鮮さに欠ける部分もあった。全国放送であり、初めて知る人も多いと思うので、どういう取り上げ方をするかは、とても難しいと感じた。人々の生活については、昔の番組の映像なども入れて、うまく紹介していた。映画「潮騒」のロケ地を吉永小百合さんが訪れる場面は、番組としてはよかったが、風土記というコンセプトからすると疑問が残る。番組は最後に、よそから嫁いだ女性が海女として育っていく姿を通して、明るい将来や希望を映し出している。石川県の能登地方など、各地にも海女文化があり、現在、海女文化の世界無形遺産登録への動きがある。そのような動きも含めて、継続的に取材を続けていってほしいと思う。取材場所や取り上げる構成要素が多く、それぞれの場面では話は確かに完結しているのだが、撮影した時期、季節が少しずつずれていて、頭の整理がしにくかった。季節という時間軸で分かりやすく構成したほうが、視聴者にとってもしっくりくるのではないかという印象を持った。

○　伊勢神宮から始まり、神事を支えてきた伊勢志摩の海へという番組の入り方には、大変引き込まれ、続く内容も神様との関わりは神秘性があってよかった。映像がとても美しく、伊勢志摩の入り組んだ海岸線や小さな島、上空から見た海など、青と緑が鮮やかな自然の風景が印象深かった。番組は、海を中心に、海女の日常や地域の風習・行事が、次々と短いテーマで区切られて展開していく。最初は、目まぐるしいとも思ったが、いろいろな情報を見せていくというのは、おもしろい見せ方だと思う。伊勢志摩の風土や産物や伝統を次々に見せていくことで、番組を見ながら、旅行に行きたくなるような気持ちにもなった。海と海女さんとの関わりは、特におもしろかった。全国の海女さんの半分はここにいるというところからも、豊かな海だと分かる。高齢になっても、堂々としていて、稼いでいる女という自信がみなぎっていた。海に潜る自分の稼ぎで家を建て子どもを育て上げ、老後の蓄えもできたという。豊かな海を「太平洋銀行」と表現したのが印象的だった。自然と関わる人間の姿が映し出されていた。そのほか、アワビやサザエが並ぶお膳、地元のレストラン、真珠婚の企画など行ってみたいと思わせるところがふんだんに織り込まれている番組だった。

○　「新日本風土記」という好きな番組で伊勢志摩を取り上げるとあって、大変興味深く見た。全国のおよそ半数の海女が伊勢志摩にいるという事実は、あまり知られていないのではないか。連続テレビ小説「あまちゃん」の影響で、全国的には、岩手の海女のイメージが強いかもしれない。伊勢志摩の海女文化をもっと全国に発信してもよいのではないかと思った。ベテラン海女の「太平洋銀行」ということばはとても印象的だった。海との生活をこういうことばで表現できる女性の生き方は、とてもすてきだ

と思った。寝屋親・寝屋子のしきたりに関しては、以前にドラマを見たことを、実際の話として見ることができてよかった。寝屋子の成長に感情移入をして見た。全国的には、同じような風習があるのかどうか分からないが、地域のつながりが大切にされ、昔からのしきたりが受け継がれている地域があることを、ぜひ、発信していってほしいと思った。全編を通して、ナレーションがよかった。特に、松たか子さんのナレーションは、決して出しゃばらず、番組の雰囲気ともマッチしていてすばらしい。無理せず自然に視聴者を案内している感じで、海女さんたちを描くにもぴったりだった。吉永さんの部分に関しては、あえて吉永さんが登場せずとも、十分、番組の中に魅力的な人が出ていたと思う。全体を通して、よい番組だったと思う。

○　危険な海に入って伊勢エビやアワビを採る海女さんの姿、「太平洋銀行のおかげ」と言い、家族を養うたくましさに感動した。地元レストランの料理長の、素材の住む海や土地の歴史を知ることによってお客様に土地の素材のよさを提供できる、味わってもらえるという姿勢に、地産地消、伝統野菜や地元の特産物を発信していくことの大切さを痛感した。また、鳥羽の神社には、最近、若い女性が、いわゆるパワースポットとして観光バスで大勢来るという。町おこしの形として、うまく続くとよいと思う。人と人とのつながりが希薄になり、隣に住んでいる人すら知らないという現代において、答志島の寝屋子制度は、心温まる内容だった。また、お盆の墓参りの様子は圧巻だった。時間内に大急ぎでさまざまな家のお墓を参るという習慣には大変驚いた。昔は結婚式や葬儀などは、近所の人が取りしきっていたものだが、今はそのようなこともだんだん少なくなってきた。そんな中、このようなしきたりがよく残っているものだと感心した。伝統文化を引き継いでいくには、意識的に、環境づくりをしていくことが必要なのだと感じた。昔からの風習が今も継承されているのは、伊勢志摩の持つ特徴的な地形などにもその理由があると思うが、昔は様々な地域で独自の文化があったのだろうと思う。都市化が進み、伝統的な文化が次第に薄れてきてしまった。番組に登場した寝屋親の、５人の寝屋子もそのうち４人は地元を離れているというが、たとえば５年後、１０年後、今回のような番組が作れるのか気になった。

○　伊勢志摩の海を軸に、宗教、風習、言い伝えと、非常に幅広く表現した内容だった。陸側と離島、伝統的な話と新しい取り組み、それぞれが立体的に構成されていて、見応えがあった。寝屋子制度のところで登場した青年たちの表情や言動には、たくましさを感じた。昨今、核家族で育ち社会経験が少ない若者が多い中、寝屋子制度は、子どもを徐々に社会に出していく意味があるのではないかと思った。島外に出ていく子も多いのだろうが、しきたりが続いているということは、今でもそれが機能しているのだと思う。全国に発信され、伝統的な文化や風習を継承していくためにこれからど

うしていったらよいか、手がかりとなりうる番組だったと思う。じっくり腰を据えて取材された力作だった。

（ＮＨＫ側）　６月から９月くらいに集中して取材をした。夏が始まり、お盆の行事があり、秋口、冬の漁に向けた海女さんたちの様子があり、という時間の流れを意識はしていたが、その情報がもう少しうまく伝えられたらよかったと思う。「新日本風土記」という番組は、オムニバスでいろいろな短編をつづっていくような特徴がある。構成要素となるさまざまな出来事が、うまく関連し合ってひとつのテーマが浮かび上がってくるようにしたいが非常に難しい。寝屋子制度は、かつては、他の地域にも存在していたそうだが、現在、残っているのは答志島くらいとのこと。しかし、答志島においても島に残る青年が減り、寝屋子は数が減っているのが現状のようだ。

○　旅番組としても内容が盛りだくさんで楽しく、伊勢志摩に行ってみたいという気持ちになった。それと同時に、今、日本が直面しているさまざまな問題が集約されている内容でもあった。高齢化や限界集落の問題、それに伴って、伝統文化などが継承されていかない実情。環境、気候、自然資源の問題などがあることを感じた。伊勢志摩の美しいところ、よいところが多く取り上げられていたが、古い伝統やしきたりを守り続けていくことには、多くの問題と困難があるはずで、その点については、あまり見えてこなかった。寝屋子制度についても、数が少なくなってきたということは必ずそこに問題があったと思う。続けていくためにどのように解決し乗り越えてきたか、美しく、たくましく、頑張っている姿に加え、取材の中で直面した問題点などがどこかに出てくるとよかった。松たか子さんのゆったりとしたナレーションは、雰囲気が伝わってきて、とてもよかった。

○　全体的に、いろいろな要素があり過ぎて盛りだくさんになっている気がしたが、伊勢志摩の海のすばらしさを知ることができた内容だった。さまざまな神事が今でも残っていること、何より、女性が強く、たくましいことが心に残った。今、政府は女性の活用を言っているが、昔から女性の力なしには生活できないというのが、大変よく分かった。年齢を重ねてもたくましく働く海女さんの生活ぶりや、夫と一緒に海に出る姿も印象的だった。島に残る、人と人との結びつきを感じさせる古くからの習慣を見て、このような習慣があれば、社会問題にもなっている孤独な老人などがいなくなるのではないかと思った。寝屋子制度には大変興味が湧いた。青年の成長を寝屋親が

助け、寝屋子同士が兄弟のように育つという関係性は、今の時代にも大切なことではないかと思う。また、お盆のお墓参りの様子も大変印象に残った。人と人とのつながりをなくさないためにも昔からの風習を残すべきだと感じた。吉永小百合さんが４９年ぶりに神島を訪問した話は少し違和感もあったが、島民の方たちが喜んでいる姿を見ると、島の夏の景色として、合っていたのではないかと思った。

○　画面いっぱいの伊勢志摩の海や鳥羽の町の風景が大変美しかった。全体を通して、伊勢志摩の観光ＰＲかと思うくらい内容が盛りだくさんの印象だが、海女で始まり海女で終わる、海女文化を軸にした番組だったのだと思う。鳥羽や伊勢志摩の島々には、海女の関係するさまざまな祭りや神事が今も残っている。その際には、海女が昔ながらの白い衣装を身に着ける。サメが白を嫌うからというのだが、現在の海女が黒いウエットスーツを着て潜る姿をみて、サメは寄ってこないのだろうかと思いながら見ていた。番組では、海とともにある海女の姿を映していたが、彼女たちは、海に潜るだけでなくさまざまな活動もしている。去年１０月、白い衣装を着た海女 100 人が東京の六本木ヒルズへ伊勢エビの干物をＰＲするために行ったことも話題になった。本当にたくましい。今、鳥羽、志摩では海女の高齢化問題、後継者不足に直面している。今年１０月には伊勢志摩で海女サミットも開催されたが、これらの問題への取り組みやさまざまな活動についてもぜひ発信してほしいと思う。

○　この番組は、都会に住む我々が忘れかけていた日本のよき伝統をしみじみと思い出させてくれた。アワビの口開け、答志島の寝屋子制度やお盆行事などを通して、自然の資源を大切にして共存共栄する姿や、心温まる人とのふれあい、伝統を次の世代に伝えていくという昔からの日本のよさが映し出されていた。我々がいつの間にか忘れていたものを思い出させてくれる大変よい番組だった。ある程度の年齢になると、都会生活よりも昔からの習慣が残り、人とのつながりのあるところに帰りたいという気持ちにもなってくる。番組を見た人のこのような思いが、少子高齢化時代にあって、地方の人口減少あるいは限界集落化の歯止めになればと感じた。今後、人口減少や限界集落化を防ぐという観点も意識した地方のよさを描いた特集番組をぜひ見たいと思った。

○　「新日本風土記」という番組には、アーカイブの意味もあると思う。答志島においても古い習慣はいつか消えてしまうかもしれない。記録としても意味があるのではないか。神島の吉永さんの件についてはいろんな意見があると思うが、村の人々が喜んでいて、４９年前のことをみんながまだ話をしている様子は、記録に残す意味があったと思う。全体としては、約１時間の中にうまくまとめられており、自然に恵まれた

美しい地域であることがよく伝わった。ぜひ、訪問したいと思った。さまざまな番組でよく「神」が登場するが、今回も石神様が出てきた。一度、日本の神様についてまとめた番組を作ったらどうかと思った。最後に、番組のテーマソングについて、ものすごく心に響く音楽なのだが、歌詞が全然分からない。ぜひ、歌詞が理解できるよう工夫してほしいと思った。

○　伊勢志摩の風景や人々の生活ぶりが美しく描かれている内容だろうと思っていたが、今回の「新日本風土記」は、風土記のタイトルにふさわしく、日本人として違和感を覚えない風習や伝統を通して、濃密な人々の関係が描き出されており、大変興味深く楽しく視聴した。全編を通して、たくましくも朗らかな海女として生きる老女たちの姿が印象的だった。このような地域色の濃い番組を見た場合、おもしろいとは思っても、そこで暮らしたいと思うことはほぼないが、映し出された人々の人間味溢れる風情を見て、行って暮らしてみたくなった。なお、島に長く残る風土や伝統に基づいた部分と、後半の観光客誘致のために作られた真珠婚式や真珠取りの部分とでは、温度差がありすぎた。後半は不要な気がした。特に、寝屋親が寝屋子にかけることばや、母である海女が、嫁いできたばかり若い新人海女にかけることばと、真珠婚式でのことばとでは、本質的な差を感じたので、後半は無い方が全体の質感が高まったように思えた。特に迫拠（せこ）でのじんじろ車や盆踊りを見て価値観が昭和に戻っていたこともあり、初老の夫婦の人前でのキスシーンは感覚的に受け入れがたかった。また、ところどころで神様に対し敬語を使っているのにも違和感を覚えた。いずれにせよ、大いに伊勢志摩の人々の暮らしぶりや文化を知るとともに、日本人の心根としてあるべきようなものも感じることができ有意義であった。

（ＮＨＫ側）　伊勢志摩の美しさ、人々のたくましさ、伝統的な習慣を今に伝える人々のつながりなどと合わせて、そこにある課題を伝えることも、大切だと思う。風土や歴史は、さまざまな問題に直面したときに人々がどのように生きてきたかということの積み重ねの中で培われてきた。たとえば、人口減少、限界集落化に、どのように向き合おうとしているのかもその土地の持つ風土であり力であると思う。その点も考えつつ、一方で、「新日本風土記」という枠組みからそこが突出しないように伝えていけるよう目指していきたい。吉永小百合さんと神島の人々との関わりについては、吉永さん主演の映画が神島を舞台にした海女さんと漁師の話ということで、４９年ぶりに島を訪問したときの様子を入れた。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２９日(土)金とく「太平洋　ウミガメ　はるかな旅」(再)は、三重県の熊野の海でアカウミガメが見られるということで、大変興味を持って見た。タレントの吉澤ひとみさんが熊野の海に何度も潜り、アカウミガメに出会うことはできなかったが、きれいなサンゴや珍しい生き物、熊野の美しい海を見ることができた。名古屋港水族館で絶滅危惧種のアカウミガメの人工繁殖に成功したという飼育員の話は興味深かった。アカウミガメは産まれた砂の臭いを覚えているという説があるなど、まだまだ謎の多いロマンのある生き物だという話になるほどと思った。また、表浜海岸でのウミガメを守る取り組みでは、自然の厳しさの中、無事にふ化して一生懸命砂から這(は)い上がり、太平洋に向かっていく子ガメの姿に、思わず吉澤さんと一緒に感動した。ウミガメは２０年後にまたこの表浜海岸に戻ってくるという。野生動物の神秘を感じさせてくれる本当によい番組だった。

○　１２月５日(金)ナビゲーション「農家に希望を～福井発　“異端農協”の挑戦～」を見た。保守的といわれる農協において独自ルートを構築し、農協が農家のためにできることは何かという組織の存在意義の根本を突いたＪＡ越前たけふの改革を分かりやすく説明していた。普通の会社にとっては当然のことなのに、なぜ、今までどうしてできなかったのか。一方で、先進的な経営として他の農協がこれに追従すれば、ここに競争原理が働く。同時に次々と新しい挑戦が必要になるということだと思う。また、作況不良のリスクに対してはどのように対応しているのかまで説明があるとよかったと思う。

○　１２月５日（金）ナビゲーション「農家に希望を～福井発“異端農協”の挑戦～」を見た。ＪＡ越前たけふの取り組みは、各メディアでよく取り上げられているので、関心のある人には理解できる内容だったが、そうでない視聴者には、本質的な課題が伝わりにくかったのではないかと思う。もっと図表やフリップを多用して、論点を整理した方が分かりやすかった。 番組は、“異端”と言いながらも好意的に取り上げていたが、賛否が二分されるテーマにおいては、より客観的な評価や一般教養としての知見につながるような工夫が必要ではないかと思った。

○　１２月１２日(金)ナビゲーション「リニアインパクト～開業までの課題は～」を見た。来年の春、北陸新幹線が開業するこの時期に、名古屋では、１３年も先のことなのにもう取り組んでいるのかと興味を持った。名古屋駅周辺の開発や投資マネーの流入が早くも始まっていると言う。ストロー現象に対する懸念や対応についても取り上げていた。東京に吸い上げられるだけにならないためには、名古屋一点集中ではなく

周りを含めたアクセス向上の議論が大事だと思う。後半は、抽象的な議論に終始していたのではないかという印象を持った。東京中心の考え方から脱却した新しいライフスタイルの提案などもあるとよかった。

○　１２月１２日(金)ナビゲーション「リニアインパクト～開業までの課題は～」を見た。まず、４０分で東京まで行けるということに、すごい時代になったと感じた。大震災に備えて大動脈のバイパスとしての機能を持つことの意義は大きい。ただ、名古屋・東京間の８６％がトンネルだということ、時速 500 キロ以上出るということで、環境対策はどうなされていくのか、気になった。その点に関心のある視聴者も多いと思うので、詳しく伝えるとよかったのではないかと思う。“東京都名古屋区”になってしまうおそれがあるという話には、なるほどと思った。１３年も先のことと思わず、しっかりと我々の対応を考えていかないといけない。開通したら、ぜひ、元気な体でリニアに乗りたいと感じた番組であった。

○　１２月１２日(金)金とく「仮面の江戸川乱歩　～生誕１２０年・近代との格闘～」も大変おもしろい番組だった。乱歩が若いときを名古屋で過ごしたとは知らなかった。江戸川乱歩といえば、子どもの頃に見たテレビ番組「少年探偵団」で、今でもその印象が強い。番組では乱歩の別の面を知ることができた。戦前から戦後にかけて、社会の変化に影響されながら変わっていく乱歩の姿に、怪人二十面相をうまく絡ませていた。社会の流れに対応する人の変化を「仮面」を替えることで表現したのもおもしろかった。「少年探偵団」の乱歩のイメージとはどう結び付くのか少し疑問も残ったが、大変学ぶところの多い番組だった。

○　１１月２３日(日)ＮＨＫスペシャル「高倉健という生き方～最後の密着映像１００時間～」を見た。数々の映画に出演してきた高倉さんの生き方を描いたもので、懸命に生きている人を演じるには自らも懸命に生きなければならない信念や、自分はその役にふさわしい生き方をしているかと問う姿に、プロ意識を痛感させられた。役者になった以上、私事は捨てなければならないという意識にもこれぞプロ意識だという感じがした。

○　１１月２４日(月)「魔法の映画はこうして生まれる～ジョン・ラセターとディズニー・アニメーション」を見た。内容はともかく、封切り前の商業映画を取り上げており、このタイミングで放送する意図はどこにあるのか、宣伝番組と思われてもしかたがないのではないかと疑問に思った。

○　１１月２８日(金)プロフェッショナル 仕事の流儀「勝利は、信頼でつかみとる　バスケットボール部監督・井上眞一」を見た。全国優勝５６回という実績を持つ桜花学園高校女子バスケットボール部の井上監督の話だった。厳しい指導もあるけれども、個々の選手の力を引き出すためにどういう工夫をしたらいいのか、どういうふうにコミュニケーションを作っていくのかが語られており、非常に感心して見ていた。さまざまな分野の指導者にぜひ見てほしいと思う番組だった。

○　１１月３０日(日)サキどり↑「空の産業革命！小型無人航空機“ドローン”」を見た。無人の航空機とはどんなものか、楽しみにしていた。ドイツの離島で薬品輸送に取り組んでいるとか、ロシアではすでに宅配ピザで実用化されているとか、知らなかった事実があって非常におもしろかった。名古屋の模型店に世界的な機体の製作の第一人者がいるとのことで、モノづくり名古屋のすごさを感じた。また、報道機関がどういうふうに使おうとしているのか知りたかった。テレビでも無人機か無線ヘリを使っているのではないかと思われる映像を見ることがあるので、危険性はどうなのかも気になった。番組では、海外で何百件とかいう事故の事例を紹介されていたが、日本でもすでにいろいろな会社が使い始めていて、実際に事故も起きているので、そのあたりは押さえておいた方がよかったのではないかと思った。

○　１１月３０日(日)ＮＨＫスペシャル「攻防　危険ドラッグ　闇のチャイナルートを追う」は、危険ドラッグの被害の大きさと脅威を、綿密かつ広範囲に及ぶ取材で克明に映し出していた。“薬物依存大国化”の危機的状況にあることを、社会に警告する意味でも強く印象に残る内容だった。能登の漁村に製造現場があったことは、過疎化で社会の目の届かなくなった隙間に悪が蔓（まん）延しているという実態を新たな脅威として強く認識させるものであった。また、中国による影響の大きさも痛感した。ナレーションについては、バラエティーやコメディーに出ない硬派な人のほうがよいように感じた。

○　１２月２日(火)ひるブラ「発見！ 隠れた名品“越前漆器”～福井・鯖江市」は、地元の人間でも知らないようなローカル情報がテンポよく折り込まれており、見やすい構成だった。ただ、アナウンサーとゲストの会話は、軽すぎる印象だった。また、全国から届く修理依頼の大切な品が段ボールに重ねられている映像には、テレビで映すには配慮があったほうがよかったのではないかと感じた。

○ １２月３日（水）歴史秘話ヒストリア「私は真珠湾のスパイ～日米開戦　ある男の告白～」は、昭和１６年１２月８日の真珠湾攻撃を取り上げ、諜報活動をしていた帝国

海軍の吉川猛夫少尉の話を軸に展開していた。吉川少尉が米軍の取り調べを受け証拠不十分になったのはなぜかや、戦後、ＧＨＱに呼ばれた経緯などが描かれておらず、疑問が残った。また、同胞からもさげすまれた吉川少尉の苦しみは想像を絶するものだったと思うが、さっと流された印象が残った。

○　１２月４日（木）クローズアップ現代「犯罪を繰り返す高齢者～負の連鎖をどう断つか～」を見た。まるで映画や再現フィルムかと思うほど悲惨な状況を、必要以上の演出や情報を加えずに簡潔に分かりやすくまとめ、課題を浮き彫りにしていた。しかし、キャスターの質問内容は、課題を深く掘り下げるものにはなっていなかった。また、ゲストの話も、理解が難しい専門的な解説をする一方、最後のまとめは簡単なもので拍子抜けする感じだった。

○　１２月６日(土)突撃アッとホーム「老舗旅館で嫁姑(しゅうとめ)対決　涙の訳は…」について、今回は、老舗旅館の若おかみが登場するということで、興味深く見た。100年続く温泉旅館に嫁ぎ、おかみになった女性と、姑であるベテランおかみの間を、出川哲朗さんが取り持つという展開で、とてもほのぼのとした内容だった。２部構成の後半はＮＯＮ　ＳＴＹＬＥの石田明さんが里帰りをし､おふくろの味を堪能するというものだった。形はち違うがこちらも親子の話で、やはりほのぼのとした雰囲気で見ることができた。

○　１１月２４日(月)人生デザインＵ－２９「総集編　Ｕ－　２９めげない女たち」は、２０代女性の間で“専業主婦願望”が強まる中、女性がめげずに働き続けるためのヒントを探る内容で、多彩な人物が登場し、大変おもしろかった。女性の視点で考えた違和感のない番組構成だったと思う。中でも、会社員ブロガーとオンライン動画クリエイターの２人の女性は生き生きしていてたくましく、とても印象的だった。彼女たちの仕事ぶりを見ると、伝統や従来のしがらみに囚（とら）われることなく仕事をしていて、今の時代かいま見たような気がした。一方で、専業主婦になりたい女性が４０．　６％とあったが、その数が多いのか少ないのかその推移も分かるとよかった。政府が掲げる女性が輝く社会づくりへの動きも取り上げるとよかったと思う。

○　１１月２９日(土)ＥＴＶ特集「臨床宗教師～限られた命とともに～」は、あまり聞き慣れない「臨床宗教師」を取り上げた内容だった。「臨床宗教師」として活動を始めた僧侶の高橋悦堂さんを１年間追いかけた番組で、高橋さんが末期がんの患者に寄り添う姿を丁寧に映し出していた。患者の揺れ動く心に向き合う姿に、臨床宗教師の必要性とその難しさが語られていた。臨床宗教師自体が今、日本でどれくらいいて、ど

のような活動しているのかもう少し説明があるとよかった。心のケアは大切なものだと思うので、今後も少しずつ視点を変えながらこのテーマを扱っていってほしい。

○ 「１００分ｄｅ名著」は、分厚い専門書を読まなくても、知的好奇心を充足させられるとてもおもしろい番組だと思う。１２月３日(水)、１０日(水)は「ハムレット」がテーマで、あまり深くは知らなかったが、著書の研究者が背景や歴史を深く解説していてとても分かりやすかった。「ハムレット」の解釈は、後世の人が作り上げたところもあり、シェークスピアの時代をよく見てみないと本当のところは分からないのだとして、移りゆく激動の時代をどう解釈し、また、自らはどうしていくのかというところまで、深い話があり感動すら覚えた。「生きるべきか、死すべきか」というせりふは、どう生きるべきかを自分の中で問うていて、現代に生きる私たちにもつながる話で、大変おもしろく見ることができた。

○　１２月３日(水)１０日(水)オイコノミア「幸せな“おひとりさま”であるために」（前編）（後編）を見た。なぜ最近、結婚しない男女が増えたのか、また、どうやってそういった未婚の人たちが安心して“おひとりさま”で生活するかを、ノーベル経済学賞を受賞した方のサーチ理論を用いて経済学で説明していた。シンガポールの例では、経済が発展すると未婚の男女が増え、低所得者の男性と高所得者の女性が未婚になる傾向が強いとのこと。サーチ理論から、相手を探す結婚市場において、その市場にいる人、出た人、参加しない人の価値観を解き、結婚からの満足度と婚活継続の価値を天秤にかけ、“留保水準”を測っていたが、果たして結婚というものをそのような理論で当てはめることができるのか、半分納得し半分疑問に思いながら見ていた。“おひとりさま”の３大不安は、お金と住まいと孤立感とのことだ。これを解消する方法としてコレクティブハウスという環境が選択肢として挙げられていたが、これもなかなか難しいだろうと感じる。今後、おひとりさまの男女が年を重ねていく中、地域コミュニティーをどうしていくのかをテーマにした番組もぜひ見ていたいと思う。

○　団塊スタイルは、いつも楽しみにして見ている。１２月５日(金)は「どうする？６０代からの住まい」というテーマで、興味深く見た。番組では、団塊世代の住まいのスタイルを、住み続けるカタツムリ型と住み替えていくヤドカリ型と表し、それぞれの住まいで生き生きと生活する様子を伝えていた。団塊世代の多様な住まいの在り方が分かり、新しく知る情報も多かった。住まいが変わると考えが変わる、リフォームなどで住まいの環境が変わると人生も変わるという。自分自身の住まいのことも考えるきっかけになった。これからも、このような身近な情報を提供してくれるこの番組に期待している。

○　１２月１４日(日)日曜美術館「革新の極意～古田織部４００年の時を超えて～」を、大変興味を持って見た。織部焼は知っていたが、古田織部のことはあまり知らなかったので、大変勉強になった。古田織部は、武士でありながら千利休に茶を習い、織部焼の形を作り出した岐阜出身の人物。その作品はとても昔のものとは思えないほど斬新で感動した。茶室には特に驚いた。織部の茶室には日が差し込み、茶碗が光に浮かぶ。400 年前にこのようなドラマチックな仕掛けを考えていた、織部の感性と演出がとてもすばらしいと思った。

○　１１月１９日(水)「ザ・ラスト・ショット～秋田発地域ドラマ～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後10:00～10:59)を見た。東京で働くスポーツシューズ職人で、高校生時代は秋田でバスケットボールのスター選手だったという主人公が、１８年ぶりに秋田に行くという話で、バスケットボールを中心にうまくストーリーが展開していた。ドラマを見て初めて、秋田の能代工業高校がバスケットの強豪だということを知り驚いた。また、秋田では、高校生だけではなく一般の人も含めて、バスケ熱が高いことを知り、さらにドラマをおもしろく見た。秋田弁があまり使われていなかったが、全国からバスケットの強豪選手が集まってくるからなのか、その理由が知りたいと思った。

○　「晴れ、ときどきファーム！」をよく見ている。“ときどき”という辺りが、東京など都会に住む視聴者に共感を呼ぶ要素があるのかもしれないと思う。１２月５日(金)「寒さも美味！焼きいもと納豆を手作り」について、焼き芋を干し芋にするというようなことは地方に暮らしているとあまり珍しくはないが、納豆も手作りできるというのは興味深かった。この番組で紹介する、ちょっとした田舎暮らしや自然と触れ合う体験は、都会で生活する人にも日常の中で楽しめるのだということを提案してくれているようで、とてもよいと思う。出演者も自然体で、見ていて楽しかった。ただ、出演者が大人ばかりだったので、子どもが出演していてもよかったのではないかと感じた。子どもの目線で見られるものもあると思う。自然な子どもの表情から発見し得られるものは、世代を越えて一緒に見て楽しめると思う。

○ １２月７日(日)プレミアムドラマ「ヤンバルクイナはいつ　か飛ぶ」を見た。救急ヘリコプターを沖縄北部の医療過疎地に飛ばそうと奮闘する医師の姿が描かれており、見ていて応援したくなった。ヤンバルクイナと救急ヘリコプターを掛け合わせているところはすごく詩心のある作り方でよかった。ただ、ドラマならドラマ、ドキュメンタリーならドキュメンタリーとして見たかった。せっかくドラマに感情移入し始めたところで現実感が漂ってきた。素材によってはドキュメンタリーと連動することが生

かされるものもあるのだろうが、今回の番組に関しては、とてもよいテーマだっただけに、ドラマはドラマとしたほうが、違和感なく見られたと思う。

○　選挙報道については、急な解散で準備も大変だったと思う。今回の選挙は、非常に番組づくりが難しかったのではないか。なかなか与野党の構図が見えてこず、具体的な争点が見えてこない中、番組でもその傾向が顕著に出ていた。番組においては、もう少し厳しいアプローチをしてもよかったのではないかと思う。投開票日の特番については、選挙の展開はほぼ見えていたので、８時過ぎに出口調査の結果などを伝えたあと、実際に票が入り、接戦区が見えてくるまでの間のつなぎをどうするかもう少し工夫する余地があったのではないかと感じた。繰り返しの部分を減らして解説などを入れ、選挙をより分かりやすく見せてほしかった。ローカル枠をしっかり取って伝えていたところは評価できる。情勢に振り回され過ぎずに、全体を組み立てるとよかったと思う。解散翌日にＮＨＫオンラインを見たが、総選挙を取り上げた番組がなかなか見つからなかった。ＮＨＫオンラインで関連番組を探そうとするのは、非常に関心の高い視聴者だと思うので、特集ページなどを分かりやすく出すとサービスの向上につながるのではないかと思った。

○　選挙の開票速報については、毎回、投票が終わってすぐに報道する必要があるのかと思う。今回も選挙の状況がなかなか動かなかったので、番組が間延びしてしまっているように感じた。いち早く「当選確実」をもらいたい候補者の気持ちも理解できるが、民放も含めて一斉に９時に開票特番を始めれば、大河ドラマ「軍師官兵衛」も見られたのではないかと思う。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年１１月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

１１月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、金とく「体験！祈りの道～錦秋の立山～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に､放送番組モニター報告と視聴者意向報告､１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　森棟　公夫　（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）

委員　　大島　宇一郎（中日新聞社取締役管理局長）

加藤　勇二　（愛知県農業協同組合中央会常務理事）

小寺　功子　（三重県漁協女性部連合会会長理事）

佐野　俊和　（コマツサービスエース（株）代表取締役社長）

杉浦　宇子　（弁護士）

立花　貞司　（トヨタホーム（株）取締役会長）

田中　章義　（歌人・作家）

中村　智景　（四季料亭「助六」女将）

（主な発言）

＜金とく「体験！祈りの道～錦秋の立山～」

（１０月３１日(金)　総合　後 8:00～8:43　中部ブロック）について＞

○ 立山に江戸時代からの神秘的な話が存在することを、初めて知った。

死後の世界を見たいという、人間が持っている願望が、立山に登ることや布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）の行事に参加することによってかなえられるということなのだろうと思う。女優のＫＩＫＩさんが布橋灌頂会に参加した感想として､「真っ暗な所からパッと光が入ったときに、自分はいずれ死ぬんだ、だから今の自分をもっと大事にしなきゃいけない」と涙ぐんで言っていたのが、大変印象的だった。立山の頂上から見る富士山の風景が非常によかった。頂上には行けない人も、テレビを通して体験することができた。ただ、登っていると上から石が落ちてくるような場所で、安全上、問題なかったのか心配になった。

○　錦秋とはまさにこのことかと思う見事な景色だった。山登りを勧められることも多い。山肌を覆う紅葉と緑の錦絵のような景色や水墨画を見るように雲の間に浮かぶ白山、富士山の姿を見ると、確かに人に勧めたくなる気持ちも分かると得心した。画面に臨場感があり、登山途中の眺望には少し気分が悪くなるほどだったが、見飽きることのない、非常によい映像だった。阿弥陀如来の足元から登っていったにもかかわらず、山頂で待っていたのは、阿弥陀仏ではなくイザナギを祭ってある神社ということに何の疑念を抱くこともなくありがたく参拝し、その直後、山の神に感謝する姿。また、観光イベントの神事に神妙な顔で参加して、おもむろに死生観を見つめ直すなど、神仏混交をはじめ、さまざまな信仰を受け入れて生活に取り込んできた日本人にしか分からない信仰心が凝縮され映し出されており、景色のみならずそういった点も大変おもしろく感じた。

○　自然をテーマにした番組としても、山岳信仰をテーマにした番組としてもすばらしいと思ったが、どちらもよいだけに逆に焦点がぼやけてしまい、もったいない感じがした。しかしながら、すばらしい映像が大自然を表現しており、非常にレベルの高い番組だと思う。特に、紅葉の風景、山頂近くで撮影されたと思われる星空は見応えがあった。撮影クルーは苦労したのではないかと思う。終盤、出演者が山を登っていくところは、ずっと後姿を見ていた印象が強い。先回りして撮るのは危険かもしれないが、登山中の表情が出にくい構成になってしまったのは惜しかった。また、山頂からカメラで捉えた富士山はとてもきれいだったが、少し違和感があった。視聴者がテレビを通して見る風景と実際に登った人の目にはどう映るのかを上手につなぐ工夫があれば、さらに臨場感が増したのではないかと思う。

○　山登りに興味はあっても、実際にはなかなか行けないので、登山の番組は好んで見ている。今回も楽しく見させてもらった。ただ、御嶽山の噴火もあり、同じような所を登る映像に悲しい気持ちにもなった。立山信仰について知らない人にも分かりやすい内容だった。曼荼羅（まんだら）絵を見ながら進み、そのつど説明があり、興味が湧いた。布橋灌頂会の行事については、神というと女人禁制で男性の行事という“動”のイメージが強いが、この儀式は女性の儀式で“静”を感じた。参加者が経を唱えているところには引き込まれ、涙を浮かべていた場面はとても印象的だった。立山信仰という伝統をぜひとも次の世代に受け継いでいってほしいと思った。若い人たちが雄山神社の世話をしたり、登山ガイドをしていることに、実際に継承されていることも感じた。若い巫女（みこ）のことばや内から出る美しさ、キラキラとした目がとても印象的だった。出演者のＫＩＫＩさんは好印象だった。信仰の番組で終わってしまうのかと思ったら、最後に雄大な自然の景色やライチョウ、珍しい自然現象で締めくく

っていたので、心が重くなることなく見終えた。山ガールといわれる人たちには山登りだけではなく奥の深いものを体験してほしいと思う。布橋灌頂会と登山が交互に出てきたのは、少し分かりづらく、どちらかを順序立てて見たかった。

（ＮＨＫ側）

立山は、標高 3,003 メートルの厳しい山ではあるが、いわゆる日本のトップクライマーが挑む山に比べると比較的穏やかな山である。富山では立山登山をして一人前という風習があり、小学校６年生の夏休みに立山に登るという学校も多い。安全管理については通常の山岳取材の手順を踏み適切に撮影を進めた。神仏混交については、コメント上は苦慮するところもあったが、厳密に神仏を分けるというものではなかった時代の宗教観に基づいた世界として解釈した。雄大な自然の部分と、布橋灌頂会に代表される宗教的な儀式の部分が、行ったり来たりしていた印象があったかもしれない。今回の番組は、ただ自然の魅力だけを紹介するのでもなく、山岳宗教や歴史だけを紹介するのでもなく、いつの時代も変わらない「山と人との関係」に焦点を当てて描いた。番組の意味合いとしては、曼荼羅の世界と布橋灌頂会で信仰の世界を見てもらい、美しい大自然の映像で、山に登った番組出演者とともに、視聴者もテレビを通して、立山登山を体験してもらうという構成にした。

○　番組を見て初めて立山信仰や曼荼羅、布橋灌頂会を知った。解説はあったが、前段となる４月の番組を見ていないので、一度では十分な理解は難しかった。印象に残っているのは、「曼荼羅は絵鏡になっていて、単なる絵ではない、自分の心を映し出しているものだ」という表現や、ＫＩＫＩさんの「山だけではなくもっともっと大きなものを体験した」ということば。生きながらにして生まれ変わり、自分の心を見つめ直すことが疑似的にできるならば、私も生きているうちに、山頂の雄山神社に参拝してみたいと思った。布橋灌頂会が３年ぶりに開かれたとのことだが、もともと３年おきに開かれているのか。後半、山頂でのご来光、冬支度、ライチョウとの遭遇、ブロッケン現象と続いたが、時系列でどういう順番になっているのか分かりにくかった。大自然と信仰を合わせた内容で、よい教養になる番組だったと思う。

○　立山の山岳信仰については、これまで知らなかったが、曼荼羅とともに山岳ガイド

の佐伯知彦さんの的確な説明と女優のＫＩＫＩさんたちとのやり取り、黒崎めぐみアナウンサーの語りも加わって、とても魅力のある番組になっていた。特に、賽の河原の地獄の世界の話は、とても印象に残っている。案内人の２人が体験した布橋灌頂会は山に入ることを許されなかった女性のための儀式と聞いて、海には女性が参加できないお祭りや習慣がまだまだあるのでうらやましいと思った。参加した人のコメントはあったが、山頂で祈祷（とう）を終えた人のコメントも聞きたかった。何のために登ったのか、それで何を得られたのか聞けるとよかった。非常にいい番組だったと思う。

○　「金とく」の「まるごと大自然」というシリーズは、中部地方各地の自然を丁寧に描いているよい企画で、今回の立山もシリーズの中のすばらしい番組の１つだったと思う。出演のＫＩＫＩさんは、その飾らない姿に、山への畏敬の念がきちんと伝わってきた。キャスティングが大変よかった。若い男性ガイドの佐伯さんの自然体のコメントもすごくよかった。ＫＩＫＩさんと佐伯さんのやり取りをもっと丁寧に見せてもよかったかもしれない。ライチョウやブロッケン現象という、狙いたくても狙えないような現象に出合えたのもすばらしい。一方で、タイトルの「体験！祈りの道～錦秋の立山～」についてはどうかと思う点があった。確かに“体験”かもしれないが、立山は万葉集の大伴家持から詠み継がれ古来より人々が大切に思ってきた山。立山への思いをしっかり伝えたいなら、一回の山登りが「体験！祈りの道」というのは、疑問が残る。また、「錦秋」は美しい言葉であるが、例えば、同じ週に放送された「にっぽん百名山スペシャル」の中でも「いざ錦秋の山々へ」とあり、使いやすい言葉でもある。山の番組に関して「錦秋」というタイトルがＮＨＫの中で付けやすい傾向にあるのだろうか。タイトルに、富山らしさ、立山らしさがでるとよかったのではないか。番組最後のナレーションは、少し饒（じょう）舌すぎたのではないかと感じた。ナレーションというものは、便利だし、丁寧に解説するほうが分かりやすい場合もあると思うが、この番組では、もっと言葉をそぎ落とし、映像を通して立山の自然が語りかけるものを視聴者が受け止められるようにするとよかったのではないかという気がする。大変よい番組だった。これからもこのような番組を作っていってほしい。

○　信仰の山という点を意識しての番組構成だったと思うが、信仰というよりは、映像の美しさが印象的な番組だった。女優のＫＩＫＩさんと黒崎アナウンサーと一緒に秋の立山を山頂まで登山しながら、立山信仰や風景を見ていくという感じだった。ＫＩＫＩさんは凛（りん）とした雰囲気で、語り口も穏やかで、感情を含みながらも抑えた口調が聞きやすく好感が持てた。変に目立ちすぎないところがよいと思う。立山曼荼羅では、死者の魂が集まるあの世が表現される。下の方が地獄谷や賽の河原など地

獄にたとえられて、雲海の見られる山頂付近は極楽とされているというのがとてもおもしろい。宗教的な面がある一方、多くの人が訪れて昔から宿場やガイドのような仕事もあったと聞くと、自然の現象や地形を地獄や極楽に見立てた観光資源開発みたいなものだったのかとも思えた。布橋灌頂会は、白装束で目隠しをして布の上を歩くなど、神秘化された儀式に参加することで、死にまつわる思考を巡らせ、自分なりの達成感を味わうという点が興味深かった。自然の映像はすばらしかった。地獄谷など下のほうの風景も天気がよく美しく見えていた。さらに、雲海や富士山、白山、ライチョウとの遭遇やブロッケン現象まであり、本当にこの旅でこれだけ見られるとは幸運で、見ている自分もよい旅をした気分になった。夜、満天の星が動く映像にも魅せられた。地獄とか極楽という仏教的な要素がありながら、山頂には宮司がいて神社があるところも大変おもしろく、古くから自然を信仰の対象としていたところに、後々、神道や仏教と融合していったのだろうと考えると、それも大変興味深い。

○　天気に恵まれてすがすがしい映像が続き、内容もまたすがすがしい印象の番組だった。ＫＩＫＩさんの表情も、話し方もすがすがしい。本当によい内容だと思った。最初に曼荼羅という仏教の話が出てきて、続く芦峅寺（あしくらじ）の布橋灌頂会もやはり仏教の儀式なのだが、山頂にたどり着いたらそこは神道だった。日本人は非常に現実的で、両方あっても便利な解釈をしているのだろうが、廃仏毀釈（きしゃく）のときにはどうしたのかと思った。改めて、日本人の仏教と神道について興味が湧いた。全体を通して非常におもしろく満足感があった。

○　秋の紅葉のきれいな映像、立山曼荼羅に沿っての登山風景、布橋灌頂会の体験、雷鳥の発見、ブロッケン現象となかなか充実した内容の番組だと思う。しかしながら、立山の麓の芦峅寺で立山曼荼羅と布橋灌頂会を織り交ぜて描いた４月の番組も視聴しているので、何となく「二番煎じ」との印象が拭えなかった。同じ「金とく」で、同じ出演者で立山を紹介するのであれば、異なった対象や視点で見せるよう、企画の段階で差別化・対比するべきではないかと感じた。黒崎アナウンサーがとても頑張っていた。常に３人の最後にいて少し息が上がっていたような様子がとても現実的だった。山の天候は変わりやすく、予定どおりにはいかない難しい撮影だったと思う。

○　四季折々、その姿を変える立山連峰について、これまでとは異なった視点で見る機会を与えてくれる番組だった。自然に対峙（じ）するとき、人間は畏怖の念を抱くことを忘れてはいけないと感じた。得も言われぬ美しさに出会ったとき、ただそこに佇（たたず）むしかなく心が真っ白になる。番組制作者の心の動きがテレビ画面を通して伝わってきた。「変わらないもの」「変わってはいけないもの」それは何なのかを自

分に問いかける機会を与えてくれた。番組後半の朝日がでるまでの映像は、悠久のときを感じた。

（ＮＨＫ側）

布橋灌頂会は、主に江戸時代頃から女性の救済の儀式として芦峅寺で続けられていた。廃仏毀釈のときに一度、伝統が壊されてしまい、しばらく途絶えていたとのこと。芦峅寺の地元で儀式を復活させようという動きがあり、古式にのっとった形で儀式が再開された。３年ごとくらいに実施しており、今は行政なども支援に入り実施されているとのことだ。ＫＩＫＩさんは、山がもともと好きで年間７０日以上登っているそうで、山がもたらす畏怖の念などにも関心があり、そういう気持ちが画面を通じても自然と出ていたのだと思う。江戸時代は芦峅寺の方々が参拝者を案内していた。神仏と人の間の中間の存在という意味で中語と呼ばれたのだが、若い男性のガイドの方は、その中語の末裔（えい)。幅広い世代に、立山のことを知ってほしいと活躍している。タイトルについては、今、若い世代にも、山は自然だけでなく、聖なる気持ちに浸る場所として関心が高い。番組への入口として親しみやすいタイトルにし、多くの人に見てもらいたいという意図があった。山頂で閉山の儀式に立ち合い、帰ろうとしたときにライチョウが近くに姿を現わし、それを撮っているうちに今度はブロッケン現象が起きた。また、前後何日かは天候が良くなかったが、２人の撮影のときだけ天気に恵まれた。本当に幸運だった。立山は晴れた日には雄大な景色が見える。今は雪をかぶって真っ白な光景になっている。立山の姿を見ると凛とした気持ちになり、人間の存在を越えた大きな世界があるのだと、現代的な暮らしをしていても感じる。地元局として、立山というテーマを引き続き取材し、番組化を目指していきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１７日（金）金とく「若狭湾～神秘の海の秘密～」　を見た。番組タイトルや冒頭から神秘を連呼するものの、特　に神秘さを感じさせる場面がない上に、一番期待していた画質があまり美しくなく残念だった。同じ「金とく」で取り上げた白峰

三山や立山などの映像の美しさと比較すると鮮明さに差があったように思う。自然番組は一回美しい映像を見てしまうと、それよりも画質の低いものはそれだけで視聴意欲が低下してしまう。ぜひ画質にこだわって制作してほしい。

○　１０月２４日(金)ナビゲーション「ウエルカム！飛騨高山外国人観光客急増の舞台裏」を見た。岐阜県の高山に外国人観光客が大勢来ている事実に大変驚いた。そこに至るまでの行政や地域の戦略的な活動が具体的かつ克明に紹介されており、大変勉強になった。このような成功事例は、地域振興に携わる人々にとって大変に参考になり、まさに中部地方向けの番組としてふさわしい。ゲストの解説については、取材内容を分析したり成功要因を明示したりすると番組内容の効果を高められたのではないかと感じた。

○　１０月２４日(金)ナビゲーション「ウエルカム！飛騨高山外国人観光客急増の舞台裏」では、岐阜県が外国人の観光に力を入れていることが大変よく分かった。高山にこんなに外国人が来ていることに驚いた。観光は高山の主要産業。インフラ整備にも力を入れており、行政が力を入れると同時に、市民がそれに一生懸命応えている点に感動した。また、日本酒文化を学ぶ体験型ツアーや古民家の活用等は大変勉強になった。観光資源がないのではなく、どうしたら観光ができるのかということを考える必要性がよく分かる内容だった。

○　１０月２４日(金)ナビゲーション「ウエルカム！飛騨高山外国人観光客急増の舞台裏」を見た。飛騨高山にぜひ行ってみたくなる内容だった。番組の中では地域に負担をかけない観光ということで、白川郷の例を紹介していたが、実際には駐車場はいっぱいで混雑している。今後、どう課題に取り組んでいくのかにも興味が湧いた。

○　１１月７日(金)ナビゲーション「３Ｄプリンターで“命”を救え！」は、タイトルを見て何が出てくるのかと興味本位で視聴したが、非常に興味深い内容で驚くことばかりだった。手術支援のため腫瘍まで含めた患者の肝臓の模型を再現したり、人工臓器を作ろうという研究までしていることにとても驚いた。加速度的に進歩している医療技術の一端をかいま見ることができた。医学と工業技術のコラボレーションが急速に進んでいるなど、重い病と闘っている人や家族に希望をもたらす内容で、温かい話題を提供したと評価したい。ただ、これがどれくらいすごいことなのか分かりにくい。番組では、東海北陸はこの分野では最先端だと言っていたが、世界に目を向ければ、新たな取り組みがあるのではないかとも感じた。３Ｄプリンターを使った臓器模型での手術支援は名古屋大学では５件の成功例があるそうだが、日本国内あるいは海外の

現状はどうなのか気になった。ゲストの東京慈恵会医科大学の先生が、３Ｄプリンターで臓器を作る研究について非常にユニークな取り組みだと話していたが、どれくらい最先端の研究なのかをアピールするには弱かった。視聴者から見て、東海北陸で行なわれていることのすごさが分かりやすく伝わるとよかった。今後もその点を意識しつつ取材を続けていってほしい。

（ＮＨＫ側）

医療分野における３Ｄプリンターの活用については、統計数値がなくデータとして示すことはできないが、この１～２年、国内の先進的な事例に名古屋や北陸の大学や企業が関係することが多かったので、東海北陸を先進的な地域として紹介した。今後、全国放送への展開も考え、もう少し海外の事情もリサーチし、より説得力ある形でお伝えできればと思っている。

○　１０月１９日(日)ダーウィンが来た！生きもの新伝説「どっちが得？ヤマメＶＳサクラマス」を見た。ヤマメとサクラマスは同じ種類の魚で、川に居続けるほうが小さなヤマメになって、海に下るほうはサクラマスといい、大きさは１０倍ほどになる。番組ではヤマメとサクラマスの違いを対比し、映像もよくデータも非常に興味深かった。海から戻ってきて川を遡（そ）上したサクラマスと小さなヤマメの求愛活動は、ユーモラスでおもしろく見た。清流に居続けるヤマメと海に下るサクラマスの差を明快に解説した内容で大変よかった。

○　１０月２５日(土)ＮＨＫ名古屋放送局テレビ６０年記念スペシャルドラマ「妻たちの新幹線」(総合 後 7:30～8:43)は、どうやって新幹線ができたのか、“妻たちの”という冠はどういう意味なのかと思いながら見た。時間のない中でテスト走行をやる場面は特に印象に残った。合理性だけでは成し遂げられないものがある、現場の技術力を信じているということばに、島秀雄という人物の新幹線開通への強い思いと、部下への信頼を感じ取ることができた。タイトルにある“妻たちの”については、“妻”たちが登場するものの、どうしても男性の活躍のほうが印象が強い。中村雅俊さんと伊東四朗さんの演技がすばらしいということもあるが、“妻たちの”というには、少し女性たちの描き方に物足りなさを感じた。起工式の場面で鍬（くわ）入れの鍬の先が飛んでいった意味、出発式典を迎えての島秀雄の描き方など、少し疑問も残ったが、当時の苦労がよく分かるよいドラマだった。

○　１０月２２日(水)歴史秘話ヒストリア「君よ、さらば！～官兵衛ｖｓ三成　それぞ

れの戦国乱世～」を見た。「軍師官兵衛」と「歴史秘話ヒストリア」では、石田三成の人物像は違った印象を受けた。官兵衛と三成の関係は、「ヒストリア」では関ヶ原の戦いで三成が官兵衛に助けを求めたとされていた。「軍師官兵衛」では朝鮮出兵のときに２人の間が決定的に決裂してしまったが、今後どう描くのか楽しみだ。同じ時期に別の番組で違った人間像を描くことはかまわないが、テレビ番組でどのような人物像に描かれるかによって、歴史上の人物を認識してしまうこともある。テレビの持つ影響力の大きさを改めて感じた。

○　１０月３０日(木)地球イチバン「世界一の星空がくれたもの」を見た。「世界一」とは言い過ぎではないかとも思ったが、実際に夜空の保護活動を評価している国際ダークスカイ協会というグループによる最高級評価があるとのこと。大変興味深い内容だった。周りに光があると方向感覚を失ってしまう鳥がいることなど初めて知ることもあった。暗さを作り出すことの価値を大切にしたいというメッセージは、とてもおもしろい視点で、国内でも展開できるのではないかと思った。出演者が旅先で出会った方のお父さんが、人生でベストなものは無料だということばをいつも語ってくれていたそうだ。これだけ経済活動を取り上げた番組やニュースが多い中で、人生でベストなものは無料だということばの効いたドキュメンタリーはすてきだと感じた。これからも楽しみにしている。

○　１１月１(土)ＳＯＮＧＳ「中島みゆき～テーマ曲の世界～」を見た。連続テレビ小説「マッサン」の映像とともにテーマ曲の「麦の唄」が流れて、「マッサン」の今までのストーリーと中島さんが「麦の唄」を依頼されたときの気持ちが伝わってきた。中島さんがＮＨＫからテーマ曲の依頼を受けたときには台本や資料がたくさん送られてきて、「なぜ中島かと考えた」という本音も聞けて、とてもおもしろかった。最後に「世情」と「地上の星」を歌ったときは感動した。中島さんの魅力満載の、本当にいい番組だった。

○　１１月３日(月)「大探検！京都国立博物館～みやこの美へようこそ」(総合 前8:15～8:58)を見た。９月にリニューアルした京都国立博物館を、井浦新さんと青木さやかさんが案内する内容だった。井浦さんは「日曜美術館」に出演しており美術品になじみはあると思うが、「あさイチ」に出演していて、美術には縁のなさそうなイメージの青木さんが案内するというのがおもしろかった。美術館に行きたいと思ってはいるが、どう楽しんでよいのか方法が分からないという青木さんに共感し、大変興味を持って見ることができた。仏像は、角度によって表情が違う。今回の展示ではふだん見られない後姿も見られるとのことで、さらに興味が湧いた。仏像の目は、左右対称

でないので温かみのある顔に見え、もし、左右対称だと冷たい顔になるそうだ。また、仏像はみんなが見るものなので健康的なのが一番だという言葉が大変印象的だった。仏像や彫刻というと見方が分からず何となく敬遠していたが、大仏師という人が丁寧に見方を教えてくれ、仏像鑑賞のおもしろさを知った。また、帯匠という人がおり、紋と着物が合った粋な格好で登場したが、京都にはさすがにいろいろな職業があるのだと感心した。千利休の子孫がお茶をたて、利休の時代からある釜で湯を沸かし、利休と同じ時代にいる気持ちで茶を飲む場面は、感動的でもあった。古い仏像をＣＴに写して解明する仏像の人間ドックや、高山寺「鳥獣人物戯画」の謎を、修復から解明したことにも大変驚いた。昔の人々が作ってきたものがこの時代まで残っており、謎の解明をしている裏側をおもしろく見せていた。この番組で博物館や美術館の鑑賞のしかたがよく分かった。

○　ＮＨＫ大河ドラマ「軍師官兵衛」をいつも楽しく見ている。１１月９日(日)「秀吉の最期」はひとつの山場だった。秀吉役の竹中直人さんは迫真の演技で見事だった。官兵衛役の岡田准一さんもすばらしい役者さんだと思う。竹中さんと家康役の寺尾聡さんがしっかりと脇を固めている。今年の大河は、引き締まったドラマになっており、今後もこうあってほしいと思う。

○　１１月８日(土)ＮＨＫスペシャル　ジャパンブランド　第１回「日本式サービス強さの秘密」と９日(日)の第２回「日本式サービスで世界をめざす」を見た。これまで日本経済の原動力は自動車や家電など“製品”だったが、最近は、様々な“日本式サービス”を新興国に提供し成功しているとのことだ。円安になっても輸出がなかなか伸びないなか、企業に勇気を与える番組だったと思う。日本のモノづくりの神髄である創意工夫の努力、ＰＤＣＡによる改善、あるいは現地・現物・現場主義や、お客様第一の考え方、人材育成などが、サービスの世界でも同じように生かされている。サービスは製品と違って、各国の生活様式、習慣・慣習等の文化に合わせなければならない。自動車のようないわば“文明”の利器は、物さえよければどこの国へでも輸出できるが、“文化”はその国独特のものがあり簡単に輸出はできない。むしろ、その国の生活習慣や宗教などを学びそれに合わせ新たに作り上げていくということが重要なのだろうと思った。全体を通して、企業に勤める人間にとって勇気づけられる内容だった。今回とは逆に、海外の企業が日本に進出するとき、どういう文化の壁があり、それをどう乗り越えていくのかを取り上げた番組も見てみたいと思う。

○　１１月１２日(水)クローズアップ現代「追跡“中国サンゴ密漁団”～揺れる日本の海～」は、非常にタイムリーな話題を取り上げており、興味深い内容だった。日本の

対応が非常に歯がゆいが、中国では赤サンゴの採取は、厳しく取り締まられているそうだ。中国で見つからないよう、密漁したサンゴは台湾に売られ加工される。何とも手の施しようがない。巡視船が５隻しかなくて取り締まりが十分できずとのことだが、何とか有効な手立てを政府に考えてほしいと思った。

○　１０月１８日(土)ＥＴＶ特集「ヒロシマ　爆心地の原子力平和利用博覧会」は、米国の政策として原子力の平和利用を進めるため爆心地広島をシンボリックにプロパガンダに活用したということを、当時の内部資料や存命している当事者へのインタビューを通して克明にあぶり出した、大変丁寧に作られているドキュメンタリーだった。当時の日米の関係性や価値観、広島県民の心情を客観的に映し出していた。ただ、素材やテーマがよかっただけに、反原発メッセージが中途半端に織り込まれ、結果的に反原発のプロパガンダのような印象が残ったのは残念だった。よけいな主義主張を織り込まず、視聴者に判断や評価を委ねるような構成のほうが、このテーマについてはよかったのではないかと思う。

○　１０月２０日(月)東北発☆未来塾「岩佐大輝　ＩＴ農業のチカラ　“畑復活”へイバラの道」と１０月２７日(月)「岩佐大輝　ＩＴ農業のチカラ　発表！“畑復活”へのシナリオ」を見た。東日本大震災のあとの農家の復興についての内容だった。３軒の農家に学生が行き、農家が抱える課題に対して学生なりに提案するというもの。学生だけではなかなかいい提案ができないのではないかという不安を持ちながら見ていた。ところが、学生ならではの視点で新鮮な提案があり大変驚いた。なかなか所得が伸びないと悩むバラ農家には、これまで商品にならなかったバラを加工品に販売する提案、白菜農家には、中国では白菜が縁起物であることに目をつけて白菜のお正月の飾りを提案、震災の津波で防風林が倒れてしまいジュース用のトマト栽培を余儀なくされている農家には、ジュースに美容という付加価値を付けて売るアイディアを出した。学生ならではの感性がおもしろく全国の農業関係者が見ても十分ヒントとなる番組だった。１年後、２年後、この農家がどうなっているのか、追跡するとおもしろいのではないかと思った。

○　１０月２１日(火)先人たちの底力　知恵泉(ちえいず)「人脈力を養え！～西行　派閥を超えたネットワーク」は、歌人の西行を「派閥を超えたネットワーク」というテーマで取り上げていた。西行自身は決して派閥やネットワークを作ろうと思って生きていたわけではないと思うので少し強引な感じもした。しかし、番組を見て、西行のネットワークづくりの達人という面もなるほどとうなずかせる要素があった。西行を、

さまざま立場の人に信頼され派閥を超えたネットワークを持つ、人間力の達人として取り上げる視点がすごくおもしろかった。もし、西行をドラマにしたら、どう描かれるのだろうと関心を持った。ただ、最後に司会者の方が一首詠むのだが、これはないほうがよかったと思う。

○　１０月２５日(土)ＥＴＶ特集「棋士ｖｓ将棋ソフト　激闘５番勝負」は、人間とコンピューターのどちらが強いかという結果だけを追う内容ではなく、将棋ソフトを開発する本質的な意義、人間の思考プロセスを象徴的に表わす将棋というゲームの性質や奥深さ、コンピューターと人間の思考方法の違いなどを分かりやすく対比していた。そこに棋士とソフト開発者それぞれの人間模様が上手に織り込まれており、科学的視点と勝負に関わる人間のドラマ性が両立している、大変見応えのある内容だった。棋譜や棋士の来歴などの分かりやすい解説、人工知能の紹介など、番組全体を通して単に将棋ファンを楽しませるにとどまらない工夫がされていた。将棋に関心のない視聴者にも人間とコンピューターの共存のあり方を考えさせる機会となる良質のドキュメンタリーだった。

○　１１月５日(水)１００分ｄｅ名著　菜根譚「逆境を乗り切る知恵」と１１月１９日(水)「人づきあいの極意」を見た。「菜根譚」は司会の伊集院光さんも農業の本かと思ったというくらい、知らない人も多いと思う。難しい内容かと思っていたら、俳優の平泉成さんが路上で悩みを持って来た人にふさわしい言葉を売るおじさんに扮(ふん)し、その意味を教えてくれたり、大阪大学の湯浅邦弘先生が日常生活に置き換えて一つ一つ丁寧に解説していて分かりやすくなっていた。「菜根譚」は 400 年も前に中国で書かれた本だが、今を生きる私たちにも十分に通じる教えだということも理解できた。「人生のピークは過ぎてからしか分からない。また、人生のどん底もそのときには分からない」という言葉が、とても印象に残っている。

○　１１月１４日(金)団塊スタイル「あなたもだまされる！？～悪質・詐欺商法の新手口～」では、詐欺被害額が平成２５年に 489.5 億円と過去最悪の結果となり、警察が本気で取り組んでいる様子が紹介されていた。詐欺商法の新手口や被害回復型詐欺の手口などをドラマで再現していて、とても分かりやすい内容だった。シニア世代が詐欺に遭いやすいのは、独り暮らしで会話をすることがなく情報が遮断されている中に、うその情報が集中的に入ってくると自分では守れないからで、今は大丈夫かもしれないが、５年後、１０年後に大丈夫かは自分でも分からない、とのことばが心に残った。少しでも被害に遭う人たちを減らすためにも、このような番組を増やしてほしいと思う。ただ、午後８時という時間にお年寄りが見てくれるのか、少し不安ではある。

○　１１月１４日（月）　課外授業ようこそ先輩「辞書にないことばを創ろう～日本語学者金田一秀穂～」を見た。授業の内容は、私たちが普段なにげなく使っている言葉に対して、ぜそういうのかと疑問を投げかけ、子どもたちが“新しい言葉を創る”というものだった。生徒の一人が、人に無視されたときの気持ちを「痛黒（いたぐろ）しい」としたのは、既成の言葉では表しきれない、心の痛々しい思いが伝わってきた。我々大人も、もう一度、意識して言葉を大切にしなければいけないと思った。授業そのものについては、参加した子どもたち一人一人に、もう少し愛情をもって接してほしいと感じた。

○　１１月３日(月)にＢＳ１スペシャルで放送した「“世界の壁”を越えろ～松山英樹×石川遼　密着１年～」（ＢＳ１　後8:00～9:49)を見た。ゴルフスタイルを変えるため懸命に練習する石川遼と、肉体改造に励む松山英樹に密着取材したもので、彼らの努力や、実は仲がよいという２人の姿など、意外な一面を知ることができた。この１年間、彼らがどういう思いでアメリカで過ごし、どういう課題を持って取り組んでいるかということもかいま見られて、非常に興味深かった。

○　１１月１３日(木)クローズアップ現代「“ふたり”でつかめ　メジャー制覇～松山英樹と石川遼～」は、ほとんど１０日前に見たばかりのＢＳ１スペシャルの焼き直しで、正直なところがっかりした。唯一違う点を言えば、「クローズアップ現代」には青木功プロがゲストとして出たことだろう。しかし、ＰＧＡで闘う上で最も大事なことは「パッティング」という彼のコメントがあったのに、二人のパッティングについてはほとんど触れていなかった。ＢＳ１スペシャルの密着取材がよかっただけに、非常にがっかりした。同じテーマを扱うならば、もう少し工夫したほうがよかったと思う。

○　１０月３１日(金)プレミアムアーカイブス　ハイビジョン特集（再)「ぼくはロックで大人になった～忌野清志郎が描いた５００枚の絵画」（ＢＳプレミアム　前9:02.55～11:01.55)を見た。忌野清志郎さんに関しては、以前、爆笑問題の太田光さんが足跡を追っていくという番組があったが、太田さんの忌野さんに対する思いが出過ぎていた印象だった。今回の番組は、本当に忌野さんが描いた自画像やその時々で描いた子どもの絵や漫画をそのまま見せて、実際に忌野さんの人生と関わってきた人のインタビューを交えながら見ていくもので、ファンとしては自分なりの忌野さんの解釈を深めていくことができてよかった。衝撃的だったのは、清志郎が高校時代に描いた自画像に顔がないということ。きれいだがはかなくて切ない感じがすごく出てい

た。「ぼくの好きな先生」のモデルになった、高校の美術の先生もインタビューで出てきた。とても素敵な人で、美術研究室という所が清志郎や人生に迷っていた生徒たちの当時の居場所になった理由が分かった気がした。忌野さんが描いていたマンガや詩、日記の表現が赤裸々で、若者らしいエネルギーを感じた。自分の思考とか思想とか自分とは何かみたいなものを、詩とか絵画の作品によってこの人は深めていったのだというのがよく分かって、「ぼくはロックで大人になった」という題自体も、なるほどと思った。

○　１１月１２日(水)ザ・プロファイラー～夢と野望の人生～「夢中になったら止まらない　手塚治虫　マンガの神様は究極の欲ばり」を見た。これまでも手塚治虫の番組があると見てきた。今回の番組では、次から次へと出てくる若手の手法を自ら研究して、取り込んでいくというそのエネルギーを感じ、手塚さんが常にトップであろうとしたその貪欲さのようなものがすごくよく出ていた。やっぱりこの人は天才だと実感できた。手塚治虫については、作品のテーマの多様さや命に対する思考の深さが彼の人生のどういうところから出てきたのかにとても興味がある。まだそういう視点で取り上げた番組には出合っておらず、ぜひ、いずれ、見てみたいと思った。

○　ザ・プレミアム　花子とアン　スピンオフスペシャル「朝市の嫁さん」(ＢＳプレミアム 後 7:30～8:59)を見た。「花子とアン」には、鈴木亮平さん、窪田正孝さん、賀来賢人さんというイケメン俳優が３人出ていたが、彼らに注目した女性ファンのためのサービス番組という感じがした。軸になるのは、朝市が花子に結婚報告をしに行くところに、花子と朝市の関係を疑う婚約者が追っていって探る話なのだが、吉太郎と醍醐の恋、宇田川先生の結婚話などが織り込まれ、コミカルな要素もあって楽しめた。吉太郎の硬派な姿にキュンとして、英治の優しく包み込むような瞳を堪能し、朝市の一途なところに安心する。思い出の図書館での朝市と婚約者のシーンでは、抱き合ったりせずただ見つめ合うだけというところもまたよい。女性視聴者が楽しめるよいドラマだった。

○　１１月５日(水)広島発！地域ドラマ「戦艦大和のカレイライス」(ＢＳＰ 後 10:00～10:59)を見た。１１月に３週連続で地方発ドラマを編成したことは評価したい。ぜひ、ドラマでいろいろな地方の特色を取り上げていってほしい。まだ１回も地方発ドラマをやってない他の県にも頑張ってほしい。今回は、地域発ドラマとして、これまでにないファンタジーの要素のあるドラマになっていた。シリアスな場面もありながら、現代に戦艦大和の料理人がタイムスリップするという設定で、描き方が特徴的だった。原爆ではなく、あえて呉で戦艦大和にスポットを当てているところに、地元局ならではの視点を感じる。また、主演の三浦貴大さんがすばらしい演技だった。タイ

ムスリップというのは奇想天外すぎてリアリティーがないと思ったが、経済効果に結びつくということではないかもしれないが、単に地域でドラマを制作する以上の意義が出てくると思う。地域のよさを見出していくという意味でも、これからも地方発ドラマを盛り上げていってほしい。４７都道府県が全部そろう日はいつだろうかと楽しみに待っている。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年１０月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

１０月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ナビゲーション「追いつめていた“拉致”～元捜査関係者たちの告白～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に､放送番組モニター報告と視聴者意向報告､１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　森棟　公夫　（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
委員　　大島　宇一郎（中日新聞社取締役管理局長）
　　加藤　勇二　（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
　　小寺　功子　（三重県漁協女性部連合会会長理事）
　　佐野　俊和　（コマツサービスエース（株）代表取締役社長）
　　杉浦　宇子　（弁護士）
　　田中　章義　（歌人・作家）
　　中村　智景　（四季料亭「助六」女将）
　　野田　雄一　（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）

（主な発言）

＜ナビゲーション「追いつめていた“拉致”～元捜査関係者たちの告白～」
（９月２６日(金)　総合　後 7:30～7:55　中部ブロック）について＞

○　拉致問題に関して過去にあった事実を知り大変驚いた。重要なテーマであり、この問題が微妙な時期にあてたタイムリーな放送であった。それだけに、２５分間という短い番組だったのはもったいない。１時間くらいの番組で、さらに多角的に見てみたいと思った。難しい状況が多く含まれている問題だとは思うが、中部地方だけでなく、全国向けにも放送をしてほしい。長期間にわたるアプローチで証言者との信頼関係を築いた今回の取材はすばらしいと思う。ぜひ、全国規模で真実を掘り起こし、しっかりと取り上げ伝え続けてほしい。

○　関係者の証言や当時の捜査資料をもとに、これまで語ることができず、それぞれの

立場でじくじたる思いをしていたであろう人たちの意見を拾い上げていた。当時かかわった人たちにとっても、ひとつの区切りとして、取材することによって得られたものがあったのではないか。ただ、現在進行形の問題であり、本当に扱いにくいテーマだと思う。何度か見るうち、これまでになく重い番組だと思った。もし自分の子どもが拉致されたら、大切な人がそういう状況になったら、自分が拉致されていたらということを考えさせられた。個人の力では解決できない問題だが、番組を見て、今後このようなことが起こらないようにしていかなければと感じた。

○　公安への取材はすごく難しいと思う。元捜査員のインタビューなど、地道な取材を積み上げてきた結果出来た努力作だと思う。拉致問題を取り上げたこれまでの報道では、どのようにして起こったかをイメージしにくかった人もいただろう。捜査資料や当事者の証言をもとにリアリティーをもって伝えられたことは、拉致問題を考えるうえで大きな意味があったと思う。北朝鮮に絡むいろいろな痕跡が国内にあったにもかかわらず、外交問題にもできず、その後の拉致事件を防ぐこともできなかったというのは、本当に残念なことだと感じた。今回、石川県に絞って事件を追いかけたことが拉致問題の理解を深めたが、実際には、どれだけの被害者がいるか分からない。ほかの事案についてもおそらく当局は捜査をしていると思う。今後、北朝鮮の再調査を巡って情報が飛び交う中で、メディアとしてしっかりと検証できるよう準備し、結果が出たときに、その評価につなげるとともに、いろいろな事実を明らかにしていってほしい。

○　北朝鮮による拉致が４０年前から分かっていたのに、警察も国も手をこまねいているだけで何もできなかったことを知り、とてもショックだった。自分の子どもがもしこういう状況にあったらと思うと居ても立ってもいられない気持ちになった。当時、北朝鮮の関係者を取り押さえたにもかかわらず証拠がないからと釈放。その後のさまざまな北朝鮮関係の報道をみても、後手に回る日本の対応は４０年たっても変わらないということを腹立たしく感じた。番組は、時間をかけよく取材されていた。証言に基づいた映像や証拠品、暗号文にはとても驚いた。事件関係者へのインタビューでは、本当にこんなことまで言って大丈夫なのかと思った。中部地方だけではなく全国向けにも放送し、拉致問題を皆で考えていきたいと思わせる番組だった。ぜひ今度は政府関係者にも出演してもらい、今後の対応をどうしていくのかというところまで見せられると、さらなる進展があるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

全国放送への展開は考えてはいるが、北朝鮮の再調査の結果

がずれ込んでいていつ出るのか分からない。そのタイミングを計りながら放送できればと思っている。石川県に限定した作りになっているので、全国放送に向け、もう少し広げていくことができないか考えている。今もまだ捜査中であり、どこまで情報を出していけるのかということも含め、取材を続けていきたい。

○　北朝鮮の再調査の報告がずれ込んでいると報道されている中での放送で、拉致問題は本当に難しいとつくづく感じた。今回、４０年も前の真実を初めて知り驚いている。国の体制を非難するつもりはないが、縦割り行政の弊害もあるのではないか。国、地方、民間が力を合わせて対応していれば、もう少し結果が異なっていたのではないか。まだまだ４０年前の事件について知らない国民が多いのではないかと思う。ぜひ全国放送に展開し伝えてほしい。まだ特定されていない拉致被害者が何人いるのか分からないが、一日でも早い解決につながるよう願っている。

○　大変興味深く見た。拉致問題については知らない人はいないのではと思うほど最近ニュースや番組で取り上げられているが、過去に石川県警がこの問題に迫っていたことは初めて知ったので本当に驚いた。北朝鮮の工作員と思われる人物を捕まえ、証拠もありながら、国家犯罪という大きな壁によって解決できなかった。関係者の言葉の中にその時の悔しさがひしひしと伝わってきた。そして、今もまだ解決できていない現状に腹立たしさを感じた。今年に入り、拉致問題に明るい兆しが見えたと思ったら、再調査の報告が遅れるなど、いまだ不安が残るが、今後の動向に期待したい。拉致問題はあまりにも大きすぎて、この短い時間の中では知ることができないことがたくさんあると思うので、もう少し時間を取って報道してほしいと思った。

○　北朝鮮による拉致再調査が話題となっていることもあって取り上げたのだと思うが、２５分の番組を構成するには当事者のインタビューと事実の確認だけでは厳しかったように思う。今さら、早い段階で石川県の警察は現場を押さえていたのに、なぜその後の被害を止められなかったのかと言ったところで、掘り下げようがない話に思えた。全国にある同様の事例と失踪事件とを突き合わせて検証材料にし、今後の調査に役立ててほしいという総括は現実味が薄く、本気で国に迫るほどの真剣味や迫力は感じられなかった。日本人が平和をおう歌している中、想像もしなかった国家犯罪がいかに戦略的に行なわれていたかを明示したり、他国の脅威が実存するにもかかわらずいまだ薄い国民の国防意識を課題として提起したり、あるいは合法・非合法を含めて諜報活動と国家間のせめぎ合いがある中、国家や地方はどう対応すべきかを考えるなど、このタイミングでこのテーマを扱うならば、そういったことを警鐘として示す

必要があったのではないか。「ナビゲーション」は、着想は大変興味深いが、視聴後、モヤモヤした気分で終わることが多い。今回も、視聴者に何を訴えたいのか、改めて今、番組にすることで、何を訴求するかというところがいまひとつ分からなかったのが残念だった。

○　今回の「ナビゲーション」は、見たあとに疑問が多く残った。公安から引き出した事実は、長い時間をかけて取材し得られたことは分かった。拉致被害が公に認定される以前に、加賀市沖合に停泊していた工作船の乗組員を逮捕していたものの裏付けが取れず起訴できなかったことはしかたがないと思う。密入国、密出国の事実は当時もありながら、海上保安庁と連携して警備を強めたりしなかったのなら、国全体として当時は拉致の事実はあまり考えられていなかったことになる。そうであれば「追いつめた」というのは言い過ぎなのではないかと思った。久米裕さんが拉致された事件は、詳しいことはこの番組で初めて知った。旅館の客が 1 人帰ってこないと通報したのは誰だったのか、一緒に泊まっていた男については、工作員の教育を受けていたなら、職務質問したときに簡単に話してしまったりしないのではないかなど、その行動は不自然にも感じる。もっと裏に何か事情があるのかもしれないが、番組に出てきた状況からは、疑問に思うことが多くあった。どうして真相を解明できなかったのか。国家犯罪と認定できなかったのは当時の外交能力の問題があったとは思うが、たとえそうであったとしても、個別事件として捜査協力を求める方法はなかったのか。そして、なぜ 2000 年に入ってから事実が一気に出てきたのか。拉致によって大切な人を理不尽に奪われた被害者家族の気持ちを思うと、何とか無事を確認できないものかと思う。しかし、微妙な時期でもあり、報道を鵜のみにしてよいのか、何が本当で何が隠されているのかという見方をせざるを得ず、疑問に思うことが多く、消化不良の感じがした番組だった。

○　もともと公安から情報を得ることが非常に難しいところで、どこまで番組で情報を出していいのか、判断に迷うと思う。現在進行中の問題であり、今後にマイナスの影響をもたらさないよう配慮も必要となる。そのような事情から疑問が残ってくるのではないかと思う。ただ、番組のまとめ方については、警察や海上保安庁、自衛隊、政府も通して情報の共有が必要だとあったが、それは最低限のことだろうと思う。たとえば 1977 年の宇出津事件では、これだけ証拠が出てくるのだから、国家犯罪として認定できなくても地元の警察レベルで情報が出せなかったのか。もし情報が出ていれば、メディアも大きく取り上げていただろうし、そうしたらわれわれの警戒心は非常に高まる。なぜ、そうできなかったのか疑問に感じる。全国放送への展開については、石川県の事件であるが、この番組をそのまま全国の方に見てもらい、全国の方がどう

考えるかを問うことが、拉致問題の理解を深める一番近道ではないかと思う。非常に貴重な番組を見たと考える。

○　1971 年石川県で発生した事件だが、当時のはっきりとした記憶はなく、興味深く視聴した。今でこそ北朝鮮は拉致を認めているが、当時の状況からは国家犯罪として立件することの困難さを捜査関係者の証言を取材することにより鮮明によみがえらせていた。ただ、当時“拉致”との認識は薄く、北朝鮮のスパイ活動程度としか認識していなかったこと、情報の収集、分析が一部に偏っていたため国家挙げての対応とならなかったことが今となっては非常に悔やまれる。証言をした関係者のじくじたる思いは理解できるが、番組が終わったあとに、当時の状況ではしかたがなかったとのあきらめの感情と、しっかりと捜査していればその後の拉致を防ぐことができたのにといった感情の中間にある微妙な感覚を感じた。事実は事実として伝えることは重要だが、何を主張したかったのかもう少し焦点を絞った方がよかった。

○　どの時点で石川県警が何を解明していたのかが番組のポイントだと思う。第１に、1971 年の加賀市の不法上陸者逮捕事件は、韓国入国の為の日本人パスポートの入手の疑いであり、この段階では石川県警は拉致という行為自体の認識はないということ、第２に 1977 年の宇出津事件は、石川県警は工作員教育を受けた者が犯した国家の組織的拉致事件と確信したが、当時の警察庁は金大中事件のトラウマから「国家の関与の証明困難」として国家犯罪として扱わなかったということ。1971 年にさかのぼり、よく調査したと思う。また、北朝鮮が拉致の再調査についての報告を遅らせており、今後の発表内容の真偽判断にあたり良い材料を視聴者に提供したと思う。政府は、国家の介入が証明できずとも拉致の事実を掴んだ以上、被害の拡大を防ぐことはできたのではないかとその対応を残念に思う。今回、番組を２回見て初めて石川県警がどの時点で何を知っていたかを理解した。１回の視聴ではなかなか理解することは難しいのではないか。最後に石川県警の認識を時系列的に整理すると分かりやすかったと思う。

（ＮＨＫ側）

番組では、取材したものすべてを出せたわけではなく、そのため消化不良と受け止める視聴者も出てしまったのかもしれない。制作スタッフの間では、当時の国や県警の対応を糾弾する番組を今作るのは決して日本にとって得ではないのではないかという意見もあり、番組の焦点をどこに当てるか議論を重ねてきた。その結果、当時、全国の各機関が集めた情報を合わせて今

後の拉致問題解決に役立ててほしいということを番組の提言の１つとして出そうということになった。これから全国放送に展開するためにも、過去の事件として終わらせるのではなく、国の統治機構の在り方、あるいは危機管理の在り方、見直さなくてはいけない課題を指摘しながら、今後につなげていく番組にしたいと思っている。

（ＮＨＫ側）

当時、情報共有がうまくいってなかったという実態はあるが、まだ拉致という認識もなかった中では、拉致を口にすること自体が外交関係に影響を及ぼすと思われていた。しかし、そのような状況にあってもなお、何かできなかったのかという現場の思いを今に生きる教訓として、番組を通じて少しでも伝えたいと思う。番組の時間が限られており、細かい部分を伝えきれなかったという実情もある。次はもう少し丁寧に説明できたらと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　９月１２日(金)　静岡流「検証　防潮堤計画」(総合 後 7:30～7:55　静岡単)を見た。静岡県は横に長く、海岸線が続く地形である。防潮堤が地域でどのように議論されているかを扱っており、県民もほとんど知らないであろう事実が番組によって検証されていた。とてもよい番組だった。静岡に特化した番組だが、防潮堤計画は東日本大震災の被災地をはじめ、日本各地どこでも起こりうるものだと思う。他の都道府県はどうなっているのか気になった。防潮堤計画について奥深くまで取材されていたと思うので、ぜひ、全国での展開を検討してほしい。

○　９月２２日(月)の「おはよう東海」の企画「愛知・安定電源を確保せよ！自由化へ新電力の戦略」は、電力問題が話題になっている中、新規参入した小規模事業者の動きをリポートしたタイムリーな内容だった。ただ、一部を取り上げることとふかんすることのバランスが大事だと思った。電力問題はすごく大きな話で、安定電源を確保せよと言われても何をもって安定電源というのか、知っているようで知らない問題である。これを知っている前提で話を展開されると、非常に分かりにくくなる。しかも、取り上げた事業者が、売り上げの中心が太陽光でその穴埋めのための電力を探しているようなイメージになったが、その代わりとして番組の中で取り上げられたのが廃棄

物処理場の発電やバイオガス。太陽光の穴埋めなのか、太陽光はそこそこにしてそういった電源を普及しなさいということなのか、そのはざまで小規模の事業者が大変だということを言いたかったのか。リポートを構成した記者の立ち位置がいまひとつ見えなかった。さらに、予定していた発電量を確保できなくて電力会社から電気を買うと３倍の値段になるということだが、こういう話が出てくるのなら、電力会社はどう考えているのかも一言ないと、バランスを欠くように思う。短いリポートなので、あれもこれもというわけにはいかないだろうが、軸をしっかりして展開したほうが、見終わったあとにこの番組を通して何を言いたかったのか明確に伝わるようになるのではないかと感じた。

○　１０月３日(金)ナビゲーション「地域をむしばむ危険ドラッグ～店舗をめぐる攻防～」を見た。街中で堂々と危険ドラッグが売られている状況に驚くとともに、その背景に中心市街地の衰退による空き店舗の増加があるなど、危険ドラッグ拡散の一因を知ることができた。一方で、対策として効果のあまり期待できない不動産業界の動向に焦点が当てられ過ぎたうえに、特段の警告や啓発的なメッセージもなく、行政や警察の手の及びにくいところは地域で守るといった、ぼんやりとした総括で終わってしまったのが極めて残念だった。警察も行政も手をもこまねいているわけではなく、条例の制定や対策強化、検挙といった事例はここ最近、静岡のみならず各地で起きてきている。全国の事例や動向なども併せて紹介するべきであったように思う。テーマからいっても今後継続的に警鐘を鳴らすべき、重要な内容だった。

○　１０月３日(金)ナビゲーション「地域をむしばむ危険ドラッグ～店舗をめぐる攻防～」を見た。番組では、警察だけではなく、厚生省の麻薬取締部が入ってきていて、規制がやりやすくなっているという実態を説明していた。ただ、検査のための人と機器の数が足りないということで、社会にとって非常に危険な影響をもたらしうる危険ドラッグ対策にもう少しお金を使ってほしいと思った。危険ドラッグの店が駅前に入ってくると地域の不動産の評価が落ちる。不動産屋ができるだけ排除しようと努力するという話もあったが、法律をもっと厳しくしないと危険ドラッグは止められないと思った。

○　１０月１０日(金)ナビゲーション「戦争に隠された震災～昭和東南海地震から７０年～」を見た。戦争中に三河や東南海で地震があって、戦争時であるがゆえに被害が全国に知れ渡らず、救済もなかった。当時小学生だった三重県の体験者が、高齢になっていく今、インタビューでそのときの状況を話した。地元の中学生が直接、体験者であるお年寄りの声を聞いて、通学路の避難経路を見たりハザードマップを作ったり

していた。体験者の語る様子で被害の深刻さをすごく感じたという。もう１回見たいと思う番組だった。

○　１０月１０日(金)ナビゲーション「戦争に隠された震災～昭和東南海地震から７０年～」を見た。昭和１９年１２月７日の昭和東南海地震と３７日後の三河地震は、戦争中に起き、中京工業地帯が被害に遭ったので、軍事上の被害を隠すために記録を残してない。昭和東南海地震の翌日の新聞にもほとんど記事が出ていない。死者の数は３０年後に調べたら 1,200 人と 2,300 人。かなりの人が亡くなられた大きな地震だった。番組では、当時の小学生が、疎開先の三重県で地震に遭ったときに書いた日記がベースになっている。学ぶところが多い番組だった。ただ、残念だったのは、行政があまり出てこない。「みえ防災・減災センター」というのが出来て、三重県と三重大学が活動しているということは分かったが、三重県がどのようなことをしているかもう少し取り上げてもよかったと思う。当時は戦争中のことで、国は事実を一生懸命隠していた。今の時代は情報を集めることができる。できるだけ将来に対して情報を残してほしいと思った。

○　９月２１日(日)ＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ　地球大変動の衝撃　第４集「火山大噴火　迫りくる地球規模の異変」を見た。御嶽山の報道の１週間前に放送があった。日本列島は１１０もの活火山があって、地下はプレートが沈み込むマグマ生成工場だと表現していた。火山活動がいつ正常の範囲を越えるのか、兆候をどう捉えて、どう命を守るのか、そして、災害とどう向き合うかを考えさせられた。６日後の９月２７日に御嶽山が突然噴火した。戦後最大の被害を出した大噴火が、皆が何も知らないうちに突然、起きた。気象庁や火山噴火予知連絡会はどう分析していたのか気になった。火山性の地震は数日前から予兆はあったが、予測は難しかったとのこと。番組を見て、かなり火山の研究は進んでいると感じていたが、やはり火山の噴火は、予測が大変難しいということなのだと思う。警戒レベルについては、その仕組み自体知らなかった。多くの国民もあまり認識がないのではないか。台風などのときにはさまざまな情報が出されるが、火山の警戒レベルについてはあまり報道されないのはなぜか、今後の報道の在り方を考える必要性を感じた。研究者や行政、地元の人たちが連携し、しっかり伝えていくことが必要で、それが国民を守ることにつながるのではないかと思った。

○　御嶽山の噴火のときに、たまたまＮＨＫのカメラが山に上がっていた。あれはどういう状況だったのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「にっぽん百名山」という番組を撮っていた。第一報を出したヘリコプターは「にっぽん百名山」の空撮を撮ろうとしていたもので名古屋の基地から飛んだヘリコプターが撮っていた。ヘリコプターは燃料の関係で時間がもたないので、順次、各地から飛んだヘリコプターが映像を送り続けた。

○　９月２８日(日)　ＮＨＫスペシャル　老人漂流社会「“老後破産”の現実」を見た。独り暮らしの高齢者が 600 万人に迫る勢いということに驚いた。そのうち年金収入が 120 万円未満の人が半数近くの 270 万人で、生活保護を受けている人は７０万人。あと 200 万人は生活保護を受けていないとのことだ。老後破産の事例では、月１０万円の年金で、貧しい生活を送る人が出ていた。今後、年金は財源の問題から引き下げられる傾向にある中、これは特別の問題ではない。このような人が世の中にあふれたらどうなってしまうのか大変心配になった。国民皆年金・皆保険という時代にできた年金制度は、もともと家族で生活をするという前提なので、老人一人一人がそれぞれ自立して生活するようにはなっていない。実態は不安な制度そのものだと感じた。紹介されていたフランスの制度では、年金、医療、介護をバランスよく、それぞれ必要な所に資金を充当するもので、そういった制度の再構築を今こそやってほしい。そして、地域ぐるみでお互いが助け合う世の中を作っていく必要があるとつくづく実感した。

○　１０月４日(土)ＮＨＫスペシャル「緊急報告　御嶽山噴火～戦後最悪の火山災害～」(総合 後 7:30～8:14)は、噴火翌日を記録した映像があり、とても生々しく、涙なしでは見られなかった。御嶽山には昨年まで登っていたので山の状況がよく分かる。映像から噴石の脅威を目の当たりにし、衝撃を受けた。ただ、時速 300 キロの噴石がどのくらいの衝撃をもたらすのかという実験を行っていたが、遺族や行方不明者の家族が見たら、ショックを受けるのではないか。その点については、配慮してほしかった。ある被害に遭われた人が家族のために残していたサンドイッチのエピソードは、家族がよく取材に応じてくれたと思って見ていた。今まで御嶽山に登っていて、噴火の警戒レベルというものがあること自体知らなかった。もし、自分が遭遇していたらと思うと怖くなった。現場の映像や証言だけではなく、登山に対する重要なことをこのことから学んだ。まだ見つかっていない人もいる中で、大変、山の状況がよく分かった番組だったと思う。

○　１０月１日(水)歴史秘話ヒストリア「オヤジって大変だ～天下人・家康と子どもたち～」は、徳川家康の息子たちを取り　上げたもので、非常に分かりやすくよい内容

だったと思う。ただ、タイトルがどうしてこうなったのか疑問に思う。やわらかい感じで家康の子育ての苦労話が出てくるのかと思ったら、いきなり長男が切腹させられるなど史実どおりに展開されていく。こういう展開で「オヤジって大変だ」と現代風に捉えていいのか、疑問が残った。この回に限ってやわらかいタイトルのようだが、ＮＨＫらしくかちっとしたタイトルでもよいのではないかと思った。最近、新刊本などもタイトルだけ派手で中味がついてこない本が散見されるが、本件は、逆に番組の内容はしっかりしていたと思うので、あえて引き付けるために、おもしろいタイトルをつけたのだとしたら、あまりそういう手法を取ってほしくないと思う。

○　１０月８日（水）歴史秘話ヒストリア「“奇兵隊”デビュー！～幕末　若者たち一発逆転の夢～」を見た。高杉晋作の奇兵隊に参加していた人たちを取り上げた内容で、事実を踏まえつつ、架空の人物を登場させてドラマ仕立てで描いており、ストーリーがすごく分かりやすかった。歴史における一般的な高杉晋作像も知りたかったが、架空の人物を通して描くからこそ当時の若者たちの状況も伝わってきた。「歴史秘話ヒストリア」は毎回楽しみにしている番組だが、進行役の渡邊あゆみアナウンサーが、着物姿で何回か登場する部分はいらないと思う。ナレーションはすばらしいので、それだけでよいのではないか。せっかく幕末の若者たちの青春群像に、彼らの成長物語に感情移入していきたいときに、アナウンサーが目立ってしまい、取り上げている内容がすばらしいだけに気になった。

○　１０月３日(金)きわめびと「記憶力」を見た。かねてよりこの番組は、本当に物事を極めた尊敬に値する人と、極めたと言えば言えないこともない人を、玉石混交で紹介するスタイルで、感動とぼう然の落差が大きく、視聴するたびにストレスを感じていた。今回、前半は世界有数の記憶力を持つきわめびとが登場するが、老年女性を絡ませたその演出は、そもそもきわめびとに対する敬意があるのかという疑念と憤りを覚えた。後半は、円周率を１０万桁暗記しているという男性が登場、その秘密に迫るとあおりながらも実際は覚えていなかった。前述のきわめびとと同列で扱うことには違和感を覚えた。極め方の多様性を示しているようにも思えるが、こういう見せ方だと人間の可能性や努力の成果といった、極めることが生み出す本質価値が毀損されてしまうところが問題ではないかと思う。

○　１０月１２日(日)(総合 後3:05～6:15)ＮＨＫアーカイブ「シリーズ１９６４　第４回　モノづくり大国への道～新幹線を生んだ技術者魂～」で、「プロジェクトＸ：新幹線　執念の弾丸列車」を見た。懐かしい映像で大感激した。何かの記念に合わせてアーカイブス番組を放送するというのはよいと思う。

○　１０月１５日(水)「あさイチ」の「女性リアル　４０代からの“セクハラ”」というテーマを見て、しばし、くぎづけになった。中でも小島慶子さんの発言がとてもよかった。被害を受けた４０代の方が見ていたら、救われるだろうと思う。被害者の感情を認める視点は一般の人もきちんと知らなければいけないという考え方には好感を持った。誰にどんな状況でセクハラを受けたのか、相手との関係性はどうなのかによって、受け止め方も違う。セクハラの感覚の難しさをすごく感じた。表題に「リアル」とあったが、視聴者の生の声もあり、まさに、４０代のリアルが現われていた。本当に生の声を拾っていると感じ、かつ、その声をもとにためになる議論がなされていた。井ノ原快彦さんが、有働由美子アナウンサーへの対応で、ふだんこれで本当にいいのかと思うところがあると話をしたが、そういう感覚はすごく大事だと思った。好感度がかなり上がった視聴者もいたのではないかと思う。

○　９月２７日(土)に最終回を放送したザ・プレミアム「おそろし～三島屋変調百物語～」は、宮部みゆきさんの原作ということで期待して見た。１話ずつ完結する話かと思っていたが、最後に全部がつながり、全５回、大変おもしろかった。主人公のおちかという女性が、いろいろな恐ろしい話をさまざまな人から聞いていき、聞くことが解決に結び付く。解決のしかたが宮部みゆきらしく非常に意外性があり楽しませてくれた。ホラーの要素がありながらも映像は明るくきれいで、役者の役どころもうまく合っていた。口入屋の年寄りの役もよい味を出していた。また、着物の雰囲気がよくて、番組全体で楽しむことができた。

○　総合では、木曜時代劇「ぼんくら」の放送が始まる。近い時期に総合とＢＳプレミアムで、宮部みゆきさん原作のドラマが編成されている。たまたま重なってしまったかもしれないが、年間ラインナップの中で同じ書き手の作品を同時期に放送することについての規定はあるのか。たくさんの作家がいる中で、同時期に１人の書き手のドラマが重なるというのは、公共放送としてどうなのか疑問を持った。

（ＮＨＫ側）

出演者に関しては、ドラマで同時期に同じ人が重ならないようにという基本的な取り決めはしている。原作に関しては、特に規定はないが、近い時期に同じ原作者の作品が放送されることはあまりないと思うので、今回は特異な例だと思う。

○　土曜ドラマが大好きで見ている。「ボーダーライン」は、小池徹平さんや藤原紀香さ

んなど今どきの俳優の中に、橋爪功さんのようなベテランの俳優が要としてキャスティングされていて、大変見応えのあるドラマになっている。小池さんの役は、人と関わり合うのが苦手で仕事に積極的になれない青年。彼が大阪のミナミという特別な場所で個性を持った同僚たちと関わりながらどのように成長していくのか楽しみにしている。また、救急や消防の大変さも、ドラマでありながら改めて感じさせるもので、今後の展開が楽しみである。

○　ドラマ１０「聖女」全７回を見た。このドラマはミステリーとサスペンス色もあり、恋愛も織り交ぜていて、飽きずに終わりまで見ることができた。最終回は、やや中途半端な感じがあった。制作側の意図は分からないが、考えさせられたことがたくさんあった。女がいかに男の望む女性像に振り回されて自分らしく生きることが困難となっているかを、ドラマを見ながら感じた。法の下の平等とか家庭における両性の平等が言われて久しいが、根本は変わらない。男の側に、女性を性的にも人間的にも個として尊重する思想が根付いてないというのを、ドラマのストーリーに入り込んで実感していく感覚だった。“聖女”とは、特別な神聖さを持った女性であり、それがまた性として商品化されるというような印象がある。主人公・基子の母親は「聖女になりなさい」と子供の頃の主人公に言う。売春をしていた母親なのだが、彼女の言う“聖女”とは、女性の性を売り物にしないで生きる女性としての聖女ではないか。しかし、男性の目線からいうと聖女も性的対象から逃れられない。基子は聖女になることを求めながら聖女性を逆に売ってしまったという展開にも、いろいろな思いを巡らすことができた。気になったところは、相手役・晴樹の兄の存在が中途半端だった。また、基子の失明直前の常軌を逸した行動と失明後の病室での悟ったような独り語りの内容に飛躍があるような感じを受けた。ただ、晴樹の「彼女は必死に生きてきただけだ」「兄貴に彼女をけなす資格はない」という言葉に基子が救われた感じがした。基子の生い立ちやその後の生き方を考えると、最後は、海に入って見えなくなってしまうよりは、生きて同じような思いを抱えた子どもを救うというような光があるほうが救われると思った。

○　ＮＨＫ連続テレビ小説「マッサン」が９月２９日から始まり　初回から見ている。大正という時代に国際結婚を選んだ夫婦の　苦悩がひしひしと伝わってくる。その中にユーモアもあり、妻のエリーがひたむきに夫を支える姿に感動している。これからますますおもしろくなると思うので、見続けていきたい。

○　９月２５日(木)オトナへのトビラＴＶ「ブラックバイト」は、学生に対して就労前に、労働基準や労働条件というものの存　在、過重労働という犯罪概念を理解させるなど、啓もう番組としては大変よい内容であった。特に、無知のために強いられがち

な条件や環境を具体的に例示しての説明は、理解しやすい内容だったと思う。一方で、休憩がない、商品を買い取らされる、労災が認められないといった重大な問題と、１４分でも残業が付けられるなどのさ末な案が混在していたのは、本質課題の重要性が薄れてしまうようにも思えた。また、学生を集め白い仮面をかぶらせ、ブラックバイトについて聞くという演出は、本質的なブラックさをホラーとかスリラーのようなものと誤認させるだけなので、こういう演出はやめたほうがいいと思った。

○　１０月１０日(金)「１９６４から２０２０へ　オリンピックをデザインした男たち」(ＢＳ１　後 9:00～9:49)を見た。1964 年の東京オリンピックに向けて、当時、若く個性の強い人たちが集まって、オリンピックの裏方として活動していた。ポスターのデザインなどをし、それが文化財的な扱いとなり、後につながっていったとのことだった。当時の状況がよく分かる貴重な資料が出され、楽しく見ることができた。特に、亀倉雄策さんらのもとに集まった横尾忠則さんや永井一正さんなど若き才能たちの奮闘が印象的だった。戦後の復興も含め、オリンピックを中心に日本が変わっていったきっかけとして、デザインというものがあったのだと改めて感じた。西洋の影響を強く受けていた時代に、日本の精神を受け継いだものづくりに取り組む姿に、日本の伝統文化や紋様などのデザインの素晴らしさを再認識することができた。戦後の日本が大きく動き始めたきっかけが東京オリンピックであり、2020 年に開催されるオリンピックに関して今後どうあるべきかを考えさせられる内容だった。

○　１０月１日(水)俳優という名の男たち「中井貴一　父の背中を見つめて」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 10:00～10:59)を見た。中井貴一さんを取り上げた回で、彼が何を語るのか楽しみにしていた。２歳のときに父の佐田啓二さんを突然の事故で亡くされて、ほとんど記憶のない父親と同じ俳優の道にどうして進んだのかや、出られた作品への思いなどを素顔で話していた。その中に、子どもの頃は父の残したものを、これにはこれくらいと使い分けて生活をしてきたので我慢することが身に付いたと話していた。また、東京生まれの自分にはふるさとがないので、父の建てた家がふるさとだから建て直さずに残しているとか、中井さんの人柄と父親を思う気持ちがひしひしと伝わってきて、本当によい、ほっこりした内容だった。最後には、誰に迎合することもなく、中井貴一らしく役者道を進んでいく、精一杯生きている姿を見せていきたいと話された。ますます好感を持って応援したいと思う気持ちになる、本当にいい番組だった。

○　１０月２日(木)「仮説コレクターＺ」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～9:59)は、男と女にまつわる仮説というテーマだった。人は顔が似ている相手と結婚し、似ていない相手と浮気するという仮説を検証、実験するというのでおもしろい番組だと思って見た。そ

の中で、「婚活は回転ずしに似ている」として、料亭に大きな回転ずしのセットを作っての実験では、全員がはずれるという結果で仮説の証明ならず。この結果を受けて、司会の劇団ひとりさんとゲストの方がフォローしようとするもしらけた雰囲気になった。次の仮説では、５組の夫婦が登場して、奥さんの見ている中でどのアイドルに目線が行くかで浮気心を検証するという実験を行った。何とか２組が仮説証明に成功したが、納得のいくものではなかった。大がかりな最新の装置を使っての実験だったが、本当にこれでいいのかと疑問が残った。専門家の話ももっと納得のいくものにしてほしかった。今後も、いろいろな仮説を証明していくのだと思うが、もう少し的確な検証をして楽しませてほしいと思った。

○　１０月８日（水）ザ・プロファイラー～夢と野望の人生～「信じることをあきらめない～ジャンヌ・ダルク　祖国を救った永遠のヒロイン」を見た。１９年の人生の中でジャンヌ･ダルクが活躍したのはわずか２年。その２年がどんな歳月だったのかを、大河ドラマ主演の岡田准一さんが伝えていた。ジャンヌ・ダルクという名は知っていても、実は９日間の戦いの中でイギリス軍を打ち破っていったなど詳しいことは知らなかったが、彼女を知る入口としては、分かりやすい番組だったと思う。

○　１０月１１日(土)「幻の東京計画～首都にありえた３つの夢～」（ＢＳＰ 後 9:30～10:59)は、1960 年ごろからの日本を取り上げている。建築家の丹下健三さんの夢見た海上の未来都市、幻の東京計画などが紹介されていた。石川栄耀さんに関しては、以前に伊勢湾台風関連「金とく　ルポルタージュ中部」で、結果として、彼の関わった都市計画の影響で台風の被害にあった人たちがいたという印象を受けていたが、この番組で、見方が大きく変わった。すごい人なのだと思った。また、苦しんでもいたのだと思った。彼の都市計画に関する当時の考え方や葛藤が見えてきて、とても考えさせられる内容の番組だった。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年９月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

９月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２６年度後半期の国内放送番組」について説明があり、「平成２７年度の番組改定」の意見交換を行った。続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　森棟　公夫　（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長　　松本　耕作　（加賀味噌食品工業協業組合理事長）
委員　　大島　宇一郎（中日新聞社取締役管理局長）
　　加藤　勇二　（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
　　小寺　功子　（三重県漁協女性部連合会会長理事）
　　佐野　俊和　（コマツサービスエース（株）代表取締役社長）
　　杉浦　宇子　（弁護士）
　　田中　章義　（歌人・作家）
　　中村　智景　（四季料亭「助六」女将）
　　野田　雄一　（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）

（主な発言）

＜「平成２６年度後半期の国内放送番組」および「平成２７年度の番組改定」について＞

○　半年ごとに番組を編成することについて、その時点で半年後の番組が確約されているのか分からないが、できるだけ次回は半年後である旨を知らせ、

また、新しく始まったときに前回のふりかえりを工夫するなどして視聴者の混乱を少なくしてほしい。

○　半年ごとではなく隔週で放送できないだろうか。例えば、今週は「総合診療医　ドクターＧ」、来週はもう一つの番組、というようにできれば、毎回楽しみにしている番組が両方とも途切れないで継続視聴していけるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

ある番組を前期に放送し、翌年の４月から再びその番組を開始すると、その半年間で忘れてしまったり視聴意欲が落ちてしまったりすることも考えられ、非常にもったいないという意見もいただいている。休んでいる半年間に、例えば、その番組の特集番組という形で、要望にお応えすることもある。ただし、必ずしも毎年ローテーションで半年ごとに放送するわけではない。世の中の動きや視聴者の意向に鑑み、開発番組を放送し、定時番組に昇格させていくこともある。一方で、充実した内容の番組を半年間放送するためには、ある程度の準備期間が必要だという事情もある。半年間に、視聴者の皆さんからの意見も聞いて、次の半年に備えるよう努めているとご理解いただけるとありがたい。

○　来年の４月から放送する番組の準備は、今頃から始めるのではないか。放送が決まっているとしたら、半年後に放送を再開するための視聴者へのアプローチはあってもいいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

半年後の番組編成は確定してないので、この点がなかなか難しい。番組の変更や新設などの情報は、スポットの放送やホームペ

ージなどを通してできるだけＰＲしていきたいと考えている。

○　総合テレビの土日夕方から夜間の、家族でテレビを見る時間について、もっと工夫ができるのではないかと思う。たとえば、「ダーウィンが来た！生き物新伝説」は、土曜の夕方にアンコール枠があるが、翌日の日曜日に本放送があるのにその前日夕方に編成しなければならないものなのか。すごくいい番組だとは思うが、この時間帯は民放も魅力的な番組を組んでいる。視聴者の期待に応えるよう、より魅力的な編成ができないか検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

土曜日の夕方は、大相撲が年６場所あり中継している。そのほかにもスポーツイベントなどがあると休止になるケースも多く、なかなか新しい定時番組を投入するのが難しい時間帯である。ファミリーで見ていただきたい時間帯でもあり、家族向けの番組を再放送という形で編成している。ご指摘をふまえ、さまざまな可能性を考えながら編成していきたいと思う。

○　団塊の世代が高齢化を迎える時期にきている中で、今後の方向性として、時代の変わり目を見据えた番組編成をし、視聴者の要望に応えていってほしい。

○　見逃した番組をＮＨＫオンデマンドで探すこともある。ＮＨＫオンデマンドで見られる番組とそうでない番組はどう決めているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

オンデマンドについては、たとえば資料映像などの権利上の問題、出演者の承諾などさまざまな理由でオンデマンドという形では配信できないケースがある。

○　ラジオ第１のニュースの名前が「けさのニュース」に変わったが、昼は「昼のニュース」ではなくて「ニュース・天気予報」のままになっている。どのようにラジオニュースのタイトルをつけているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

朝の７時台は比較的まとまった時間でニュースや天気予報などを伝える。「きょうのニュース」についても同様で、まとまった時間のニュース枠としてタイトルをつけた。

○　大河ドラマ「花燃ゆ」が始まるが、「花燃ゆ」に決まるには、いつ、どういう所でどんな経緯で決まるのか。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマは、準備にかなりの時間がかかる。まず、ドラマ部で何を題材にしようか考え始める。年間５０本程度あるので、それにふさわしいストーリーとなるよう、脚本家も含め、どの時代の誰を主人公にするのか練っていく。仮に、２年後に放送するとしたら、そのころ、日本がどのような社会情勢にあって、視聴者がどんな大河を見たいと思っているのかを考えながら決めていく。

○　「ダウントン・アビー」がまた始まる。ヨーロッパ系のドラマは、これまでの韓国ドラマとは趣向が違うが、反響はどうか。

（ＮＨＫ側）

「ダウントン・アビー」については、ご好評いただいている。イギリス本国では第７シリーズまで放送されている。イギリスの歴史ドラマ史上最高傑作であると言われているとのことだ。ドラマの見方はいろいろあると思うが、これから、お楽しみい

ただけると思う。

○　「あさイチ」は、大変よい内容だと思う。しかし、一番忙しい時間帯で、見たいと思ってもずっとは見られない。番組で取り上げるテーマに興味がある世代は、その時間は、忙しくて、最初から最後まで番組を見ることは難しいのではないか。再放送などがあればありがたいと思う。録画をして見るにも、そもそも２時間という長い時間を確保するのは難しい。４５分とか１時間という短い時間でなら集中して見られるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

８月１１日（月）、夜の１０時に「夜だけど…あさイチ」という番組を放送した。井ノ原快彦さんと有働由美子アナウンサーという同じキャスターでテーマは「家庭内別居」。多くの反響があり、朝の時間帯だとご覧いただけない人や、ぜひ夫に見せたいという人などたくさんのご意見が寄せられた。「あさイチ」は、長尺の番組で、しかも前後にニュースがあり、時間変動するケースも多い。再放送がしにくい番組ではあるが、「夜だけど…あさイチ」のような試みを通して、ご要望にできるだけお応えしたいと思う。

○　地方の疲弊や「食」の安心・安全が叫ばれる昨今、ぜひ、「食」や「農」に焦点を当てた番組に力を入れてほしい。また、Ｅテレについて、子ども向け番組や、語学番組などは多いが、ビジネスマナーや社会人の教養を培う番組が少ない印象を受ける。若い世代に向け、社会人になれば当たり前に知らなければいけないことなどを取り上げた番組があるとよいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

「食」については、日曜日の午前４時半「イッピン」、午前

６時台の「うまいッ！」は、各地の名産などを取り上げて、料理のしかたや食材をめぐるさまざまな話、地域の結び付きや生産者の取り組みなどを紹介している。「サラメシ」ではサラリーマンのごはんという切り口で、それぞれの土地のいろいろな食に対する考え方を表現している。また、「鶴瓶の家族に乾杯」などでも地元に行って食に触れたりし、さまざまな形で取り上げている。「食」については視聴者の関心も高い。東日本大震災後の東北を「食」で盛り上げていくということも考えていきたい。

○　週末夕方について、年６場所の大相撲中継のため通年の編成が難しいという印象を受けたが、逆転の発想をしてはどうか。たとえば、定時に放送できるか検討している新しい取り組みなどをこの枠で入れられないのか。比較的見やすく、おもしろい枠だと思う。前向きな展開も検討してみてはどうか。

（ＮＨＫ側）

土日の夕方の時間帯は、見やすいという一方、相撲だけではなく野球を編成したりするので、流動的な編成になるという面で難しい時間帯でもある。どういったものを編成、制作したらいいか工夫し挑戦していきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　ＮＨＫ富山放送局が放送する夕方６時台の「ニュース富山人」について、番組キャスターと気象予報士とのやり取りがよい。単なる天気情報だけではなく、その裏側にある気象に関する様々な情報や豆知識を、きちんと季節に合った内容で伝えている。事前の準備がよくされており、子どもでも大人でも分かる内容で、実におもしろい。

○　８月４日(月)の静岡流「３０００通の手紙が語るビキニ事件」（総合7:30～7:55　静岡単、９月７日（日）前8:00～8:25　中部ブロック）を見た。第五福竜丸で被爆し入院していた久保山愛吉さんに、当時、全国から3,000通もの手紙が届いた。その手紙から６０年前のビキニ事件を振り返るもので、何年たっても繰り返し語り継がなくてはいけないことがあると、改めて思った。誰も語らなくなってしまったらそのまま風化してしまいそうなところに、スポットを当てていく役割が公共放送にはあるのだと感じた番組だった。

○　９月５日(金)の東海北陸スペシャル「豪雨・台風からどう身を守るか」（総合　後7:30～8:45）について、８月の広島市や高山市の豪雨災害を受けて、より現実的でタイムリーな内容になっていた。過去の苦い経験を経て新たな取り組みで人的な被害を回避した自治体の具体的な例を紹介するとともに、ふだんの点検や準備、住民の対応を的確に伝えていた。双方向システムを活用した視聴者のアンケートは、住民の意識の実情と行政のありようがうまく捉えられていたと思う。視聴者の意見は割合で表示されていたが、参加人数はどれくらいだったのか関心を持った。番組制作の途中段階で、広島や高山の豪雨災害が起きたと思うが、どの時点で、番組に取り込んでいったのか興味が湧いた。

○　９月５日(金)の東海北陸スペシャル「豪雨・台風からどう身を守るか」を見た。防災というテーマは、まさに地域の課題だと思う。全国的にどうだという話より、自分の家がどうなるのかという話のほうが視聴者の関心は高いと思う。新聞も含めメディアでは、ある一定の区域に向かって配ったり放送したりするので、何丁目何番地がどうなるという話はなかなか報道できないが、できる限りきめ細かな情報を地域放送で発信していくことが、防災意識の高揚につながると思う。早期避難につながった事例などは、繰り返し伝えていってほしい。

（ＮＨＫ側）

東海北陸スペシャル「豪雨・台風からどう身を守るか」は、春から準備を始め７月ごろから具体的な取材を始めた。制作していく中で、８月に台風１１号、広島市や高山市の豪雨災害が起きた。番組制作にあたっては、最新の情報、役に立つ情報、行動に結びつく情報をお伝えすることを目指した。番組中のアンケートは、3,029件の参加があった。今後も継続的に、このような番組を発信していきたい。

○　７月２３日(水)のＮＨＫスペシャル「中継　京都　祇園祭　千年の謎」（総合 後7:30～8:43）を見た。長刀鉾（なぎなたほこ）のお手伝いをした経験があったので、宵山の中継の中から聞こえてくる祇園囃子は本当に懐かしかった。祇園祭の山鉾（ほこ）を飾る懸装品が世界の芸術品で飾られていることやベルギーから徳川家に贈られた将軍家の宝のタペストリーが山鉾（ほこ）を飾っていることなどを解明していくところが特に興味深く、祇園祭の奥深さを改めて知って驚いた。千年も続いているということは、山鉾（ほこ）を守り続けた町の人たちの苦労があってのことだと思う。そのような話も番組に織り込まれていたらさらによかった。

○　７月２７日(日)ＮＨＫスペシャル「調査報告　ＳＴＡＰ細胞　不正の深層」は、今まで見たＮＨＫスペシャルの中では最も質が低かったと思う。特に、ただのメールをあたかも男女間の関係があったかとにおわすような声優によるメールの読み上げる演出は、番組で批判的に取り上げていた論文作成手法と全く変わらない見識を疑うものであった。

○　８月３日(日)ＮＨＫスペシャル「知床　ヒグマ運命の旅」を見た。４年にわたり撮影した番組で、美しい大自然の映像、仲睦まじいヒグマの親子の姿とその運命にさまざまな想像を喚起させられる、國村隼さんの落ち着いたナレーションが印象的な番組だった。しかし、家族で楽しみにして視聴したが、

結局、４年間追いかけた２頭のヒグマが駆除、殺処分されるという結末に、家族一同がく然となった。番組の善し悪しに関係なく、子熊の振る舞いが愛らしさに満ち満ちて映し出されていただけに感情的に受け入れ難い展開であり、野生と人間の共存などの啓蒙や示唆にまで気持ちが至らず、沈んだ茶の間となってしまった。こういった番組の演出では、心の整理のつけやすさということも考慮して作ってほしい。

○　８月１３日(水)ＮＨＫスペシャル「狂気の戦場　ペリリュー　～“忘れられた島”の記録～」は、すさまじい映像で、極限の環境下に置かれた人間が放つ狂気に満ちた殺意や絶望が直接伝わってくる番組だった。当事者にしか写しえない視点での鮮明なカラー映像と、それらが映し出している目を覆う惨状に加えて、現場にいた兵士たちの尋常ならざる証言は、いまだかつてないほど戦争の愚かしさと恐怖を強烈に伝えるものであった。人間が犯す過ちの深淵を改めて思い知らされる、質の高いドキュメンタリーだったと思う。

○　８月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「神秘の球体　マリモ　～北海道　阿寒湖の奇跡～」は、長期間の取材によるさすがと思わせる内容だった。マリモは丸い集合型のほかに、着生型とか浮遊型といったものがあり、丸いマリモは世界中で阿寒湖だけだということを初めて知った。自然が環境の微妙な変化を教えてくれ、人間への警告をしているのだと感じた。自然環境が変わってしまうと阿寒湖のマリモも死んでしまうかもしれない。そうなった場合、復活させる方法はあるのかというところまでテーマが広がるとおもしろいと思った。

○　８月３０日(土)（総合　後7:30～8:45）、８月３１日(日)のＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ　地球大変動の衝撃　第１集「異常気象“暴走”する大気と海の大循環」、第２集「スーパー台風“海の異変”の最悪シナリオ」を見た。異常気象に関して、深海の海水温度の変化、海流や大気の流れなどから、観測技術の進化によりそのメカニズムの謎が明らかになっていき驚いた。ＣＧなどをうまく使って理解しやすいように構成

されており、視聴者の興味を引いたのではないかと思う。現実におきた過去の災害と想定される災害をグラフィックで表現し、きちんと災害の恐ろしさを伝えるものになっていた。ただ、何気ない画像であっても大災害の被災者にとってはフラッシュバックする可能性があるのではないか気になった。

○　９月７日(日)のＮＨＫスペシャル「新宿“人情”保健室　～老いの日々によりそって～」は、３年前に新宿の団地の一角に作られた「暮らしの保健室」の日々の記録を、女優の風吹ジュンさんの温かい声で紹介していた。不安や心配事を抱えたお年寄りの話を優しく聞いて、寄り添い、温かく見守る。どうしてあれだけ一生懸命になれるのか、行動力と人柄に感動した。番組を見て、お年寄りにどのように寄り添っていけばいいのか少しだけ分かったような気がした。人情の表れたよい番組だった。

○　９月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「臨死体験　立花隆　思索ドキュメント　死ぬとき心はどうなるのか」は、大変おもしろかった。立花隆さんは、もともと臨死体験について書籍を書いていた。今回は、当時解明できなかったことを最先端の脳科学で解明しようと世界中の研究者を訪ねていくもので、大変見やすい流れだった。生後１か月の頃の臨死体験を２歳になって語ったという男の子が紹介されたが、生後1か月のときに体外離脱して自分が見たものを視覚的に認識して記憶する能力があったのかどうかは、まだ解明できてないのではないかと思った。脳科学者などそれまで臨死体験を非科学的なものとして否定していた人でも、自分が体験すると本当に死後の世界はあると確信してしまうという。そういうことが死ぬ間際に待っているのだと思うとすごく興味を引かれた。

○　９月４日(木)のクローズアップ現代「道は険しい？“減塩社会”への挑戦」を見た。減塩を言うあまり、例えば味噌は体によくないなどの誤解も聞かれることがあり、興味深く視聴した。食塩の過剰摂取は、加工食品からの摂取に起因しているところが大きいとして、日本の例とイギリスの例を用いてメーカーの取り組みを紹介していた。本来は家庭での調理で塩分コントロールは可能である。メーカーだけに対応を求めていくのはいかがなものかという

印象を持った。最も重要なことは、便利だという理由で加工食品を利用している消費者への理解促進だと思う。国が目標とする成人男子一人当たりの塩分摂取量は８グラムだが、カップラーメン１杯で、７．９グラムになる。このような商品が店頭に並んでいることも事実である。一方、過度な塩分削減で食中毒を起こした例もある。食品保存のために塩に変わり保存料を添加していくことはかえってよくないことなので、表現のしかたを工夫し、もう一歩踏み込んでほしかった。

○　９月４日(木)のクローズアップ現代「道は険しい？“減塩社会”への挑戦」は、関心を持って見た視聴者がかなりいたと思う。まず、加工食品の問題を指摘し、政府主導で加工食品の塩分量を削減したイギリスの実例を挙げたことは、日本でも何かできる可能性を示し非常に有意義だったと思う。イギリスのレポートに、少しずつ塩分を減らしたら気がつかなかったとあったが、本当にそうなのか少し気になった。減塩商品にすると値段が高くなるという。消費者の立場からすれば、味が変わらないなら安いほうを買う。食品の塩分量を明示したり、塩分を控えめにと言うだけで果たして国全体の減塩が図られるのか、もっと何かやることがあるのではないかと感じた。イギリスでは、医療費が年間2,600億円削減できたという報告をしていた。医療費が財政を圧迫している日本において、国のすべきことをきちんと指摘し、出演している識者とのやりとりも、もっと具体的に踏み込んだ展開になると視聴者により分かりやすく伝わるのではないかと思った。

○　９月８日(月)のクローズアップ現代「学びを変える？ ～デジタル授業革命～」を見た。ついこの間まで子どもたちを学校に通わせていた世代なので、教育問題は気になって見ている。ＩＣＴ教育というデジタル機器を使用した教育の概要が非常によく分かる内容だった。国内の教育現場から海外の事例までバランスよく、現状を理解する上では非常に充実した内容だったと思う。先進事例として紹介された韓国の例では、教師の団体がタブレットを利用した授業の問題点を指摘していた。国内の事例として、佐賀県の学校では、タブレット端末を利用した授業の利便性も紹介しつつ、先生の苦労や生徒の苦心する姿も紹介していた。一方、東京の学校の例では、その成果の例を紹介しており、両校のギャップの大きさが印象に残った。東京の学校で登場した

生徒は非常に優秀だとは思うが、同じように全国展開しようということには、疑問も感じる。それぞれの学校のコンピューター教育の事情などを含め、例としては極端すぎるのではないかという印象を受けた。「情報」という科目に対して、教える側の態勢不足が指摘されている。これからわれわれはこの問題にどのように取り組んでいったらいいのかイメージしにくい。教育問題は非常に裾野が広い。もっとポイントを絞ってもよかったのではないかと思う。ゲストの尾木直樹さんとの話も、授業の運営そのものまで踏み込んでいくと話が広がりすぎてしまうので、なるべく絞ったほうが分かりやすかったのではないかと感じた。

○　９月９日(火)のクローズアップ現代「土砂災害　命を守る避難」を見た。８月の広島の土砂災害では、発生する前に住民が、いつもと違う川の水かさの異常や木の根の腐った臭いがするという前兆に気づいたという。自分たちのコミュニティーの中で連携し、避難勧告が出されるのが遅れたものの、お互いに連絡を取り合い自主的な避難につながった。今の時代に失われつつある地域のコミュニケーションがとても大切なのだと改めて思った。われわれの親世代までは、この地域はこういう災害があるからこういうことが起きたらこうするというようなことが受け継がれていたが、今は、核家族が多くそういうことが家庭で話されない時代。だからこそ、経験者の話をテレビなどで伝えていくことが大事なのではないかと思った。

○ ８月２８日(木)、９月４日(木)の超絶　凄（すご）ワザ！「夢のロープを目指せ」（前編）（後編）について、強さとしなやかさを兼ね備えた夢のロープ対決は興味深かった。難問に挑戦する両者の努力と職人魂、取り組む姿を見て、勝負しなくてもいいのではないかと思うくらい、一生懸命さが伝わってきた。最後の対決はワイヤーロープの勝利に終わったが、あのように細く強い繊維ロープがあれば、軽く、置く場所も取らないので、仕事にも役立つ。夢のロープに終わらないで、実用化されるとよいと思った。

○　超絶 凄（すご）ワザ！「夢のロープを目指せ」は、３ミリの繊維のロープと鋼のロープの強さを競うというものだった。繊維のロープがこれほど強くできるのかということ、また、両チームがどれだけの努力をしてきたかというところに非常に感心した。とてもおもしろい番組。今後も頑張って新作を制作していってほしい。

○ ８月１３日(水)の「国民アンケートクイズ　リアル日本人！」（総合　前0:10～1:00）は、平日深夜にアンケートを取るというタイミングの無神経さもさることながら、アンケート項目に現在の日本人の価値観やライフスタイルを映し出すような設問も、設問間の関係性もなく、ただ双方向番組の挑戦をしたというような番組だった。また、こういったアンケート番組で回答数を明示せずにパーセント表記しか表示しないのは、大変不誠実だと思う。

○　８月２１日(木)の「所さん！事件ですよ」（総合　後10:05～10:53）を見た。内容、ゲスト、ナレーターともすべて民放で見たことのある寄せ集めで、ＮＨＫらしさもオリジナリティーも全く見られなかった。海外取材には制作費もかかるので内容を吟味し番組制作をしていってほしい。

○　ＮＨＫニュース「おはよう日本」を見ている。「まちかど情報室」は、新しい商品を紹介したり生活の中のちょっとした工夫を紹介したりするコーナーで、担当する鹿島綾乃アナウンサーとほかのアナウンサーとの掛け合いがユニークで楽しく、ほんわかとした気持ちになる。ただ、次に深刻なニュースに変わるとき、表情の一瞬の変わり方がつらい印象なので、適切な間合いがあるといいのではないかと感じた。また、ニュースは各時間、同じ内容、同じ原稿のことが多いが、情報の収集によって、原稿を多少変えられる内容もあるのではないかという気がする。毎回見る人ばかりではないと思うが、事実が同じであれば映像を変えたりできないものかと感じる。

○「花子とアン」を見ている。花子のラジオの放送現場の場面がおもしろかっ

た。時代は戦争へと突入していき、放送局に軍隊の人たちも入り込んでくる。悠長な番組はやっていられないと花子に嫌みを言う人がいたが、この場面では、報道が権力に支配される恐ろしさや危険性をドラマの中で再確認した思いがした。

○　連続テレビ小説「花子とアン」を初回から見ている。登場人物それぞれの着物の着方、家族の食卓での座り方などから、時代背景がきちんとドラマの中に汲まれていることがわかる。出征する人を“万歳”で送る場面では、普通の万歳ではなく、腕を縦にして万歳をしていた。細部まで考えられており、さすがだと感心して見ている。次に放送される「あさイチ」に移ると、有働アナウンサーと井ノ原さんが連続ドラマを受けてコメントをする。このつながりが、朝にふさわしく、とても温かくてよい。ＮＨＫでは、あまりキャスターが自分の感情を言わないと思っていたので、有働さんなどがコメントするところは新鮮に感じる。

○　「あさイチ」を見ている。有働アナウンサーと井ノ原さんに、もう１人男性キャスターが加わることがあるが、「あさイチ」はちょっと砕けた感じで、有働さんと井ノ原さんが進行していくところがおもしろい。３人の掛け合いがよいのかどうか気になっている。

○ 土曜ドラマ「芙蓉の人～富士山頂の妻～」を見た。明治の時代に富士山の気象観測を行った野中夫妻の苦労の物語を扱ったのは、富士山が世界遺産に登録されたこともあり、よいタイミングだと思った。出演者はそれぞれ力の入った演技で、感情移入しながら見ていた。ただ、幼い娘を置いて母親が命がけで富士山頂へ行く場面は、現代の子育て世代の視聴者はどう見るのか気になった。ドラマの世界とはいえ、この場面について、本当にいい選択だったのか考えさせられた。新田次郎原作の作品を今取り上げたというところはよかった。

○　ドラマ１０「ハードナッツ！～数学ｇｉｒｌの恋する事件簿～」は、ＢＳプレミアムで放送したときも見たが、総合テレビで放送した今回も見た。話の設定がすごくおもしろい。数学を勉強している女の子が事件を解決していく話で、個性あるドラマになっており、とてもおもしろかった。主役の橋本愛さん演じる“くるみ”のキャラクターが際立っている。ぜひ続きを見てみたい。

○　木曜時代劇「吉原裏同心」を楽しく見た。毎回完結の話だが、夜に見る番組として、正義が勝つのを初めから予想して安心して見られるのはよいと思う。神守幹次郎という侍が、いつも峰打ちなのも、気遣いがありがたい。近藤正臣をはじめ、配役がよい。また、女性の衣裳だけでなく、男性の着物もよく考えている。このドラマに登場する遊女たちは明るくて、娯楽番組として、その点も安心して見られるのでよい。

○「みんなのうた」について、「アスナロウの木」という歌がとても印象深い。気仙沼市の大島小学校の５・６年生が歌い、地域の人々が登場する。東日本大震災の影響を重ねて見て感情移入する。有名アーティストではなく地元の人が歌うこの曲は、地域で歌い大切にしていこうというメッセージが感じられる。この曲から絵本や地域ドラマなどの展開があったらと思えるほどのすてきな曲に出会えてよかった。「みんなのうた」が始まって５０年になるとのこと。歌の力を伝えていってほしい。

○　「ＢＳ日本のうた」や「ＮＨＫ歌謡コンサート」、「みんなのうた」など歌番組について。昔は、親世代がよくテレビの歌番組を見ていて、何が楽しいのだろうと思っていたこともあったが、今は歌番組が減ってしまった。今の若い人たちにはなじみのないであろうフォークソング、聴く機会が少なくなってしまった唱歌や童謡など、伝えていきたいと思ってもなかなか共通の認識に立ちにくく難しい。それぞれの時代背景を映す歌を、ぜひ歌番組を通じて、取り上げてほしいと思う。

○　８月１０日(日)の青山ワンセグ開発　夏の復活祭「Ｅのはコレだ Ｚ」（Ｅテレ　前0:00～1:00）について、みうらじゅんによるアニメ「ドチャック」は、明らかに男性器をモチーフにした絵面で見ていて嫌悪感を覚えた。深夜番組とはいえ、一定の倫理基準は設けて、こういったものは映すべきではないのではないかと思った。

○　８月１９日(火)、２６日(火)の知恵泉（ちえいず）先人たちの底力「傾いた組織を立て直せ！上杉鷹山」を見た。鷹山は「成せば成る。成さねば成らぬ何事も。成らぬは人の成さぬなりけり」という言葉を残し米沢藩の財政を立て直した人物である。現代の組織においても通じるいろいろな教訓も残した。昨今、さまざまな場面で、リスク管理が重要なテーマになっているが、危機感を共有するためにもマイナス情報を共有し、改善にむけて呼びかけ組織全体の不安を取り除くことが重要だという点は、よい勉強になった。当時すでに、鷹山は、いわゆるサバイバル・マニュアルを飢きんに備えて作っていたそうだ。鷹山が教えを受けた細井平洲という人物は、尾張出身の儒学者だそうで、身近にすばらしい人がいたのだと知り大変興味が湧いた。いずれ、機会があったら番組で取り上げるとおもしろいのではないかと思った。

○　９月９日(火)～１１日(木)のハートネットＴＶ「２０代の自殺」の３回シリーズを見た。仕事柄、虐待やいじめ問題に関わることも多く、生きづらさを感じて「死にたい」と言っている子に接することも多い。その子たちには、番組を見て、同じような体験をして苦しみながらも一生懸命生きている仲間がいることを知ってほしい。そのためにも繰り返し取り上げていただき、このような番組に接する機会が増えるとありがたい。

○　９月１３日(土)ＥＴＶ特集「それでも道はできる～福島・南相馬　コメ農家の挑戦～」は、終始、映像やコメントの選択が感傷的で、タイトルから期待したイメージとは程遠い無力感と、原子力発電所事故に対する感情的な拒

否感が残った。制作者の意図がどこにあったかは分からないが、徒労感に満ちたシーンの展開と先行きのなさからは、一見いかなる苦難にも挑み続けるコメ農家を応援するかのような体裁を取りながらも、実際は反原子力発電所を訴求しているかのようにしか思えなかった。特に、番組からは心底コメ農家を応援しているということが全く伝わってこなかったこともあって、見ていて心が大変痛んだ。

○　１００分ｄｅ名著「アンネの日記」は、ものすごくよい番組だった。「アンネの日記」は昔に読んだきりだったが、少女の生き生きとした描写や明るく生きていこうという気持ちが描かれているということを改めて知った。またちゃんと読んでみたいと思わせてくれた。

○　７月３１日(木)の英雄たちの選択スペシャル「両雄対決！石田三成ｖｓ徳川家康～“選択の攻防”が生んだ関ヶ原～」（ＢＳプレミアム　後7:30～8:59）を見た。軍事的には石田三成が圧倒的な準備をしていたのに、徳川家康が勝ったのはなぜかということを、心理学や精神科医、政治学者、いろいろな人が意見を述べ解説していた。もし、三成が勝っていたら鎖国などはなかったはずだ、今の日本にも大きく影響したのではないかという話は、非常におもしろいと思った。三成については、ほかの武将からの信頼が薄いイメージだったが、この番組では、非常に優秀な官僚的な人間だったという面が強調されていた。これまでの人物像となぜ違うのか説明がほしかった。

○　なかなかラジオを聞く機会がないが、ここはふるさと旅するラジオ「石川県」を聴いた。地元ゆえに、会場の様子が頭の中に思い浮かび、非常に楽しかった。一方で、ほかの地域の人は、どんなふうに聴いているのか気になった。

平成２６年７月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

７月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、金とく　シリーズ　現場再訪　ルポルタージュ中部「伊勢湾台風“戦後”をおそった災害の記憶」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	森棟　公夫	（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長	金森　昭夫	（中日新聞社取締役総務担当）
委員	秋元　祥治	（特定非営利活動法人　Ｇ－ｎｅｔ代表理事）
	小寺　功子	（三重県漁協女性部連合会会長理事）
	佐野　俊和	（コマツサービスエース（株）代表取締役社長）
	杉浦　宇子	（弁護士）
	立花　貞司	（トヨタホーム（株）取締役会長）
	田中　章義	（歌人・作家）
	野田　雄一	（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）
	松本　耕作	（加賀味噌食品工業協業組合理事長）

（主な発言）

＜金とく　シリーズ　現場再訪　ルポルタージュ中部「伊勢湾台風“戦後”をおそった災害の記憶」（６月２０日（金）総合　後8:00～8:43　中部ブロック）について＞

○　見る前は、災害報道のような生々しい映像が中心の番組かと思っていた。実際には当時を振り返るインタビューを中心に構成されていた。見進めていくと、映像や写真以上に、５０年以上たった今語るインタビューに現実味があり、赤ちゃんの遺体をごみの中に見つけたという話など胸に迫るものがあった。若い世代は、伊勢湾台風が実際のところどうだったのかはあまり知らない。定期的にこうしたことを番組で取り上げ、振り返っていくことは大変有意義であると思った。被災した小学校に残された文集から体験者の思いを受け継いでいこうという取り組みについて、例えば、「金とく」

のホームページに一部でも公開できるとよいのではないかと思った。この番組を見て何を学びこれからどう生かしたらいいのか具体的な提案ができるとよかったのではないかと思う。

○　これまで、伊勢湾台風は“天災”という側面でしか捉えていなかったが、この番組では、“人災”という側面を深く追求していたことが、非常に印象的だった。当時の関係者をよく探り当てて事実を解明、分析したと驚くばかりである。海抜ゼロメートル地帯の危険性、貯木場の木材の多さの危険性は、伊勢湾台風が来る以前から言われていたにもかかわらず行政が何も対応しなかったということには考えさせられた。結果を見て初めて事前の警鐘の重大さが分かる。この事実を後世まで伝え、今後起こりうる様々な天災について、人災をなるべく小さくしていくことの大切さを、ぜひこういった番組を通じて伝えてほしいと感じた。

○　番組冒頭は伊勢湾台風の被害の記録というイメージが強く、以前に見た映像もあったので、記憶の検証だけなのかと思った。しかし、見進めていくと、当時の防災の課題を現在の視点から検証・回顧し、タイトルどおりルポルタージュとして見応えのある内容になっていた。ただ、当時の一般常識や環境を考えると、いきなり検証に結び付けるのは少し無理があるのではないかという気がした。その当時、どのような報道がなされていたのかについても伝えるとよかった。また、事実が解明されていく経過をもう少し分かりやすく時系列で表現してもよかったのではないかと思う。災害時と現代という２つの焦点の当て方には、もう少し工夫がほしかった。例えば、技術が発達している現在では状況は改善されていることも伝えないと、不安を与えてしまうのではないかという疑問を持った。被災体験を語り継ぐ取り組みがあり、伊勢湾台風によって災害対策基本法が制定されたという事実がある。後につながる教訓として生かされていくよう繰り返し伝えていくことの重要性にテレビ放送の役割があるのではないかと思った。

○　伊勢湾台風に関する映像はこれまで何度か見たが、厳しい状況の中、当時の重い機材を持ってよく撮影したと思うとともに、映像が伝える力を強く感じた。これまでに見たことのある映像も多く、おそらくまだほかにもあると思うので、別の映像も見たかった。インタビューの中で、空襲で家を失い、新しく移った土地でまた家を失ったことを淡々と語られていたことに切ない思いがした。日本経済の柱のひとつだった木材を扱い、東洋一の貯木場になっていたところに台風が襲い、大量の流木が被害を大きくした背景がある。その当時どのように報道されて取り上げられたのか知りたかった。経済主導になった結果、天災に人災が重なるという、想定外のことが起こった。

今後も起こりうる可能性があるので、未来に向けて考えるきっかけになればと思う。戦後の都市計画を立てた技監の話がよく残っていたと思う。当時も報道されたのか、それとも今回、明らかになったのか気になった。また、伊勢湾台風以前に水害地形分類図が作成され、県に送られたにもかかわらず対応がなかったことは、現在の問題にも通じるところがあるという気がした。最後に、被害の大きかった白水小学校に残された絵を見たときに、何ともいえない痛々しさが伝わってきた。現代文明のあり方、今後の日本経済のあり方も含め、どうしたらいいのかを考えさせてくれる番組だった。

（ＮＨＫ側）

白水小学校に保管されていた文集について、現在、名古屋市で文集の公開を含めて、この災害の記憶を後々まで大切にしていこうという動きがあると聞いている。番組の取材を進めていく過程で、ホームページなどで一部でも公開できるよう市の動きと合わせることができればよかった。今回のルポルタージュシリーズにとっては、当時出来事に関わり体験した方のことばや記憶が番組の根幹だと思っている。当時市に勤めていた方にはほとんど当たったのではないかというくらい調べて、ようやく２人の人に出てもらうことができた。年月がたつと当時のことを語ってくれる人も多くはないが、これからも取材を重ねて、貴重な証言を得ていけたらと思っている。当時の報道については、天災であると同時に人災の側面もあったのではないかということは、台風直後から言われていた。貯木場の木材についても、ゼロメートル地帯に新しく住宅を建てたことについても、台風が通り抜けた直後から、新聞、あるいはテレビでも指摘はされていた。当時の報道と現状を比較し、再検討をすることは今後必要だと思う。台風が過ぎ去ったあとの映像や、来る前の波が高まってくるような映像はあっても、まさにその日、その夜の映像は少ないが、眠っている可能性もあると思うので、民間の方がフィルムで撮ったものが発掘できないかこれから意識していきたい。愛知県に送られた当時のいわゆるハザードマップについて、なぜ、県として検討しなかったのか、採用しなかったのかを調べたが、結果として誰が受け取って、どういう検討がされたかは、私たちの取材からは浮かび上がってこなかった。

○　海に囲まれた島に暮らす私にとって、台風は本当に来てほしくないものである。大きな台風が来るたびに「伊勢湾台風のときはこんなものではなかった」とお年寄りから話は聞いていたが、この番組を見て、伊勢湾台風がどれだけ大きな被害をもたらしたのか、どうして名古屋の南部が大きな被害を受けたのかを、詳しく知ることができた。ただ、伊勢湾台風の被害状況を一番に伝えたかったのか、それとも戦後の都市計画づくりの失敗を伝えたかったのか、何に重きを置いて伝えたかったのかがよく分からなかった。被害の８割は愛知県と三重県だったとのことで、「記憶」と題し５５年前の伊勢湾台風を忘れないために作られたのであれば、三重県を含め他の地域のことにも触れてほしかった。また、貯木場に入らないほどの木材を黙認していたり、水害地形分類図を送ったのに住民に知らせていなかったという事実に、その後どのように対処され、対策が取られたかも教えてほしかった。番組の最後の白水小学校の子どもたちの絵は本当に衝撃的だった。暗く悲しい絵に伊勢湾台風の全部を見た思いがした。

○　東日本大震災を経験した今、そこで得た教訓を踏まえて、当時の技術や知見では解析しきれなかった原因や要因を洗い出し、科学的な視点からの検証があってもよかった。今や想定外ではなくなった南海トラフ地震に備えた防災意識や当事者意識の醸成など、この５５年という節目を生かすべきと思ったが、今回の番組においては次につなげようという視点が欠けていたように思った。被災者のインタビューや関係者の証言から、視聴者は何を得て学ぶべきなのかがあまり見えてこなかった。大きな高潮が襲いかかって材木が流出し被害が拡大したことを取り上げていたが、経済的な利益を優先させてきた業界や問題を解決できなかった行政の姿を伊勢湾台風の現実としたのは、簡単に整理しすぎたのではないかと思った。「命を大切にする社会を私たちは築いているのか。台風の記憶が語りかけています」という最後のまとめも残念な印象だった。編集計画に「国民の命と財産を守る、正確で迅速な報道」と、防災・減災につながる報道をかかげている以上、単なる過去の振り返りにとどまらず、今も残る課題の明示や防災に備えた住民連携の現状、課題などを加えて紹介するという姿勢があってもよかったのではないかと思う。

○　５５年前の出来事にもかかわらず、行政の戦後復興計画や貯木場のエピソードなど、失敗から学べることが本当にたくさんあった。失敗を描くことを恐れずに、正面から捉え表現し続けていってほしい。東海地震などは、以前からいつ起きてもおかしくないと言われておりそういう心づもりでいるが、その緊張感を忘れてはいけないと思う。継続的に発信していってほしい。また、伊勢湾台風だけなく、各県それぞれの災害の記憶があると思う。「こんな災害が過去あったのだ」ということを地域の視聴者に発信していくことで、この番組が制作された意義がより出てくると思う。

○　過去の事実を振り返って、未来の手がかりにするという思いが表　現されていた。伊勢湾台風については、内陸でも校庭のサクラの木が全部なぎ倒されるほどのすさまじさだったというような話を聞いたことはあるが、この地域に住んでいても、ときどき断片的に事実を知る機会がある程度である。４３分という短い時間だったが、５メートルを超える高潮をもたらした自然の猛威や死者・行方不明者が 5,000 人を超える被害の悲惨な状況、被災者の悲しみの深さだけではなく、台風が大きな災害になってしまった要因まで考えを深めることができた。取材した事実を淡々と客観的に伝える姿勢を保ちながら考えさせる、知性を感じさせる番組になっていた。当時の写真や映像それ自体は、東日本大震災があり見慣れているのか、あまり驚くことはなかったが、現場の記録としてとても大切だと感じた。映像もさることながら、被災者が５５年前の経験を淡々と語る、その内容や様子から、甚大な被害に見舞われ、一瞬で大切な人やそれまでの生活を奪われた喪失感や悲しみがひしひしと感じられた。戦後復興計画に携わった行政の人たちのインタビューで、ゼロメートル地帯に進められた防災計画不十分なままのまちづくりが指摘されていた。計画を進めていた人の悔悟のことばに対して、実際に被害を受け深い喪失を体験した人のことばはさらに重く感じられた。伊勢湾台風が来る以前にハザードマップが作成されており、危険性が警告されていたにもかかわらず、行政の対応がなかった話などは、福島原発事故の問題をほうふつとさせた。過去の過ちを徹底的に反省、検証し、同じ過ちを繰り返さないことが大切である。この番組は、未来の手がかりになるものだと感じた。大変よかったと思う。

○　当時私は愛知県に住んでいた。あの晩のことは今でも忘れない。強い風で壁が落ちるのを防ぐために一晩中押さえていたこと、翌朝、真っ青な空の下、家の周りの道が落ちてきた瓦で舗装されたようになっていたこと、５５年も前のことだが、生々しく覚えている。おそらく、年配の方にとって伊勢湾台風というのは大変な原体験になっているのではないか思う。伊勢湾台風から５０年のときにこの地域の新聞各紙や放送局が、回顧的な特集をいくつも組んだ。それから５年、映像も新たなものはあまりないだろうし、今度やるにしてもまた回顧ものだろうという程度にしか思っていなかった。結果的には大変よい方向で予想を裏切られた。人災の側面もあったということは、当時から指摘されていた。貯木場の問題や、被災した低い土地とそこ住む人たちの事情についての記事もあった。しかし、人災の側面があったという問題意識そのものがすでに風化してしまっていて、伊勢湾台風から５０年のときはあまりその問題は出てこなかった。今回非常によかったのは、その点に的に絞ったことだ。戦後復興計画で市営住宅を低い土地に作った。番組の中で、当時の技監が、それを失敗だったとする話があったが、今回、改めてそれを思い出させ、呼び起こした点がよかった。また、

貯木場の問題について、台風以前に、関係者が「木材がふくそうしていて寒心に堪えない」と書いていたという事実を初めて知った。よい取材をしてきたと感心した。主にこの２つの人災の側面から、こうした事実を忘れずにいこうという姿勢を示していた点がよかった。ただ、今後にどうつなげるかというところは少し弱かったという感じがした。現在、名古屋港周辺を守ってきた高潮防潮堤が、老朽化と周辺の地盤沈下で実際に機能するのかが問題になっている。白水学区は今、改善されたのかどうか現状を知りたかった。タイトルの「“戦後”をおそった災害」とは、どういう意味なのかと疑問に思ったが、番組を見てよく分かった。音楽も画面や内容によく合った、荘重な感じで全体を引き締めていた。全体を通して、大変よい番組だったと思う。

○　「“戦後”をおそった」というのは非常にいいタイトルだと思う。“名古屋をおそった”ではなく、“戦後をおそった”状況をまとめている。戦国時代に海だった場所が江戸時代に農地になり、人が住むようになってきた。もともとゼロメートルの宿命があったのだが、それにまた空襲によって名古屋市の中央辺りが焼けたために、中心部にいた人たちが白水学区に来たという当時の事情がよく出ていた。そこに戦後経済の復興が重なった、まさに“戦後”を襲った災害だというのが特色だと思う。バランスのよい内容で、ナレーターが語るだけではなく、当事者へのインタビューによって客観性を感じることができた。白水小学校で１４２人が亡くなり、その記録を残したいという気持ちもよく分かった。当時のゼロメートルは今でもゼロメートル。もし今、防潮堤が壊れれば、どれだけの被害がでるのか。南海トラフ地震などが懸念される現在、その点にももう少し重ねて警告を発してほしかった。

（ＮＨＫ側）

白水学区を取り上げた理由は、一番犠牲者が多く、調べていくといろいろな要素がそこに凝縮されている地域だと分かり、この地区を通じて全体を表現したいという考えからだった。そこを軸にしながら、ほかの所、同じく被害の大きかった三重県などのことも言い添えてもよかったかもしれない。科学的視点が欠けていたのではないか、あるいは、住民の連携などをもっと描くべきではなかったのかということ、視聴者が何を学べばよかったのかよく分からなかったということについては、深く受け止めたい。この番組では伊勢湾台風そのものを取り上げたが、台風や豪雨について、現状と今後どのように向き合ってい

けばよいのかという内容の７３分の特集番組を９月５日に予定している。科学的な最新の知見、私たち一人一人がどういうふうな対策を取っていけばいいのか、住民同士がどんなふうに助け合い、命を守っていくのかということについて、十分に取材して放送できたらと思っている。各局も災害の記憶を伝えていったらどうかという点については、それぞれ多くの映像や取材の蓄積があるので、今一度地域のことを振り返るといったことを、ぜひ呼びかけていきたい。戦後の復興計画が伊勢湾台風の被害を拡大させた一要素であったことは、私たちが番組で伝えなくてはならないと思ったことのひとつだったので、そこを評価していただけたのは大変ありがたい。４３分という短い番組なので、制作の過程で残念ながらいろいろなシーンを落としていかざるをえなかった。番組制作をするうえで、伊勢湾台風から５０年のときの新聞の記録などを参考した。それからたった５年しかたっていないが、さらに何かプラスできることはないものかを意識した。今後どうすればいいのかという点が弱かったという指摘について、具体的な防災の手がかりではないかもしれないが、番組全体を災害の記憶として受け止めてもらえればと思っていたが、もう少し具体的な提言をする意識を持つことも必要だったとも思う。白水学区については、堤防ができて、これまでの５５年間は大きな災害がなかったということを伝える一方、たとえば伊勢湾台風を超える規模の台風が来たときにはこのままでいいのかという問いかけも同時にしなくてはならなかったと考えている。次回の特集番組でもじっくりと取り組みたいと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　岐阜局制作の午後６時台「ほっとイブニング　ぎふ」は、岐阜県出身の浅野正紀アナウンサーが、番組中に岐阜弁を多用しているのがよい。ホームページのアナウンサー紹介でも岐阜弁が使用されており、愛着が湧いて非常によいと思った。ＦＣ岐阜の特集は大変興味深い内容で、これまで取り上げたものをまとめ、「金とく」あるいは「ナビゲーション」などに展開するとよいのではないかと思った。午後６時台に帰宅しテレビを見ることはなかなかできないので、内容によっては、ホームページで動画を見

られるとありがたいと思う。

○　６月２７日（金）金とく　シリーズ　現場再訪　ルポルタージュ中部「四日市公害　高度経済成長と灰色の空」を見た。1967 年に９人の患者が四日市コンビナートの企業６社を相手取って訴訟を起こし勝訴したが、排煙規制を問うものではなく、四日市の大気汚染は、その後、県が自発的に厳しい基準を設けて改善されてきた。その結果、四日市に青空が取り戻されたという内容だった。「訴訟に勝って損害賠償請求が認められたものの、青空は戻ってこない」と当時の原告の一人が語っていたが、その意味が視聴者に伝わったのか気になった。差し止め請求の推移や法律上の仕組み、限界といったところも言及していると、番組としては非常に分かりやすくなったのではないかと感じた。

○　６月２７日（金）金とくシリーズ　現場再訪 ルポルタージュ中部「四日市公害　高度経済成長と灰色の空」は、四日市市に誘致されて発達した巨大なコンビナートの経済活動がもたらした四日市公害を、過去の映像で当時の状況を確認しながら、進行していた。四日市公害裁判の原告９名のうち、唯一ご存命の方のインタビューや、ぜんそくで小学４年生の子どもを亡くされた方のインタビューなどから、公害被害のひどさ、理不尽さを浮き彫りにする内容となっていた。昔から受け継がれてきた自然の恵みを受けた生活が、大企業のわずかな期間の生産活動だけで回復不可能なほど破壊されてしまうことがよく分かり恐ろしさを感じた。環境や健康はいとも簡単に奪われるけれど、取り戻すには途方もない努力が必要で、努力しても失った命や健康は戻らない。その無念さを無駄にしない道は、未来に向けて同じことが起きないように努力することだと強く感じさせる内容になっていた。「シリーズ　ルポルタージュ中部」第１回で取り上げた“伊勢湾台風”と違うのは、“四日市公害”は司法に訴えて、司法によって企業活動が共同不法行為であることが確認され、その部分で勝訴判決を得たことだと思う。そして、それが企業の態度や行政の対応にも大きく影響を及ぼし、よい方向に動かしていったというところを見て、司法が現状におもねるのではなく、あるべき理想の正しい方向を示すことの重要性を再確認した気がした。当時の公害をなくす市民の会のメンバーが、公害に苦しむ人たちの大きな支えになっていたり、いろいろな資料を作って裁判自体を支えていたという事実に、市民の活動の思いの強さやその重要性も分かった。被害を受けている人々の家に入って話を聞く。理由もなく苦しみを味わわされてきた人の声に真摯に耳を傾けて受け止める。そして行動につなげる。その姿勢に感動した。企業側も、被害者の所に何度も行って話を聞き、なるべく公害の少ないガスを出す努力をしていったそうだが、市民も企業も倫理の上で活動するということの大事さを感じた番組だった。

○　６月２７日（金）金とくシリーズ　現場再訪 ルポルタージュ中部「四日市公害　高度経済成長と灰色の空」を見た。非常によかった。立場の違う人が争いの相手なので、どういうふうに番組をまとめるか難しかったと思う。５０年がたち、関係者は冷静に話すことができたのだろう。番組のナレーターがまとめる形ではなく、当事者のインタビューが軸になっていた点がよかった。最近は公害の影響は少なくなってきているということも分かった。見応えのある内容だった。

○　７月１１日（金）金とく「熊野古道　伊勢路をゆく～体感！祈りと癒やしの道～」は、非常に楽しめる番組だった。伊勢神宮のように天皇制を支える神社から、山の上の岩が神様という自然信仰の神社まで、どうやって神道という名の下にまとめていったのか不思議に思い、神道とは何だろうと考えさせられる内容だった。

○　７月４日（金）ナビゲーション「疲弊する看護師～超高齢化の病院で何が～」を見た。今、患者が高齢化し認知症なども増え、看護師は大変な状況におかれている。雑務が増え、本来の看護以外にやらなければならないことも増えている。とにかく人材が不足しているとのことだった。潜在看護師が全国で７１万人いるということだが、結婚して家庭に入ると、もう一度現場に戻ることは難しい。時代とともに医療現場も変わり、機器も変わり、すぐには対応できないからだ。潜在看護師にいかに現場に戻ってもらうか、医療の現状と今後の課題をよく知ってもらうことが大切で、今後もこういう問題を継続的に番組で取り上げ、問題解決につながる方策等を見つけてほしい。

○　７月４日（金）金とく　シリーズ　現場再訪 ルポルタージュ中部「奥能登の過疎～原発のできなかった町 珠洲～」は、中部地方向けの放送として、地元でないと理解しづらい部分をうまく説明していた。1954 年に珠洲市が出来てから、その後の過疎化、オイルショックを経ての原発誘致、反対住民との混乱、そして、2003 年の原発計画凍結と、時系列でうまく表し、その時代の背景も織り込んでうまく説明していた。また、過疎の現状を、数字を使って分かりやすく示していた。反対派の回顧や反省、市が目指した地元の活性化などをまとめており、凍結から１０年たってやっと今、話ができるようになったのだと番組を見て認識した。計画の凍結を経て最終的に残っているのは、豊かな海と自然。ないものを求めるのではなく、あるものの豊かさを感じ活用していこうとする姿が印象的だった。2011 年に能登の里山里海が世界農業遺産に認定されて、明るい兆しが見えてきている。過疎になってどうしよう、というのではなく、明るい兆しが見えているところがうまく表現されていたと思う。しかしながら、後継者不足や高齢化を補うのは地元の方々の努力だけではなく、これらの環境

に共感する、都会から移り住んできた人であることも事実なので、何らかの形で支援できることはないかと考えさせられる番組だった。

○　７月４日（金）金とく　シリーズ　現場再訪　ルポルタージュ中部「奥能登の過疎～原発のできなかった町 珠洲～」を見た。福井県の大飯町、高浜町、石川県の志賀町は、珠洲と同様の理由で原子力政策を取った。過疎化においては何ら今の珠洲と変わらない。原子力発電所の有無を過疎化に絡めて番組を展開したところに強引さを感じた。誘致計画が凍結した結果、豊かな自然が残ったという表現は、誤解を与えるのではないかと思った。中部地方向けの放送である以上、原発の課題を抱えた“地域”としての視点を持って番組を作ってほしいと思う。

○ ７月１１日（金）金とく「熊野古道　伊勢路をゆく～体感！祈りと癒やしの道～」は、世界遺産登録から１０周年を迎える熊野古道を詳しく知ることができる番組だった。伊勢神宮から熊野を目指す伊勢路は、１６の峠と３つの霊場などが世界遺産に登録されているそうだ。古くから西国一の難所と呼ばれていた“八鬼山峠”には「町石」という地蔵の形をした５０もの道しるべが道中を見守っていることや、最後の“松本峠”の石畳は大小の石が何段も積み重ねられてできていること、松本峠を登りきった頂上ではまっすぐに続く七里御浜の絶景に出会えることなど、歩いてみて初めて出会える感動と魅力を、旅人の宍戸開が地元の人たちと触れ合いながら、実際に古道を歩いて伝えていた。ぜひ行ってみたいという気持ちになる、よい番組だった。

○　６月２３日（月）クローズアップ現代「四国遍路１４００キロ　増える若者たち」は、今、なぜ取り上げるのか関心を持って見た。１０代から３０代の若者たちが遍路をする、何が若者を引き付けるのかを探る内容だった。番組冒頭で、自分自身と向き合う遍路で何らかの変化が起こることを科学的に解明すると言われていたので、どのように解明されるのかを気にしながら見た。自分に自信がない、対人関係がうまくいかない若者２人を追いかけていたが、次第に彼らの目の表情が変わっていくところをうまく捉えていた。また、ゲストの大日寺の住職の話が興味深かった。四国遍路には「お接待」という習慣があり、訪れた人に対して分け隔てなく慈悲深く迎える、いわば、舞台装置があるとのことだった。１人の若者が３０日を過ぎた辺りから自分自身を語り始めて、最終的には「今のままで頑張っていればいいんだ」と言っていた。四国遍路にはそういう効果もあるのだと思った。ただ、結局、何が科学的解明なのか、番組では出なかったと思う。

○　７月３日（木）クローズアップ現代「集団的自衛権　菅官房長官に問う」を見た。視聴者が本当に聞きたい内容について、菅官房長官に問うキャスターの姿勢には好感を持った。メディアとして批判的な視点を持ってインタビューすることは適切だと思う。ただ、菅官房長官が話している途中で番組が終わったのは残念で、最後まで聞きたかった。

○　７月３日（木）クローズアップ現代「集団的自衛権　菅官房長官に問う」を見た。キャスターの質問はあるべき質問であったと思う。番組の最後の発言部分が途中で切れてしまったが、私はあまり気にはならなかった。質問の仕方になどについても、特段、問題はなかったと思う。

○　７月９日(水)クローズアップ現代「アジア労働者争奪戦」を見た。これまでも、労働人口の減少や外国人労働者問題についての議論はあった。外国人労働者を確保したいのは日本だけではなく、アジアの国々の優秀な労働者たちを、韓国や台湾などアジアの産業化した国や地域が取り合っているという事実に衝撃を受けた。非常に着眼点が鋭く、新鮮かつ深い内容だった。我が国のあり方が問われるという問題提起だったと思う。ただ、そもそも日本でなぜ外国人労働者が必要なのかについては、もう少し説明があってもよかったのではないかと思う。日本は、国際競争の中でどうしたらいいのか、具体的な提言ができるとよかった。

○　６月２７日（金）時論公論「児童ポルノ所持禁止へ　～子どもの被害をなくすには～」において、「児童ポルノを許さない風潮を社会全体で作っていくこと、私たち一人一人が児童ポルノは犯罪なのだということをしっかりと認識し、社会常識として根付かせていくことが、児童ポルノをなくし、子どもを守ることになっていくのだと思います」という解説者のまとめは、問題を極大化しているように思った。児童ポルノが犯罪であるということは日本社会の常識であることは言うまでもない。むしろ、今回の法改正が別件逮捕や表現の自由の規制などにつながりかねないということを主な問題として論じるべきではなかったかと思う。

○　６月２９日（日）小さな旅「テングサの海で　～静岡県　西伊豆町堂ヶ島～」は、西伊豆の堂ケ島を舞台にした、そこに暮らす夫婦、親子の物語で、特別な場面が出てくるわけではないが、身近なものの中に宝があるのだと改めて思い起こさせてくれた。日常を丁寧に描いているよい番組だった。１億 2,000 万の日本人全体の中に、主人公になりうる方々はたくさんいると思う。市井の人の日常の中の宝をもっと、番組で見ていきたいと思った。

○　６月２９日（日）日曜討論「激論！新成長戦略　どうなる雇用・法人税」は、論点としていた新たな労働時間の制度と、法人税実効税率引き下げの問題を、キャスターの中川緑アナウンサーが、論点を整理してポイントを説明したことで、全体の議論が非常に分かりやすかった。また、島田敏男キャスターの進行も、非常に切れがいい。議論が脇道にそれないように仕切って、全体として分かりやすい討論会であった。

○　７月４日（金）総合診療医ドクターG「腰がすごく痛い」について、大変興味を持って見た。腰痛の原因は、くも膜下出血という結論になった。予想もしない病気の元が潜んでいることがあると分かるよい番組だった。以前の放送で、病名がなんであろうと一般の人にとっては意味がないのではないかと思わせる回もあったが、同じ番組でも取り上げる題材によってよい時も悪い時もあるということが改めて分かった。

○　７月６日(日)めざせ！２０２０年のオリンピアン「１４歳のチャンプ　レスリング“虎の穴”へ」は、レスリングの湯元進一選手を１４歳の期待の新星が訪ねるという番組だった。オリンピックの銅メダリストが１４歳の少年に対して、特別何を語っているというわけではない。体で見せていきながら、いろいろと気づかせようとしている姿に、同じ道を歩む先輩から後輩に対するまなざしの温かさと、語りすぎないすばらしさを感じることができた。2020 年のオリンピックのレスリングにこの少年が出てくるのか楽しみだ。

○「応援ドキュメント　明日はどっちだ」は、大好きな番組のひとつで、７月８日（火）は男子新体操の高校生たちの活動と町工場親子のロケットに関する取り組みを応援する内容だった。番組で何かを応援するのはものすごく難しいことだと思う。ＭＣの関ジャニ∞が等身大で語り、あえて応援しようとしてないところに親近感を覚えて、つい翌週も見たくなる。いろいろなジャンルの挑戦している人たちをさらに見たいと思わせる番組である。

○　７月１０日（木）超絶　凄（すご）ワザ！「反射光で金属を溶かせ！～究極の“磨き”対決～」を見た。今回は、コンピューターを駆使した磨き技術を使ったハイテク集団と、昔ながらの磨き職人による対決だった。それぞれの技術を持っている人たちが、アルミで出来たパラボラを磨き、当てた光が焦点に集中し、温度の上昇で鉛の棒を溶かすという内容。はじめは、明らかにハイテク集団が勝つだろうと思っていたら、鉛の棒を５分以内に溶かすことができなかった。一方、自分の経験をもとに磨いている職人は、４５秒で鉛の棒を溶かして圧勝するという結果に大変驚いた。ハイテク集団の敗因をもっと追究して、その追究したところも番組の中に入れてほしかった。

○　６月２８日（土）ＮＨＫスペシャル　シリーズ　故宮　第１回「流転の至宝」、６月２９日（日）ＮＨＫスペシャル　シリーズ　故宮　第２回「皇帝の宝　美の魔力」は、とにかく画面がきれいだった。シア・ルージーという台湾の女優と谷原章介がエピソードを交えながら作品を紹介していく構成が、ものすごくうまいと感じた。ただ、たどたどしい日本語が聞き取りづらかったのが残念だった。第１回は、至宝の運搬を担当した当時の学芸員の視点で描かれていた。国土は失っても取り戻せるが文化財は取り戻せない。政府の命令の下、北京、上海、南京、台湾と文化財が移っていく経過や当時のエピソードを、アニメを使って分かりやすく説明しており、緊迫感があってよかった。当時の環境やエピソードもうまく表現されていた。

○　７月６日(日)ＮＨＫスペシャル「ストーカー　殺意の深層～悲劇を防ぐために～」を見た。ストーカーによって、３年間に１４人の女性が殺害され、年間２万件以上の被害の報告がされているという。２０代の女性の加害者は、「私はむしろ被害者。自分と一緒にいたくないなら相手も不幸になってほしい」と言い、４０代の男性の加害者は、「自分は嫌われているとは思いたくない。自分が見捨てられることが怖い」と言う。こういった思いがストーカー行為につながってしまう背景に、携帯電話やインターネットの普及がある。常に連絡を取り合え、相手の行動が把握できることで、思いを断ち切りにくい環境が生まれているとのことだ。これまでストーカー問題は刑事的な観点でしか見ていなかったが、加害者の心理を考えなければ本当の問題解決はないということがよく分かる番組だったと思う。

○　７月１３日(日)ＮＨＫスペシャル「集団的自衛権　行使容認は何をもたらすのか」を見た。７月１日に閣議決定し、それから２週間後の放送だったので、もう少し早く放送しようと思えばできたのではないかと思った。時間をかけたのだから、内容の濃い番組だろうと期待して見た。番組は「水面下の攻防」と「何をもたらすのか」というテーマで構成されていた。「水面下の攻防」はおもしろい内容だった。公明党が自民党に足並みをそろえた経緯が再構成されていた。自民党からの要望、公明党内の動向、大きな転換点となった与党協議などの経緯が明らかになっていた。ただ、本当にそれだけだったのか。何かほかにも事情があったのではないかという感じも抱かせた。番組の中でも公明党が自民党に同意したのは連立から離脱したくなかったからではないかということをうかがわせるところがあったが、この点についてもう少し言及してもよかったのではないかと感じた。サブタイトルに「何をもたらすのか」とあったのでもう少し内容が出てくるかと思ったがあまり出てこなかった。かつて、ドイツではＮＡＴＯ域外への軍の派遣をめぐって大きな議論があった。結果的には集団的自衛権の行使を容認することになった。表面だけ見ると今回の日本の決定とよく似ている

が、実は大きな違いがある。ドイツは戦後、近隣諸国との友好関係を築いてきたゆえに、ＮＡＴＯ域外への軍の派遣に理解があった。日本は今、中国や韓国と問題を抱えている状況にあり、その点が違っている。ドイツの紹介をするのならその辺も伝えてほしかった。

○　６月２１日（土）ＥＴＶ特集「鬼の散りぎわ～文楽・竹本住大夫　最後の舞台～」を見た。番組を通して見た竹本住大夫の姿には、彼の語る義太夫以上に深い感銘を覚えた。病気からの復帰を図るためのすさまじい努力や、思うようにならない自己へのもどかしさ故の苦悩と落胆、夫人との私生活、鬼気迫る弟子への稽古、それと遜色ない情熱をぶつける市井のカルチャー教室での稽古など、偉大な人間国宝の人間としての魅力を、多面的に余すところなく捉えていた。場面展開の緩急もテンポよく、余計なシーンがひとつもなく、文楽ファンであるかどうかなど関係なく、見る者を魅了する、見応えのある人間ドキュメンタリーだったと思う。

○　６月２２日（金）サイエンスＺＥＲＯ「“ぼんやり”に潜む謎の脳活動」を興味深く見た。何もしていないときに活動する脳の部分を調べるという点がおもしろかった。忙しい今の成果主義の社会を生きていると、動いていないと自分がだめなのではないかと思ってしまうが、ぼんやりしているときにとてもいい効果があると聞き、ぼんやりするのによい言い訳ができたと思って見た。まだまだこの分野は追究されている途中ということで、期待していたような深いところまでは行っていなかったが、これからさらに新たなことが分かってくると、とてもおもしろいと思う。

○　７月８日（火）ハートネットＴＶ「曖昧な喪失の中で　～福島　増える震災関連自殺～」を見た。2011 年の“３・１１”から３年以上たった今、福島で震災関連自殺が増えているとのことだ。決して華やかなテーマではないが、こういうテーマを地道な取材で丁寧に重ねていってほしい。

○　６月２９日（日）Ｂｉｚ＋サンデーを、メインキャスターが飯田香織キャスターから野口修司キャスターに代わって初めて視聴した。野口キャスターについては、話が聞きづらく、立って話を進める際には体が安定せず、直筆のフリップは大変読みにくかった。また、インタビューの着眼点が甘く、質問も表層的なものだった印象である。今回の放送はサードプレースの紹介にもかかわらず、サードプレース概念の解説がなかったのは不親切だったし、ホワイトカラー・エグゼンプションの是非を問う取材対象として零細企業を選んだことには疑問が残った。全体を通して、改善すべき点が散見され、残念だった。

○　６月２８日（土）（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 8:00～8:59)「クラゲという“神様”に出会った～世界一のクラゲ水族館～」は、クラゲだけの水族館があると聞いていたので、楽しみにして見た。山形の鶴岡市にある加茂水族館は、１７年前、閉館寸前に追い込まれた。たまたま紛れていた赤ちゃんクラゲに客が喜ぶ姿を見て、館長がクラゲに水族館の運命を賭けたのが始まりという大変印象的な話だった。寿命の短いクラゲの繁殖に挑戦して、2012 年には世界で一番多くのクラゲを飼育する水族館として認定されるなど、注目される水族館に成長した。５メートルの水槽に展示されているクラゲの大群を見ている客の様子がほほえましくて、とても印象に残っている。番組最後の数々の珍しいクラゲの映像は、いつまでも見ていたいと思うほど美しく、東北なまりの館長の温かい人柄とスタッフのクラゲを思う愛情が伝わってきて、とてもいい番組だった。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年６月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

６月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、７月１７日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ナビゲーション「消えゆく古文書を救え」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	森棟　公夫	（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長	金森　昭夫	（中日新聞社取締役総務担当）
委員	秋元　祥治	（特定非営利活動法人　Ｇ－ｎｅｔ代表理事）
	井上　庄吾	（愛知県農業協同組合中央会専務理事）
	小寺　功子	（三重県漁協女性部連合会会長理事）
	佐野　俊和	（コマツサービスエース（株）代表取締役社長）
	杉浦　宇子	（弁護士）
	立花　貞司	（トヨタホーム（株）取締役会長）
	田中　章義	（歌人・作家）
	野田　雄一	（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）

（主な発言）

＜ナビゲーション「消えゆく古文書を救え」
（５月２３日(金)　総合　後 7:30～7:55　中部ブロック）について＞

○　古文書の保存に努力している人々に対して、敬意を表したい。特に、掃除機をつかって古文書を修復する作業には感心した。民家の古文書には地域の情報が細かく記載されていて病院とか避難所の位置の是非についても判断できるという話、主人公はあくまでも地域の人で、自分たちの歴史を未来につなぐために古文書の保存が必要なのだという話に共感した。古くからの歴史をそれぞれの地域で残し、後世の人がそれを有効に活用することが非常に重要であると感じた。逆に、われわれが後世に、地域の歴史をどうやって残していくのか考えさせられた。

○　古文書というあまりなじみのないテーマを、午後７時台の枠で番組化されていた。この時間帯で扱われるものは、民放を含めて似たような素材となることが多い中で、古文書を取り上げようとしたことを評価したい。実際に市民や学生が協力して古文書の修復に取り組んでいる姿や、２０億点もの膨大な古文書の９割が民家の蔵などに眠っていると具体的な数値が示され、大変おもしろく見ることができた。おそらく、全国に、宝の山のように眠っている古文書があると思うので、ぜひ全国向けに、古文書の重要性、活用のしかたを発信してほしい。一方で、古文書の役割として地震を取り上げたのは分かりやすかったが、日本文化や文学の分野の例にあるように、近代以前の古文書が現代にどのように役立ち、私たちの暮らしにどう反映されているか取り上げてほしかった。また、古文書の定義や、それがどう活用されて日本の歴史書が残されてきたのかが分かるとさらによかった。面白い切り口の番組ではあった。

○　古文書の保護の現状について、これまで意識することがなかった。これを取材するに至ったきっかけを知りたい。古文書が地域の遺伝子情報であり、それは地域の歴史遺産であるという話は、もっともだと思った。過去から未来につなげていく必要な史料と捉えると、今の日本がどのような状況に置かれているのか、その一端を見ることができた。深刻な過疎化で、身近な蔵も壊されているところを実際に見ているので、身につまされる思いがした。古文書の必要性自体が、高度成長とともに失われていったのではないか。ネットワークを作っていくのは地域で、地域で伝えたものを自分たちでつないでいくということは、とても重要なことだ。古文書を中心にしながら、地域においての歴史を考えるきっかけになる。ほかの地域でも取り組んでいる所があると思うので、それが見られるとよかった。派手ではないが、大切な歴史をひもとく古文書に焦点を当てたのはよかった。

○　なるほどこういう世界があったのか、というのが第一印象である。古文書が置かれた状況を初めて知った。番組では、中部の事例と東北の震災現場の事例を取り上げていた。東北の事例の地域で歴史を保存していこうという活動は、全国に先がけた取り組みであり、他の地域でもこうした動きが今後出てくるのではないかと思った。日本全体でどんどん古文書が消え、保管状態がよくないまま朽ちていく中で、ボランティアの方がかかわりながら修復していくことは、東北だけでなく、地域での古文書の保存のあり方のヒントがあるような気がした。加えて知りたいと思ったのは、わが町のことだったので、ほかの地域のことも、簡単に紹介があったらよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

取材のきっかけは、題材を福井県内で探している中で、古文

書の修復に取り組む先生に会うことができたこと。まずは先生の修復作業の実態に興味をひかれ、古文書が消えゆく現状を知った。取材を進める中で、それが現代社会の過疎化や高齢化を反映しているということが分かり、古文書の大切さを追うという形で、番組化に至った。古文書はふだんの私たちには決して身近なものではない。しかも、一見あまり今風でないように見える題材の意義をどう伝えれば分かりやすいのかが一番悩ましいところであった。もう少し古文書の意義を詳しく広くお伝えしたいとの思いもあり、追加取材をして、「ニュースウオッチの企画など違う形でもお伝えする予定である。

○　題名から、難しそうだと思っていたが、見ていくうちに、大変興味深くなっていった。永井伸一アナウンサーの進行もよく、古文書をなぜ保護しなければいけないのか、全体的に、分かりやすく丁寧に伝えていた。歴史研究者の多仁照廣さんの修復に取り組む姿と「捨ててほしくない」と言われた一言が心に残っている。被災地において、震災後すぐに古文書を回収し、濡れたものは冷凍保管してまで守っていることに驚いた。その修復を市民がボランティアで手伝っている様子を見て、被災地の力強さと知らなかった一面を見せてもらったような気がする。また、私の地域はどうなのだろうと調べてみたら、4月に初めて古文書館が新設されたことが分かったので今後期待したい。番組最後にゲストから、「眠っている古文書があればどんどん出してください」という旨の発言があったが、どのように出せばいいのか、出したあとはどうなるのか、費用はどれくらいかかるのかなどについても取り上げるとよかった。

○　膨大な量の古文書が手つかずの状態であふれていて、かつ消滅の危機にひんしているという状況や、古文書の修復は民間に頼っているという事実を知り、大変興味深く見た。しかし、古文書は大切で価値がありその修復は意義深いという価値観を視聴者が理解していることが前提になっている感がした。そうでない視聴者にとっては、民家に放置された古文書にどのような価値があるのか、消失により何が問題となるのか分かりにくい。関係者へのインタビューでは、管理に時間がかかる状況や古文書はその地域の遺伝子情報だという考え方は聞けたが、古文書研究から何が明らかになり、どのような成果や価値があったかが分からなかった。修復に取り組む人々が、どのような意義を感じているかも伝わってこなかった。いずれのインタビューも、古文書に関する周辺情報に偏り過ぎている。全編を通して古文書の本質的価値や、歴史的公文書との違い、このまま放置した場合の社会的損失などについての明瞭な説明と実証が足りない感じがした。一般的に共感を覚えにくい内容にもかかわらず、大きな課題を

取り上げるときと同じような構成にした点に問題があったのではないか。そもそも古文書とは何かや、その意義や価値を図表にまとめたりテロップで分かりやすく解説したりする手間が必要であったように思う。おもしろい素材であり、地域で取り組むべき課題提起につながるテーマだったので、若干もったいない感じがした。内容としてはおもしろかった。

○　見る前は、古文書をテーマに番組がどんな展開となるのか興味を持ったが、一度見ただけではあまり印象に残らなかった。私自身の職業柄、昔の生活の記録が今の法制度とつながっているという認識があり、古文書自体に興味はあったが、もともと興味がない人にとっては何が大切なのか伝わりにくい見せ方だった。たとえば大地震の記録など、今にどうつながるのか、個々の情報をつなげると重要な資料になるという古文書の価値を今の時代の人たちに訴える見せ方をするとよかったのではないかと思う。修復活動に参加するうちに古文書が読めるようになったという女性がいたが、修復・保存という観点だけでなく、そのことを通して歴史に興味を持つきっかけになっているという点は興味深かった。

○　この番組がどれくらい見られたか知りたい。私は、番組タイトルだけでは見なかったと思うし、今回のテーマは、実際に番組を見てもらわないとその価値が分からないだろう。新しい修復の技術やプロジェクトの紹介、取り組みの実態は非常によく分かった。ただ、その重要性や必要性、価値については、研究者側の見方が中心だったという気がする。本当に今後古文書が必要であるならば、持っている人にその価値をきちんと認識してもらわないと結局ゴミになってしまう。持っている人たちにどういう形で、必要性や価値を理解してもらうのか、そういった工夫が今後必要だと思った。さらに、古文書が実際どのように活用されて、どう生かされているのか、それがないとどんな損失があるのかを取り上げると今後につながっていくのではないかと期待している。

○　おそらくは、どこにでもある身近な話なのだが、うまく問題意識を持って新しいニュースとして番組にしていた狙いは非常によかった。東日本大震災以降、天災は自然科学の分野だけではなく、歴史や人文的な点からも見直されている中、どういうきっかけでこのテーマを選ぶに至ったのか気になった。日本全国におそらく２０億点の古文書があり、その９割が民家に眠っているという指摘は、同じようなことがどこにでもあると知らせることになったのではないか。掃除機を利用した機材を使うなど、古文書の価値や意義をここまで残してきた修復作業そのものも大変な驚きを持って見た。地域の歴史を物語る古文書には、地震や天災の記録以外にも成果はたくさんあろ

うかと思う。これから市民の力を借りながら全国でこういう活動が展開していけばいい成果を生むだろうという番組の結び方はよかった。ただ、成果の例として挙げたのが、江戸時代の船に酔わない方法についてであったのが残念だった。これ以外に紹介する適切な事例があったのではないかと感じた。

○　古文書修復に取り組む先生たちの努力は非常に尊敬する。また、修復にあたっている女性が古文書を読んでいく様子が非常におもしろかった。ただ、全般として個人的な努力ではどうしようもないという気がして、行政にどうやって働きかけるのかというところが非常に重要な課題であると思う。全国放送で紹介するなどして行政を動かさなければ、救済することは不可能だと思う。民間に眠る古文書をどうやって出してもらうのか、出すにはどういうシステムが必要か、そういうところもやはり行政が解決すべき問題だ。重要性は古文書を修復している段階ではわからない。重要性が分かるのは５０年後、100 年後かもしれない。ただ、あとの時代になって重要性が地域との関連で出てくることがあるので、修復して残しておこうという、気の長い話でもあることをはっきりと伝えてもよかったのではないか。ちなみに、番組で出てきた資料に、商家の取引の史料となるものもあったが、経済の分野を学ぶ人たちにとっては非常に有用な資料である。

（なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた）

○　古文書というと、歴史的価値が十分あり専門家によって研究され、しかるべき管理が行われているとのイメージを持っていたので、古文書の９割が民家に眠ったままであるとの新しい事実に驚いた。身近な道具で読める程度にまで修復するとあったが、これは専門的な修復の前段階なのか、あるいは古文書の価値の判断をしたあとの作業なのか。膨大な古文書の保存に専門家だけでは無理で協力者が必要なことは理解できるし、古文書に対する興味を持たせるなどの工夫をして作業をする協力者を増やす努力にも敬意を払いたい。一方で、保存技術のレベルはどのくらいのものなのか。興味深く見たが、古文書の価値の判断、協力者の技術レベルといった点でもう少し掘り下げてもよかったかと思う。

（ＮＨＫ側）

名古屋地区では、世帯視聴率１０．６％で、今年度の「ナビゲーション」の中では最も高かった。特に５０代、６０代の男女によく見られた。修復作業は、身近な道具による修復をもって完了

となり、元の持ち主に返して保管してもらうという流れであり、このあと専門的な修復が行なわれたりするという状況ではない。汚れて読めないから捨て去られるということにならないようきれいにして読めるようにし、内容やその大切さが分かったうえで、保管してもらいたいという思いで、活動を続けているそうだ。番組中の修復技術は、専門家からもレベルがかなり高いと注目されており、各県の文書館や国立公文書館の担当者が見学に来ているほどである。古文書にどんなことが書かれているのか、古文書にはどんな価値があるのかを伝えようとしたが、ご指摘の通り、それが具体的にどう生かされているかまでは伝えきれず、今後の課題としたい。

○　名古屋地区で１０．６％の世帯視聴率というのは、かなりの方が見ているという印象だ。なじみのないテーマだが、日本各地には、江戸、明治時代から伝わっている蔵が多くあり、潜在的な関心はあるのではないか。２５分の番組ですべてを網羅するのは難しいだろうと思うが、ぜひ今後も、古文書をこう活用したら生活に役立つということを取り上げた番組を引き続き発信してほしい。古文書を日本全体の財産にしていくような取り組みなど、次の展開に期待したい。

＜放送番組一般について＞

○　５月１６日(金)ナビゲーション「法律で変わる　アルコール依存症対策」は、三重県の精神科医・猪野亜朗先生から広がった取り組みで、興味深く見た。医療機関や警察などとの連携でアルコール依存症の早期発見に取り組んでいる様子や、これが国を動かし法律が成立し、全国に広がりを見せていること、また、酒造メーカーや販売店の人たちの自主的な取り組みも紹介されていた。今後、社会がどのように変わるのか、引き続き見守っていきたいと思った。

○　５月１６日(金)金とく「名古屋発『北斎漫画』２００年の遊空間」を見た。北斎漫画が名古屋で作られていたとの話で誇りに思う。漫画といってもストーリーはなく図案だけで、それを江戸時代の人々が楽しんでいたことが不思議で驚いた。今の時代よりモダンかつ抽象的なものを評価する考えを当時の人々は持っていたのかと思った。名古屋に永楽屋という出版社があったこと、木版のすり方、あるいはエミール・ガレのガラス器に北斎の鯉の絵が使ってあるなど、いろんな点に感心した。ゲストの解説

によれば、エドガー・ドガやポール・ゴーギャンも北斎のデザインを参考にしていたとのことだが、どの程度一般的に認識されている事実なのかが分かるとよかった。

○　５月２３日(金)金とく「初夏　東海自然歩道をゆく　かんどアナの静岡カンドー旅」を見た。まず、だじゃれのようなタイトルでは視聴意欲が湧かない。局のアナウンサーによる紀行番組で、華も充実感も欠けていたように思う。静岡の紹介だからと山梨部分は車で移動したことも視聴者には理解しがたかった。他局の金曜８時台と比較されても視聴者に選択されるべく、魅力ある番組づくりに真摯に取り組んでほしいと思った。

○　５月２３日(金)金とく「初夏　東海自然歩道をゆく　かんどアナの静岡カンドー旅」は、静岡県の 160 キロを神門光太朗アナウンサーが歩くという内容だったが、全く感動しなかった。静岡県内を歩くというこだわりなのか山梨の所は車で走り、番組冒頭のＶＴＲでは野生のカモシカの紹介があったのに、番組中には出てこないなど違和感があった。番組の最後に、今回の「金とく」で紹介しきれなかったところは「東海北陸フレッシュ便　さらさらサラダ」で紹介すると案内があったが、一体どちらの番組が主体だったのか理解しがたい。「金とく」で２回に分けて、しっかりと取り組んでもよかったのではないかと思う。

○　５月３０日(金)の東海北陸ヒューマンドキュメンタリー「あなたのやりたいこと～浜松 駐車場ビルに集う人々～」(総合 後 7:30～7:55　中部ブロック)は、新しい視点で駐車場ビルの活用を見つめた番組だった。ただ、仲間同士で盛り上がる様子の描き方はこれでよかったのだろうかと思った。それによって世の中がこう変わろうとしているという、次につながるようなヒントがあればよかった。試みはすばらしいが、取り上げる人についてはもう少し考える必要があったのではないか。ただ、視点は本当におもしろい。むしろ、駐車場ビルを地域の人に無料で貸すオーナー自身の人物像に興味を持った。

○　東海北陸ヒューマンドキュメンタリー「あなたのやりたいこと」を見た。空いた駐車場の一角に市民が集うということは、近所づきあいがあまりない時代において、大きな動きではないが貴重な試みだと思う。特に、外に出て人と交わることが苦手な人が参加している様子を見て、家に閉じこもりゲームばかりしているよりもはるかによいと思った。こういう試みが増えてくれば少しずつ世間との関わりができ、日本もよくなるのではないかと期待し楽しく見た。

○　５月１６日(金)のＮＨＫスペシャル「集団的自衛権を問う」(総合 後 10:00～11:13)は、安倍首相が記者会見した翌日の放送だった。討論形式で、感情的な議論があったり、非常に専門的な内容だったりと、全体的に理解が難しい面があった。まず、あらかじめ､憲法や専門的な用語､政府の見解がどうであったのかなどを説明したうえで、議論を展開するとよかったのではないかと思う。個別的自衛権と集団的自衛権の基本的な考え方についての説明も欲しかった。また、集団的自衛権が必要かという議論と今の憲法でそれが行使できるのかという議論が混在しており、分かりにくかった。また、司会者は、やや出席者に対し遠慮していたのではないかと思った。

○　ＮＨＫスペシャル「集団的自衛権を問う」は、安倍首相が会見をした翌日にＮＨＫが放送すること自体が興味を引いた。この問題はとにかく難しいというのが番組を見た感想である。大きく分けると立憲主義の問題と安全保障としてどうあるべきかという問題がある。少しレベルが違うのだが、混在した議論になっており分かりにくかった。立憲主義とか憲法の問題は重要であるのに、その位置づけをきちんとしないまま番組を構成した印象で、議論の整理のしかたに疑問を感じた。

○　５月１８日(日)ＮＨＫスペシャル「流氷“大回転”」は、オホーツク海で起こる幻の現象、流氷大回転を追い、その直後に生命の大爆発の秘密を解明していくという番組でとても興味深く見た。流氷が海面に描く、巨大な渦が模様を描く様子に、底知れぬ大自然のすごさを感じた。また、直後に起こる生命の大爆発の秘密が鉄であることなど、知らなかった世界を見せてもらった。流氷は鉄を解き放ち渦を巻き、その回転が深い海から栄養を巻き上げるという言葉が心に残った。押し寄せる水鳥の大群、ザトウクジラが泳ぐ姿など世界有数の生き物の楽園といわれる春のオホーツク海の映像に大いなる海の姿を見た気がした。大変見応えのある番組だった。

○　５月２４日(土)ＮＨＫスペシャル「シリーズ　エネルギーの奔流　第１回　膨張する欲望　資源は足りるのか」(総合 後 9:00～9:49)と５月２５日(日)ＮＨＫスペシャル「シリーズ　エネルギーの奔流　第２回　欲望の代償　破局は避けられるか」を見た。多方面にわたり精力的に取材していたと分かる内容だった。エネルギー問題は、国際的に取り組んでいかねばならないが、それぞれの国情があり、解決は難しく答えはないのだと感じた。第２回の最後に登場したモンゴルの遊牧民の「羊たちは草の表面しか食べない。そうすれば来年また生えてくる。根まで食べ尽くせば２度と生えてこない」という話が、番組全体として言いたかったことなのだろうと感じた。国富とは何か、後世に対して我々はどういう責任を負っているのかということを、つくづくと感じさせられた大変いい番組だった。再生可能エネルギー、使用済み核燃料の処理

についての今後や技術の進歩など、これからも、ぜひ掘り下げていってほしい。

○　５月３０日(金)ＮＨＫスペシャル　東日本大震災「防潮堤　４００キロ～命と暮らしを守れるか～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。被災した岩手県宮古市田老地区では、数十年から数百年に１度の津波に対処する防潮堤と、数百年から千年に１度の大津波に対応する防潮堤の２段階に分けて考えており、防潮堤には、大津波を防ぐのではなく避難の時間を稼ぐためのものだとする考えがあると知った。今後どう進んでいくのか、これからも取り上げていってほしい。また、住民から防潮堤の整備計画を問い直す声があがり、行政と地域が議論していることを知り考えさせられた。防潮堤工事は実は巨大な公共事業であり、防潮堤を作っても、住宅地は移転し、それに守られた土地には農地などしかない状況である。費用対効果の議論についても指摘していて、非常に説得力のある内容だった。本シリーズの今後の健闘を期待したい。

○　５月３１日(土)ＮＨＫスペシャル「シリーズ日本新生　日本の医療は守れるか？～“２０２５年問題”の衝撃～」(総合 後 9:00～10:13)について、各新聞などでも医療問題を取り上げている中、各メディアの報道のされ方の違い、何が正しいのかを考えるきっかけになる内容だった。2025 年、団塊の世代が後期高齢者となり、2,180 万人に達するというその数字に驚いた。ゲストが多彩で、学生や団塊の世代、医療関係者やそのほかいろいろ立場の人の意見をうまくまとめていた。分かりにくいものを数字・図式などを使って、理解しやすくしていたこともよかった。いちばんの問題は、待ったなしの状況を、どう解決するのかということである。各番組でも取り上げているが、危機に面していることをいろいろな視点で気づかせるのがＮＨＫの役割であると思う。今後も継続して取り上げていってほしい。

○　５月１９日(月)クローズアップ現代「シリーズ 主婦パワーを生かす（１）“高スキル主婦”が中小企業を救う」を見た。全体として、女性の活用が言われる今を捉えた番組だった。マッチング事業による中小企業での事例は非常に興味深く見た。ただ、成功事例については想像ができる範囲の内容であった。実際、厚生労働省の制度を活用した人の中で成功事例はどのくらいの割合なのか。うまくいかない事例についても焦点を当ててほしかった。能力を持った主婦をどう活用していくのか、失敗事例から学ぶというところまで踏み込んでいくと、見応えのあるものになったのではないかと思う。

○　６月３日(火)クローズアップ現代「動物園クライシス ～ゾウやキリンが消えていく～」を見た。これまで多くの動物園は、自治体が市民を楽しませる所としてやって

きたが、今、待ったなしの問題になっているのは“種の保存”である。そのためには単に入園者数による評価ではなく、動物園のあり方を変えていきたいと、ゲストの日本動物園水族館協会前会長の山本茂行さんは話していた。今回、番組に出てどういう反応があったかを本人に聞いたところ、もっと具体的に話を聞きたいという人や様々な面で協力したいという声があったそうだ。動物園のあり方を変えていくきっかけになればと思う。身近な人が語った言葉が人を動かしていっていることを知り、テレビの見方が変わった。

○　６月１６日(月)クローズアップ現代「“イクボス”ってどんなボス？～人材多様化時代の上司像～」では、仕事と育児や介護などの両立を支援するボスのことを“イクボス”と呼ぶことを知った。女性や子育て世代の活用には、制度以上に上司の理解が必要であるというところに注目した内容で、紹介された事例もおもしろく非常に興味深く見た。一方で、子育て世代活用の事例が並ぶ中に高齢者活用の話が入るなど、全体の流れに幾分ずれがあるように感じた。また、大企業の取り組みを中小企業にどう活用していけるかというところまで見せてほしかった。せっかくこの番組で取り上げるのなら、さらに多彩な事例を紹介できるとよかったのではないか。

○　６月１日(日)ダーウィンが来た！生きもの新伝説「シリーズ東京湾（１）生きものいっぱい！大都会の海」と６月８日(日)ダーウィンが来た！生きもの新伝説「シリーズ東京湾（２）潜入！海の“お花畑”」は、東京湾北部の内湾と南部の外湾を２回に分けて放送していた。いずれもすばらしい番組で感心させられた。（１）では、番組名のとおり、工場群に囲まれている大都会の海に、700 種類もの生き物がいること、(２)では、想像を超える種類のサンゴが紹介され、大変驚かされた。今までの東京湾のイメージとは全く違った。かつて死の海といわれた東京湾が、今ではかなり再生されてきており、その間の相当な努力が感じ取れた。図解や実験も取り入れて、非常に分かりやすい構成だった。今もまだ課題があり、どういった形で解決されていくのか、今後の取り組みについての番組を期待したい。

○　６月５日(木)に最終回を放送した、木曜時代劇「銀二貫」について。この時代劇は悪人も出てこず、安心して楽しく見た。のんびりと見る人情もののドラマとして十分な内容だった。テンポもゆっくりしていて、夜見るには非常によかった。斬ったり殺したりする場面が多い時代劇は心が休まる娯楽にはならない。若い役者が少し現代的に思えて違和感もあったが、今日作る時代劇ではこれもよいと思った。テレビ全体として時代劇が少なくなっている。私は、「東海道中膝栗毛」なども時代劇としておもしろくできるのではないかと思う。これからも、気軽に見られる時代劇を放送し続け

てほしい。

○　６月７日(土)「ＴＨＥ　ＦＵＴＵＲＥ　私たちの選択」(総合 後 3:05～3:35)は、移民受け入れと外国人技能実習制度の２つを軸として、マトリックスを使って選択を問うという切り口だったが、論点が多角的になりおもしろい。また、マトリックスに直接、視聴者の意見を反映させていたのも、デジタル放送での視聴者参加の有効性を大いに感じさせるものであった。しかし、せっかく対立ではない２軸を設けたにもかかわらず、論点が「移民受け入れ」対「技能実習制度」となってしまい、課題解決から離れてしまったことが残念だった。視聴者の意見も、移民も技能実習制度も反対という結果に終始し、課題解決へと向かう方向性が見えなかった点が惜しかった。ツイッターの画面表示は番組への集中力を妨げるため、やめたほうがいいと思った。また、マトリックス上に視聴者のサンプル数は明示すべきであろうと思った。マトリックス上の視聴者の意見の推移を映して終わりではなく、きちんとした総括をしたほうがよかったように感じた。

○　６月１３日(金)総合診療医 ドクターＧ「手がしびれる」は、主人公が６３歳の男性で、ひと事ではないと関心をもって見た。構成そのものは、ドラマで病状を紹介し、研修医が病名を推理し、指導的役割の医師がこれに対して講評しながら病名を確定していくというものだが、病名を当てる過程がおもしろい。ドラマは現実感があり、また、これにコメントする出演者が的確な指摘をしていて、全体が引き締まった内容だった。ただ、最終的に病名が確定しても、一般の人には病名の違いはあまり分からず、医師たちのような驚きはないのではないか。そもそもこの番組は医療現場で働いている人たちに向けたものなのか、それとも一般の視聴者向けなのかが分からない。もう少し狙いを絞ってもよいのではないかと思った。また、病名が確定したあと、治療法や予防法について詳しく知りたかった。もう少し視聴者の視点に立ってほしいと感じた。医療制度が変わろうとしている中、全国の病院で生存競争が起きている。現在の医療制度とその中での病院の苦労についても、番組として取り上げてほしい。

○　５月１８日(日)サイエンスＺＥＲＯ「“地上の星”を手に入れろ！　核融合研究最前線」を見た。東日本大震災以降、ＮＨＫの各番組で原子力発電の問題を取り上げ続けているのに、放射性物質などについての説明がなかった。核融合発電の効果とリスクをきちんと評価したうえで、適切な紹介をすべきではないかと感じた。サイエンス・バラエティーということで、分かりやすく紹介しようとするのはいいが、一方で、科学的な検証や論点が足りないような気がした。

○　５月２６日(月)ハートネットＴＶ　ブレイクスルー「ｆｉｌｅ６　失敗を、笑う　発達障害の漫画家・沖田×華」は、司会２人が優しい穏やかな語り口で、発達障害を持つゲストとの話もスムーズで感じがよかった。発達障害の問題は、関わっている周りの人たちにとっても、その人の悩みや生活を知るのは大変有意義である。人から理解されず、自分も人が理解できずに悩んできたことや、うまく表現できなくてずっと追いつめられてきたことなど、具体的な話が出てきて勉強になった。また、置かれた状況を視点を変えて、笑い飛ばすことによって立ち直った漫画家の話は、とてもおもしろく共感できる内容だった。

○　６月９日(月)きょうの料理　おばあちゃんに教わる保存食「梅干し」は、９２歳の料理研究家の梅干しに対する思いや探究心に、単に料理番組としてではなく、ヒューマンドキュメンタリーのような番組を見ている感覚だった。もっと深く考え方や生き方を見たいと思った。「きょうの料理」でこんなに感動することに驚いた。大変すばらしい番組だった。

○　６月９日(月)ワイルドライフ「沖縄やんばる　鳴いた！跳んだ！知られざるカエル王国」を見た。沖縄の山原(やんばる)が日本一のカエル王国だとは知らなかった。１年間を通しての取材で自然の豊かさを丁寧に表現しており、ハイビジョン映像などすばらしい技術が駆使された番組だった。なかなか行く機会のない場所のカエルの王国に見入った。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年５月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

５月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、金とくスペシャル　名古屋発！生放送ドラマ「喜劇　娘が嫁ぐ日」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、「平成２５年度中部地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」および業務報告と６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	森棟　公夫	（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）
副委員長	金森　昭夫	（中日新聞社取締役総務担当）
委員	秋元　祥治	（特定非営利活動法人　Ｇ－ｎｅｔ代表理事）
	井上　庄吾	（愛知県農業協同組合中央会専務理事）
	小寺　功子	（三重県漁協女性部連合会会長理事）
	佐野　俊和	（コマツサービスエース（株）代表取締役社長）
	杉浦　宇子	（弁護士）
	立花　貞司	（トヨタホーム（株）取締役会長）
	田中　章義	（歌人・作家）
	松本　耕作	（加賀味噌食品工業協業組合理事長）

（主な発言）

＜金とくスペシャル　名古屋発！生放送ドラマ「喜劇　娘が嫁ぐ日」
（総合　５月９日(金)　後 7:30～8:43　中部ブロック)について＞

○　出演者やスタッフが楽しそうに制作している様子は伝わってきたものの、身内で盛り上がっている感じが強く、６０年分の感謝の気持ちを込めて楽しませようという使命感が伝わってこなかった。生放送ドラマといっても、内容はドタバタの喜劇で、「ハプニングがあってもご容赦ください」といった程度の覚悟しか感じられず、取り組む姿勢に潔さや真剣味が感じられなかった。本当にこの番組が６０年間にわたって名古屋局が積み上げてきたテレビ番組制作の成果のひとつなのか、また、名古屋局で番組制作に携わってきた多くの制作者の足跡に報いるクオリティーなのかと疑問に思った。ドラマのストーリーとして、いったんきちんと締めくくらなかったエンディングは演出としてよくなかった。黒崎めぐみアナウンサーの「お疲れ様でした」という発言は、

無事生放送を演じきった身内へのねぎらいと達成感によるものであって、視聴者を意識したものではなかったように思った。また、父親と娘の関係性や感情のもつれの回復について、見る側に整理、納得させる間も与えず、無事に生放送をやり終えたことにはしゃいでいる姿を見せられた感じで、興ざめしてしまった。生放送が目的化してしまっているような感じすら受けた。また、名古屋の人しか分からないものもあって、中部地方の中でも地域性や文化の異なる県外の者としては、「蚊帳の外」に置かれたような印象を持った。ドラマの中で登場するテレビ番組が、結婚式の中継番組だという設定や、登場人物の設定に共感を覚えるものがなく、興味や関心が湧かなかった。このような非日常的な出来事を共感させるには、７３分間では時間的に無理があったように思う。

○　テレビ放送開始当初に戻った緊張感のある生放送ドラマに挑戦し、スマートフォンとの連動など技術的な面での努力に敬意を表したいと思う。ひとつの舞台と考えた場合、舞台を切り替えるときの幕間のような部分を、スタジオとテレビ塔の宴会場の両会場をうまく利用して切り替えていた。背景で流れていた音楽はどのように合わせていたのか、興味を持った。また、長いせりふも間違えずに上手に話していて、カンニングペーパーのようなものがあるのかと思うほどだった。ただ、導入部分は少し雑だった印象だ。いわゆる放送開始当初に戻った生放送ドラマの再現を目的とするならば、昔の映像を流したり、それを視聴している場面を入れてもよかったのではないか。２月２８日(金)放送の東海北陸スペシャル「撮った！伝えた！描いた！　ＮＨＫ名古屋テレビ６０年」では、せりふを“かんで”しまった昔のドラマを紹介していたが、そういったシーンなどを入れて、生放送ドラマの制作は大変で、それに挑戦していると分かるような演出があってもよかったのではないだろうか。愛知県出身の女優の竹下景子さんのポスターが貼ってあったり、いわゆる“名古屋めし”のあんかけスパゲッティや小倉トーストなどがメニューにあったり、ディレクター役の「本物を伝える、それがテレビだ」というせりふなど、手作り感はあったので、タイトルにある喜劇という意味では楽しむことができた。ただ、もう少し洗練されたドラマを想像していたので、バタバタし過ぎている印象だった。時間的にどのように展開するか分からないからと、映画のエンドロールのような形の終わり方になってしまったのはしょうがないと思うが、ドラマとして区切りを付ける演出ができなかったのかと、少し残念な印象を持った。

○　テレビ放送開始から６０年というのは、長い歳月のようにも感じるが、まだいろんなことにチャレンジできる時期だと実感した。６０年の節目に生放送でドラマ制作に挑戦し、生放送でできることを中部地方の人たちに提示していくという姿勢を評価す

る。実際の生放送で見て感じたのは、平田満さんはじめ演技力のある俳優は、設定がどうであれ、視聴者を引き込む力があるということだ。今回は劇団を中心に活動している鹿目由紀さんが脚本を担当しているが、テレビや映画を中心にしている脚本家の場合は、どのような作品になるのか見てみたいと思う。テレビはもっといろいろな挑戦ができると思うので、今回の生放送への挑戦はよかったと思う。ただ、最後は、ドラマのストーリーで完結させ、どのように作ったかという話は、後日、別番組で紹介すればよかったのではないか。ツイッターによる「ソーシャル電報」はおもしろいと思ったが、「ええがね！ボタン」は、ドラマのストーリーに感情移入するうえで、気が散ってしまい、邪魔に感じた。賛否いろいろな意見があるようだが、ソーシャルメディアで視聴者が参加できる仕組みには賛成で、すばらしい試みだったと思うし、今後も新しいことに挑戦を続けてほしい。

○　テレビ放送６０年という機会に、あえて生放送のドラマにチャレンジしたことは、大変勇気のいる決断だったと思う。最初は、娘が嫁ぐ際の父親のせつない気持ちを喜劇で表せるのかと少し抵抗感があったが、父親役の平田さんが、見事に親の気持ちを表現していて、引き込まれた。あれほどのせりふを覚えて演じることは大変難しいと思うし、スタジオだけではなく、２か所からの中継なので、時間管理が大変だったと思う。俳優ひとりひとりが見事に演じきっていた。高柳明音さんと平田さんが演じる父娘の最後の場面は、相手の気持ちを分かりながらも、素直に伝えられなかったことが見事に出ていた。父の話に、高柳さんが涙を流して聞いていた場面は、現実感があって感動的だった。また、祖母役の山田昌さんの、親が子どもを思う気持ち、小学校の運動会のエピソードなどおもしろい話を交えつつも慈愛に満ちたまなざしで、息子を説得する場面は、すばらしい演技だった。終わり方については賛否両論あるが、生放送に向けて努力し無事終わってほっとした気持ちが出てしまったのだろう。全体的に、出演者のみならず、脚本家やスタッフ全員で作り上げた力作であったと思う。

○　岐阜県の者にとっては、名古屋は近いので、方言も身近に感じられ、気持ちよく見ることができた。方言を使った番組は、民放も含めてほとんどないように思うので、もっとあってもよいように思った。ドラマの中の番組名を「今日もはなまる思いっきりガッテンテレビ」と付けたり、細かいパロディーなどがちりばめられており、大変おもしろかった。ほかにも竹下景子さんのポスターやＳＫＥ４８に関する物が貼ってあるなど、随所に喜劇としての要素も含まれていて、セットに何が隠れているのか探すのが楽しくなった。また、ほろりとするシーンもあって、笑いと両方あってよかった。違和感があったのは、そもそも結婚式をなぜテレビ番組で生放送する設定なのかが分からなかった。ＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）との連動など試験的な

番組の作り方は、６０年記念だからこそ、振り返るのではなく、チャレンジするという視点での取り組みでよかったと思う。最後の残り２分間の使い方は、予定通りだったのか、時間が余った結果なのかを知りたい。

（ＮＨＫ側）

音楽は音響効果の担当者がタイミングを合わせて“生”で出している。せりふについては、猛烈な練習を毎日して、本番を迎えた。平田さんは、劇団で鍛えられ、舞台経験も豊富な人で、高柳さんもＳＫＥ４８に所属しているのでライブなどで“生”に慣れている、そして名古屋のベテラン俳優の山田さんなどを配役した。今回は生放送ならではの臨場感を出すために、「ええがね！ボタン」という視聴者参加型のサービスを行ったり、観客を入れる形をとった。作り込み過ぎると、生放送らしさがなくなってしまうように考えていたが、落ち着いてドラマを見たいという意見が多くあれば、そういったドラマにもまた挑戦してみたい。最後の２分間は、ドラマが終わった出演者の素顔を見せて生放送の雰囲気を出そうと考えていた。

○　始まり方は新鮮で、本当に生放送番組かと思うほど出演者の演技がすばらしかった。特に、父親・母親・兄の３人のやり取りの場面は、細かいところまで行き届いていて完璧で、とてもおもしろかった。ただ、父親の幼少の頃の回想の部分はなくてもよかったと思う。兄役のカズ祥さんは、せりふがない場面でも、顔の表情やしぐさなど一生懸命に演じていて楽しませてくれた。スタジオとテレビ塔の移動も実際にあって、大変だったと思う。祖母役の山田さんが登場してからは、絶妙な名古屋弁での演技で、ドラマの雰囲気が温かくなったように感じた。ツイッターのお祝いメッセージの紹介や「ええがね！ボタン」については、視聴者も参加でき、生放送だからこそできることがうまく融合していたと思う。ただ、メッセージの紹介は、少なかった印象だ。もし時間が余っていたなら、会場で見ていた人たちの意見を聞いてもよかったのではないかと思う。今後もこのようなドラマが増えることを期待する。「本物を伝える、それがテレビだ」というせりふに、ＮＨＫの強い思いを感じた。

○　生放送でどのようにドラマを制作するのか興味を持って見た。制作スタッフと一緒に実験的な試みをしているような気持ちになっていた。スタジオに観客を入れて舞台のようにし、２つセットがあるのは想像の範囲だったが、離れたテレビ塔にも設定し、生中継していたので、時間を合わせたり、スイッチングなどが難しいだろう、成功し

てほしいという気持ちで、そのドキドキした感覚がおもしろかった。内容的には、あまり感情移入せず、コントの舞台を“生”で見ている感覚だった。いろんな場面の切り替えがありながらも、別のカメラが映り込まないところに感心したが、かなり綿密にリハーサルを行ったのだろう。ほかにも電話のやり取りの場面なども自然で、うまく合わせるのは、とても大変だったと思う。現場の緊張感が伝わってきて、楽しかった。平田さんと母親役の山口未知さんの演技がうまかったので、最後のほうには感情移入できた。

○　まず、「金とく」は、中部の“見たい”“知りたい”“行きたい”に応えるということが大前提のはずだ。そういった視点では、このドラマは何につながるのか疑問だ。そして、「金とくスペシャル」となっていて、この「スペシャル」も何を意味し、何を伝えたかったのかがよく分からなかった。各委員の話を聞いていると、チャレンジしているところを見せたかったのかと思うが、喜劇と捉えても中途半端なものだと思った。当日の展開がどうなるか分からないという前提で、「喜劇」とタイトルに入れたのかと思った。兵藤ゆきさんの演じたラジオのＤＪのコーナーも何を伝えたいのか分からなかった。「本物を伝える、それがテレビだ」というせりふは、当たり前のことなので、最後に何を言いたかったのか疑問に残っている。「金とく」は、とても好きな番組なので、“見たい”“知りたい”“行きたい”という趣旨をきちんとおさえた番組を作ってほしい。しかし、生放送のドラマに挑戦することを否定しているわけではない。コンセプトが「金とく」にふさわしい番組だったのかどうかが気になっただけだ。最近、地方局でもすばらしいドラマを作っているので、今後も果敢に挑戦してほしい。

○　生放送ドラマについては、幼少時になんとなく見た記憶があるので、当時のドラマをイメージしながら見たが、全く異なるものだった。本格的なドラマを生で放送すると思っていたので、やや戸惑いながら見ていた。黒崎アナウンサーの最後の発言や、実際にテレビ塔で結婚式を挙げた夫婦へのインタビュー、兵藤ゆきさんのラジオのＤＪのコーナーなどドラマの筋以外の内容を入れ込んで、ハプニング的なおもしろさを出そうとしたようだが、きちんと分けたほうが私たちの世代には分かりやすかった。最近、新聞でも、読者から「作り手の素顔が見たい」と寄せられ、署名原稿の記事が多くなっている。そういった意味で、作り手の姿も見せようとしたのかもしれないが、それはまた改めて別の番組で紹介すればよいのであって、今回限りにしたほうがよいと思う。ただ、ドラマ全体の出来栄えとしては悪くはなかった。テーマもおもしろかったし、何といっても高柳さんが、長いせりふを話し、涙も流すなどきちんと感情をこめた演技をしていて、熱演だったと評価したい。また、ドラマの仕立てとしても、平田さんが家からテレビ塔まで走っていく時間をうまく使って展開させ、内容的にも

この走って行く場面を中心に巧みだったと思う。録画で見てもはらはらした感じがしたので、生放送を見た人にとってはとても臨場感があったのではないか。ただ、声が聞き取りにくい点があったのが、少し残念だった。また、自宅とテレビ塔との距離の設定に違和感があった。生放送らしさがあってよかったと思うのはナイターの結果を紹介していた点だ。

○ ドラマの前半は、ドタバタした感じで、喜劇らしいおもしろさがなかった。父親がなぜあそこまで意固地になるのか理由が分からない、母親がキンキン話すのは生放送で緊張しているからなのか、喫茶店の常連客の設定などもあまりおもしろくないと思って見ていたが、祖母が幽霊になって出てくるところから、おもしろくなってきて、テレビ塔に向かって、平田さんが走り出したところからは引き込まれた。高柳さんが長いせりふを完璧に話し、視聴者の気持ちを引き込んでいたと思うので、相当演技力があると思った。特に、結婚式場での父親とのやりとりの演技はとてもよく、現実の話を見ているようで、自然でよかった。しかし、せっかくドラマのストーリーにのめり込んでいたので、最後は、「あんかけスパはパパの味」の演奏をじっくり聞いて終わりたかった。音楽がほとんど聞こえなくて、出演者やスタッフがはしゃいでいる感じがして残念だった。生放送ということで、出演者が緊張感を持って演じている、その緊張感に波長が合って視聴者が番組に引き込まれたのではないかと思う。そうであれば生放送ドラマはよい試みだったと思う。

（ＮＨＫ側）

「金とく」の趣旨である“見たい”“知りたい”“行きたい”にあてはめた場合、「生放送ドラマを一緒に作っているような感覚だ」という意見があったように、今回の挑戦的な試みに好奇心を持って見ていただき、大きな感動につながればと思って制作したのだが、すべての視聴者に大きな感動を与えることができず、力量不足だと反省している。しかし、まだまだテレビの可能性は無限に広がっていると思うので、今後もまた新たな挑戦をしていきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　４月１８日(金)のナビゲーション「どん底からはい上がれ！～ＦＣ岐阜・ラモス監督で変わるチームと地域～」は、地元のことがこのように取り上げられることは大変うれしく、内容としても大変よく作り込んでいた。今年１月から４月にかけての長期間の取材を凝縮し、大変濃厚な時間に感じる内容だった。インタビューを中心に、ラモス瑠偉監督の人柄や迫力が伝わってくるエピソードなどを交えたよい番組だった。一方で、インパクトのある監督がいるからこその難しさや、多くのＪリーグチームが抱えている経営の課題を鑑みたときに、ＦＣ岐阜の社長はＪ１、Ｊ２の中で最年少の経営者なので、課題や将来的な展望をはじめ、全国のプロサッカーチームが抱える問題との比較なども取り上げて、検証番組という意味あいの番組を「ナビゲーション」で期待している。

○　４月１８日(金)の金とく　あのころ　東海北陸で　～中部アーカイブス～「第１回白川郷　合掌造りの村の歳月」は、合掌造りの屋根のふき替えと、ふき替えを支援する「結」を中心に紹介していた。「アーカイブス」という名前のとおり、昔の映像を活用して、それぞれの時代背景を表し、うまくできていた。特に、初春に雪の上で、スキーのように降りて、かやを運ぶ「むかで」と呼ばれる作業は圧巻で、なかなか見ることができない映像だと思った。しかし、廃れていく様子や、御母衣ダムの建設で開発されていく姿など、昔の写真や映像などを使い、当時の時代背景も紹介しながら進めていく番組を想像していたが、番組の後半がほとんど「結」に関するものだったので、もう少し幅広く扱ってほしいと思った。前半の古い映像と「結」に焦点を当てたブロックの間に、平成２４年放送のアインシュタインの眼「白川郷」の映像を使って、合掌造りの構造についてうまく説明し、展開していく構成はよかった。

○　４月２５日(金)のピタ撮り　ＳＨＩＺＵＯＫＡ「富士山麓で“カワイイ”探し～動物写真家・松原卓二さん～」(総合 後 7:55～7:58 静岡県域)は、ディレクターが、旬な静岡の人に１日密着ロケをして、その人の素顔を伝えていくという３分間のドキュメンタリー番組で、静岡局の新しい取り組みだ。３分間で人物にせまるドキュメント番組ができるのだろうかと思って見たが、興味深い内容だった。人物についてもう少し知りたいと思ったものの、チャレンジとしてはおもしろいと思う。

○　連続テレビ小説「花子とアン」は、海外出張中の分は録画をしてまとめて見るほどで、毎朝大変楽しく見ている。

○ 「超絶！凄ワザ(すご)」について、前回の番組審議会で、前編・後編に分けず１回で完結させるほうが見やすいのではないかと発言したが、以降見ていたところ、改良を重ねたようで、違和感はなくなった。前言を撤回したいと思う。

○ 「超絶　凄(すご)ワザ！」の４月１７日(木)、２４日(木)「究極の反発力を目指せ」(前・後編）について、バネも輪ゴムも職人の技が感じられ、知識や経験を基に作っていく点がとてもおもしろいと思った。バネのほうが負けたが、バネを留めているネジが折れてしまったわけなので、もしネジが折れていなかったら結果は異なったのではないかと思った。５月１日(木)、８日(木)「最強の紙箱を目指せ」(前・後編）については、段ボールは、補強の段ボールを入れることが簡単で、それに対し、箱は丸く補強しにくいので不公平ではないかと思いながら見ていたところ、やはり段ボールの勝利だった。形の面では、丸い紙箱のほうが使いやすく、装飾しやすいので、商品化する際には、こちらのほうが有利だろうなどと思いながら、興味深く見た。こういったおもしろいテーマを見つけるのは、結構大変なのではないだろうか。“ネタ切れ”しないように、今後もがんばってよいテーマを探してほしい。

○ 土曜ドラマ「ロング・グッドバイ」は、レイモンド・チャンドラーの原作を、日本に舞台を置き換えてドラマ化しているが、チャンドラー作品に影響されてすべてが大げさに見えた。場所の設定も日本というよりも、香港や 1930 年代のシカゴのギャングの映画を真似しているようにも感じて、事件のひとつひとつも極端でついていけない感じだった。２回目からはストーリー展開に意識が向いたので、あまり気にならなくなったが、全体として色彩が濃く、女優の衣装や化粧なども濃すぎるような印象を持った。チャンドラー作品を日本版にするなら、ストーリーだけではなく、衣装や道具、色彩も日本的なドラマに仕上げれば、見やすかったのではないか。

○ 東京電力福島第一原子力発電所の事故に関して、ＮＨＫはこれまでも、いろ　いろな角度からシリーズとして取り上げており、毎回見ているが、４月２０日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　廃炉への道　第１回「放射能“封じ込め”果てしなき闘い」(総合 後 9:00～10:13)も大変な力作だったと評価したい。最近、地下水の汚染水漏れなどのニュースが毎日のように報道されているが、一体どういう作業をしているのかよく分かっていなかったが、廃炉とはどういうことなのかを分かりやすく紹介していた。廃炉に向けて、準備、燃料デブリの取り出し、処分・解体という３段階があり、４０年間かかるということだ。まだ燃料デブリの取り出しの準備作業中だが、その前に格納容器の補修から始めなければならない。強い放射能の中での作業で、メーカーや作業員たちが大変苦労している。メーカーは、これまでに例のないいろいろな機器

や作業の開発などに取り組んでおり、「プロジェクトＸ～挑戦者たち～」で紹介されていたような開発過程の５倍も１０倍も大変な作業だということが大変よく分かった。こういう苦労を乗り越えてこそ日本の技術は進歩していくのかと思った。ただ、その半面、こういったメーカーの中には、もともと原子炉を作った会社もある。作ったときに経済活動として稼ぎ、この事故で、直すためにまた稼ぐ。つまり、国の予算でまた新しい事業を確保して、今後４０年間も続くというのは釈然としない。廃炉作業は、約２兆円かかると試算していたが、果たして２兆円で済むのだろうか。２兆円と聞くと大きすぎて実感が湧かないので、どの程度の金額なのかもう少し具体的に分かると、国民ひとりひとりが今回の事故によるさまざまな問題を解決するために負担していることが分かったのではないだろうか。アメリカのスリーマイル島の事故についても取材し、記録ビデオ1,000本を入手して、事故後の処理作業を検証していた。これによると、スリーマイル島は原子炉１基のメルトダウンだったが、福島は３基の事故なので、世界で初めての大変な廃炉作業となる。いかに福島の原発事故が大変だったのかが、スリーマイル島の事故との比較で大変よく分かった。これまでのＮＨＫの福島原発に関する取り組みも評価しているが、今回も大変よい姿勢や内容だった。引き続きＮＨＫの熱意と努力に期待している。

○　５月１１日(日)のＮＨＫスペシャル“認知症８００万人”時代「行方不明者１万人～知られざる徘徊の実態～」は、大変驚いた番組だ。大変なテーマに正面から取り組む姿勢は、よい試みだったと思う。放送後、行方不明者の家族が見つかった話があったが、７年間の生活費や介助費用を請求されるかもしれないという報道があった。その是非に関しても、番組で取り上げてほしい。行方不明者１万人という事象などまだまだ知らないことがあると思う。こういった知られていない真実を丁寧にあぶり出す番組を、これからも期待している。

○　ＮＨＫスペシャル“認知症８００万人”時代「行方不明者１万人」について、放送の翌日にこの番組で紹介された女性の身元が分かったという知らせを聞いてうれしかったが、どうして７年もの間見つからなかったのか疑問に思った。それには個人情報保護法など難しい問題があると思うが、番組で紹介したことで見つかったという事実に、これからもこのような番組が増えることを期待したい。

○　ＮＨＫスペシャル“認知症８００万人”時代「行方不明者１万人」は、体験しないと分からないようなことも示していて、番組を通じて広く知ってもらい、社会の問題として捉えていくことは、とても意義深いと思った。７年間も身元不明だった人、遺体になって発見された人、平成１９年１２月に愛知県大府市で認知症の男性がＪＲの

線路で列車にはねられて死亡し、遺族に賠償責任を認める判決が出ているが、その事例も含め、最近は、法律上、社会の成り立ちとしてよいのかと思えるような現象が起きていて、社会で見守るシステムづくりが必要だと誰もが実感できるような内容になっていた。今後、現状に合った温かい見守りシステムのような要望も強くなるだろうし、システムづくりに携わっている行政も真剣に取り組まなければいけないと思っただろうし、大変よい内容だった。

○　ＮＨＫスペシャル“認知症８００万人”時代「行方不明者１万人」は、本当にこのような事象が起こっているのかと驚いた。１万人という数字は、ＮＨＫの独自調査によってその実態が明らかになったということで、ＮＨＫの取材力に改めて感心した。事件・事故ではないという前提での警察の捜査方法や個人情報が壁になっているという問題も指摘し、また、北海道釧路市では、個人情報の壁がありつつも、工夫して取り組んでいる事例を紹介していた。今後、ひとり暮らしが増加する大都市ではますます高齢化が進むと予測されていて、さらに、徘徊(はいかい)中の踏切事故で鉄道会社から損害賠償請求されるというようなことが起こる時代にきているので、今後の取り組みにどういうことが必要で、行政には何が必要なのか、その解決策はどういったことが考えられるのかという視点からも、継続的に番組を制作してほしい。

○　４月２３日(水)歴史秘話ヒストリア「もうダメ武将とは言わせない～官兵衛ジュニア　長政の苦悩～」は、黒田長政のことというよりも、むしろ黒田官兵衛が長政をいかに育てたかという内容だった。大河ドラマ「軍師官兵衛」を放送しているので、主人公についての理解を深めるうえでも、意味のあるタイムリーな企画だったと思う。しかし、２点について分からなかったので、掘り下げた解説がほしかった。官兵衛が「匹夫の勇」と評した長政に 1589 年に家督を譲った。長政が宇都宮鎮房に和睦すると見せかけてだまし討ちをし、家臣からの信頼も得られていない時点なのに、家督を譲る決断をした理由とは何か。これは中心的なテーマだと思うが、あまり描かれていなかった。また、黒田家の強力な家臣団を描いた「黒田二十四騎図」の中に後藤又兵衛が出ているが、後藤又兵衛は大坂の陣で黒田家と敵対して豊臣方についたにもかかわらず、なぜ「黒田二十四騎図」の中に描かれているのか、疑問に思った。

○　「タイムスクープハンター」の４月２６日(土)「解明せよ！戦慄の超常現象」と５月３日(土)「追跡！美男子コンテスト」を見た。放送開始から貫いている時代考証の再現性にますます磨きがかかり、江戸時代、明治時代ともに、それぞれの市井の人々の暮らしぶりや風俗を如実に映し出している点に改めて目をみはるものがあった。特に、「追跡！美男子コンテスト」では、妓楼の女主人や店の女の着物や顔色、髪のほつ

れ方や白塗り化粧のまだら加減に、すえたような汗臭ささえ伝わってくるような臨場感を覚えた。次のシーズンぐらいから海外の内容も取り上げてほしい。臨場感あふれる、大変おもしろい番組だった。

○　４月２９日(火)の「相葉雅紀のＮＦＪ」(総合 後 6:10～6:44)は、取り上げていたのが、単なるグルメ情報ではなく、番組タイトルどおり食に関するトピックスにジャーナリズムを感じさせる、質の高い内容だった。出演者の選定に疑問を感じる点もあったが、小山薫堂さんの落ち着いた見識あふれる話によって、まとまり感が出てきた。小山さんの「食だけの話題で番組が成立するほど、日本の食文化の豊かさをひしひしと実感した」という話に強く共感した。オリジナリティーにあふれ、話題の選択も魅力的だったので、今後、継続的に放送してほしいが、食を取り巻く課題が多く内容的に高度になった場合、メインキャスターの力量にやや不安を感じた

○　５月２日(金)ラストデイズ「忌野清志郎×太田光」(総合 後 10:00～10:48)を見た。忌野清志郎さんの表現方法が、昭和６３年ころから、社会的なこともストレートに歌うように変わった。なぜそうなってきたのかについて、彼の生い立ちや海外のアーティストとの交流の様子などを紹介し、人物像について思いめぐらすような流れになっていて楽しめた。人生をたどっていくところがとてもおもしろく、さらに彼の内面も想像していくおもしろさがあった。爆笑問題の太田光さんの案内で解き明かしていくという内容だったが、彼の表現者としての悩みについても分かった。太田さんは「野暮ではあるが、言葉をオブラートに包んだり何かに例えたりし、作品性を高めていくのが表現者としてまっとうなのではないか」という思いが強いようだが、人それぞれ表現方法はいろいろあるのだと考えさせられた。ますます忌野清志郎さんのことを好きになる興味深い番組だった。

○　５月４日(日)の感涙！よみがえりマイスター「人生をともに歩んだ腕時計」(総合 後 4:47～5:30)を見た。番組の構成は、民放番組そっくりだったが、マイスターである時計職人に密着取材した映像には、職人の技能の高さや目をみはる技、仕事に真摯に取り組む姿勢、人柄、志など、感銘を受けるシーンが随所にあり、興味が尽きなかった。また、感動のあまり声が出ないという時計の持ち主の姿から、職人の修復したものが物にとどまらず、その人の思い出や気持ちであるとストレートに伝わってきた。職人技の単なる紹介以上に、職人として働くことの意義や卓越さを追究することの価値が、ナレーションや演出を介さずに、直接伝わってくるようですばらしかった。ほかの回を見ていないので、今回に限って言えば「プロフェッショナル　仕事の流儀」とともに、良質な職業観を育む、大変よいバラエティー番組だと思った。

○　５月５日(月)の世界遺産ドリーム対決！「地球・生命の輝き　神秘の海ＶＳ．驚異の陸」(総合 後 10:00～10:48)は、海と陸が対決するという題名で、興味を持って見た。サンゴが産卵する瞬間やアジが集団でサメを襲う映像は圧巻だった。海をセイン・カミュさんが、陸をアンタッチャブルの柴田英嗣さんが世界遺産の貴重な映像とともにプレゼンテーションしていたが、２人とも映像を生かした的確なコメントで、番組が盛り上がったように思う。「こどもの日」ということもあって、審査員に子どもたちが入り、素直な意見が聞けたのもよかった。巨大動物の祖先についても、象の祖先は太った猫ぐらいの大きさだった、クジラは陸で足を持っていたなど、驚くような事実を映像や化石で紹介していて、興味深く、もっと見たいと思った。最後に審査員のハートをつかんだのが海だったことは、個人的に、特によかったと思った。

○　５月８日(木)のＬＩＦＥ！～人生に捧げるコント～「シリーズ２　＃５」は、衆議院総務委員会での国会議員のＮＨＫの３つの番組が低俗だという発言を受けて、いわばパロディーで返すような内容だった。ＮＨＫではなく内村光良さんの企画なのかもしれないが、大変興味深く見た。視聴後、この発言の議事録も見たところ、実際の発言をパロディーにしていて、相当作り込んでいるのだと思った。ただ、そのうえで改めて、エンターテインメントをＮＨＫが制作する意義を明示する必要があるように感じた。ぜひ今後、何らかの公式な形で示してほしい。個人的には、この番組は楽しく、こういった番組はある一定数は必要だと考える。特に、民放が視聴できない地域に娯楽を届けるという意味でも意義があり、今後に期待したい。

○　４月２５日(金)の団塊スタイル「今明かす５５歳空白の時」は、谷村新司さんが、５５歳の頃、仕事も行き詰り、帯状ほう疹に悩まされていた。その時、妻の「今までの生き方が全てではないかも」というひと言で、３０年間続けてきたコンサートツアーなどの活動を中止し、生き方を見直したというもので、大変ためになる番組だった。私自身、谷村さん夫妻と付き合いがあり、中国の上海音楽学院の教授に就任し、月に１回行っていたことは知っていたが、その背景にこのような人生の転機があったとは知らなかった。谷村さんと話していると、言葉の語源について詳しいと感心させられているが、当時一生懸命に勉強していたことが、番組でよく分かった。司会の国井雅比古さんの「定年退職後、第２の人生をどのような心構えで臨むべきか」との問いに対する「他人と比べることはやめ、自分の心が喜ぶことを見つけることが大切だ」という答えは、まさに至言だと思った。また、上海音楽学院の文化祭の準備の際、生徒が「音響や照明の装置が間に合わなければ、“生”で歌えばよい」という発言を聞いて、その場にあるもので行えばよいのだと気づかされたというエピソードは、自分自身の行動を振り返る意味でも大変有意義だった。

○　４月２６日(土)のＥＴＶ特集「辞書を編む人たち」は、最近辞書を作る作業が大変地道で、長時間かかる大変な作業だと小説や映画などを通じて知られてきているが、この番組でもよく分かった。辞書に掲載する新語採集のために、何をしていても言葉のことを考え、ひとつひとつ採集して、それをどういう意味づけにするのか、また、新たに追加すべきかどうか検討するという作業を連日行っていることが分かった。インターン実習に来ている大学院生が、女性雑誌から言葉を採集し、自分で語釈を書いて編集長に見せるという具体的な作業が紹介されて、大変おもしろかった。最近、紙の辞書はあまり人気がなく、電子辞書の利用が増えてきているようだが、４回目の改訂を行う「大辞林」も電子版を主軸にするという結論に至った。その重要な経営の会議をよく取材させてもらえたと思った。新聞業界も紙の新聞がいつまでもつのか、似たような状態に陥っているので、ひと事ではないと感じた。こうした地道な作業が基になって電子情報にもなっていくわけで、その基になる作業をきちんと取材して紹介したことは、大変よかった。

○　５月２日(金)グレーテルのかまど「“端午の節句”のかしわ餅」を見た。端午の節句は、現在のように男の子の祭りではなく女性のものだったことなど知らなかった話をとても分かりやすく説明していた。出演の瀬戸康史さんは、品よく、伝えるべきメッセージがきちんと伝わってきて、おもしろい試みの番組だと思った。

○　葛飾北斎に大変興味があって、５月４日(日)の日曜美術館「世界を驚かせた　北斎漫画」を見た。北斎の人生については、もっといろいろな描き方があるように思う。亡くなる直前まで残した俳句もあるので、そういった面からももう一度見つめ直すとよいだろう。美術の面だけの北斎という描き方ではない、違ったジャンルの北斎の人間像が取り上げられた番組を制作してほしい。北斎漫画を取り上げる、５月１６日(金)の「金とく」がどのようになっているのか楽しみだ。

○　４月２９日(火)のＢＳ１スペシャル「Ｂｒａｋｅｌｅｓｓ～ＪＲ福知山線脱線事故９年～」(ＢＳ１　後 10:00～10:48)は、事故の被害者や関係者、ＪＲ西日本の元運転士などの証言を軸に、現代社会が抱えている課題を検証する内容になっていた。時間が経過してからの証言なので、とても冷静で、深い意味を感じる証言を引き出していて、社会の課題もよく提示していたと思う。特に、速度オーバーで事故を起こした運転士について、事故直後は運転士が悪いとしか頭になかったが、時間がたって、なぜそのような運転をしてしまう状況だったのかを考えるようになったそうだ。事故を起こすまでの各駅での時間の遅れがどういった状況で起こっていったのか、イラストを使うなどして、運転士の心境を分かりやすく編集していた。作家の柳田邦男さんが、

「経済成長や企業の収益を上げるために、コスト効率を上げることが重要な要素になり、いつの間にか人間が見えなくなっている。“日本病”のツケが事故という形で戻ってきた。日本の大企業に見られた共通の問題点で、ＪＲ西日本だけが特殊ではない」と最後に締めくくっていたが、大変考えさせられる、よい内容だった。イギリス・オランダ・デンマーク・アメリカの国際共同制作の番組だが、それぞれの国でどのように放送されたのかが大変気になっている。

○　４月２５日(金)と５月２日(金)の「Ａ☆Ａショー(アニマル☆アテレコショー)」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:50～11:00)を見た。イギリス・ＣＢＢＣの子ども向けの大変おもしろい番組だった。よくあのような発想が出てくるものだと感心する脚本だった。さらに、日本語の吹き替えも５人の声優がそれぞれ動物に合った声で、大変おもしろかった。この番組は子ども向けにもかかわらず、放送時間が夜の１０時５０分からだ。１０分間の番組なので、穴埋めのように編成しているのかもしれないが、もっと見やすい時間帯に変更し、子どもにも見せたらよいと思う。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

平成２６年４月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会（議事概要）

４月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、超絶　凄(すご)ワザ！「前人未到の“切れ味”を目指せ」(前・後編)について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	村本　淳子	（公立大学法人三重県立看護大学理事長・学長）
副委員長	金森　昭夫	（中日新聞社取締役総務担当）
委員	秋元　祥治	（特定非営利活動法人　Ｇ－ｎｅｔ代表理事）
	杉浦　宇子	（弁護士）
	田中　章義	（歌人・作家）
	野田　雄一	（富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授）
	松本　耕作	（加賀味噌食品工業協業組合理事長）
	森棟　公夫	（学校法人椙山女学園理事長、椙山女学園大学学長）

（主な発言）

＜超絶　凄(すご)ワザ！「前人未到の“切れ味”を目指せ」(前・後編)
（総合　４月３日(木)、１０日(木)）について＞

○　両チームが対決するか、あるいは競い合って与えられた課題に対して技術を磨くかという点では異なるが、第一印象は、問題になった民放番組に似ていると思った。ハイスピードカメラによる映像、刃の拡大や、刃が砕け散ってパイプが折れるシーンはあまり見たことがなかったので、圧巻だった。両者とも刃の形状が同じように収れんされていくこと、素材や技術によって刃が欠ける限界に挑戦していると描きたかったのだろうが、物理的な事象に対して、もう少し専門家のコメントがあったらよかったのではないか。とがらせると潰れないということはうまく説明していたが、もう少し深めると、異なった側面が見えたのではないかと思う。今回は、職人の鍛造技術と、企業の機械生産に基づく現代技術という明確に対比する軸があって、興味深く見たが、今後“凄ワザ”を競う観点で、表面的な技術以外に、別の意味での対立軸があると、見やすくなると思う。「満足したら職人はそこで終わりだ」という言葉に感動した。

気になった点としては、前編・後編に分かれていたが、１回で完結させる方が見やすいのではないか。例えば、再放送のときは、２回分まとめて放送するなどしてもよいと思う。視聴者の興味を引くスリリングな語りは、内容に合っていたと思うが、表現が強過ぎるように感じた。

○　ものづくりの現場、技術のすごさや底力にスポットをあてるという番組のコンセプトはとてもわかりやすく、視聴者にも受け入れられやすいものだと思った。その技術力が極められたときにどのように社会に役立つのかという視点があれば、より感情移入して見ることができ、さらに対決にのめり込んでいけると思う。モニター報告では厳しい意見があるが、「短歌絶叫コンサート」などを行っている歌人の福島泰樹さんを語りに起用した意外性が大変おもしろいと思った。ホームページなどで人物紹介をすれば、また異なった印象を与えることができると思う。前・後編に分けている点については、１回で完結させるほうが今の時代のスピード感に合うように思うが、制作者の考え方を聞きたい。

○　最初の印象は、民放番組と似ていると思った。ものづくりの技術にフォーカスをする番組なので、堅苦しいものだと思っていたが、バラエティーの要素もありながら、ものづくりの技術に触れられて、大変楽しく見ることができた。挑戦者の会社や技術者をコンパクトにまとめて紹介していて、そこにテレビの強みを感じた。中部地方の中小企業は、高い技術力があるが、それがどういうところでどのように役立っているのか伝わりにくい。鉄パイプを切断する意味を紹介する中で、こういう技術を持った中小企業が大事なのだと気づかされて、大変よかった。今後に向けての期待を込めて提案するならば、視聴ターゲットが４０、５０代の男性だと聞いたが、ターゲットを絞り過ぎた演出のように感じた。女性にも見やすいような一定の配慮があってもよいのかもしれない。また、前・後編の構成ではなく、合わせて１回にしたほうが見やすいと思う。ツイッターなどを活用して、広く発信していくことはよいと思うが、ホームページの情報が少ないのが残念だ。今回、対決した企業や職人の会社名や個人名すら載っていないし、再放送分として全く同じ内容の番組概要が何度も掲載されていて、見づらい。技術の高い中小企業の存在を、堅苦しくなく、エンターテインメントとしてわかりやすく伝えているという意味においては、とてもすばらしい番組だと思う。今後の展開を期待し、これからも見たいと思う。

（ＮＨＫ側）

かつての民放番組に似ているという反響があったが、既存の商品で競い合うのではなく、それぞれの超絶の技術を持った人

が、今までにないものに挑戦をしていくという形をとっており、その過程で新たな可能性や技術の革新につながり、ものづくりの奥深さを追求していければと思う。さらに番組をブラッシュアップして、きちんと表現していきたい。前・後編に分けて見づらいという指摘について、パイロット版では、２５分間で完結させたが、それでは、職人や技術者の人柄や背景などが十分に盛り込めなかったこともあり、前・後編という形をとっている。前編・後編それぞれで満足感をきっちり持ってもらえるように追求していくつもりだ。また、テーマによっては、前編・後編それぞれの対決があって２番勝負というような形で、対決の内容などを工夫しながら、それぞれで満足いただけるようにしたいと考えている。語りについては、個性的な人を起用して、番組のイメージとして骨太な技術を紹介しようとしている。番組モニターをはじめ視聴者の反応も考慮し、よりよい形を追求していきたい。

○　タイトルロゴが、印象的で、特に文字がおもしろい字体だと思う。刃物工業メーカーの報告会で「先入観や既成概念を捨てることを学んだ」という言葉に感銘を受けた。一方、炎やスモークが出てくるセットは、ここまで必要なのだろうか、むしろシンプルなほうが伝わりやすいのではないだろうかと思った。さきほどの言葉のように、番組を作るときも“先入観にとらわれない”新しい方法を開発し、別の見せ方を考えていってほしい。後編の冒頭に、前編のダイジェストがあるが、長く感じた。既視感が出ないよう、もっと別のメッセージを伝えるようにしたほうがよいと思う。語りについても、人物の背景を知っている人には違和感がないのかもしれないが、あそこまですごまなくてもよいのではないかと感じた。また、本当に“凄ワザ”なのかと疑問に思うところで、「凄ワザだ！」というコメントが入っていて、気になった。今後、全国のさまざまなものづくりを取り上げていくと思うが、失ってはいけないものを残すきっかけになればよいと思う。

○　鉄パイプを刃物で切るというテーマで、大変興味深かった。企業と職人との対決で、負けた場合、どのようになるのかについても強い関心を持った。冒頭のトマトやお札を切ったときの切れ味のすごさもおもしろかったが、対決の過程で、包丁職人は床にチョークで図面を描き、また工業用刃物メーカーはいろいろな種類の金属の板で、試作品を作っていくというように、アプローチ方法が全然違う点などじっくりと見た。工業用刃物メーカーは、切り口がきれいで、刃が欠けていなかったので、私は引き分

けだったと思うし、両者にとってよい結果となっていて、ひと安心した感じだ。包丁職人の刃が落ちた時の細かい揺れの映像は、とても臨場感があった。私は２週に分けて見たが、大変おもしろかった。ただ、要望したいのは、子どもが見ることができない時間帯なので、子ども用に編集し直して放送してほしい。日曜日の「ダーウィンが来た！生きもの新伝説」は、よい番組だと思っているが、かねてから、生きもの以外のものもあればよいと思っていた。たとえば隔週で、「超絶　凄ワザ！」の技術的な内容を取り入れて、３０分ほどにまとめて家族で見られるような番組があればいいと思う。子どもたちにも関心を持って見られれば、まさに技術立国につながっていくと思う。

○　対決番組では、多少あおったり、興奮させるような語りや進行、また暗めのセットに明るい照明を使うというのは、ありがちな演出だが、作業の場面をだらだら見せるよりも、必ずしもいけないとは思わなかった。民放でよくある対決番組は、過剰に絶叫し、興奮をあおるようなカット割り、効果音を使い過ぎるなどくどい感じがして嫌いだが、今回の程度なら、許容範囲だと思った。ただ、対決させる番組は演出がパターン化されているようなので、新しい手法を取り入れ、工夫すればよくなると思う。鉄パイプを切るという課題が、どれほど難題なのか一般的にわかりづらい。斬鉄剣があるなら、切れるのではないかと思いがちなので、番組の導入部分で、課題のハードルの高さをわかるようにすればよいと思う。市販の菜切り包丁でテストし、刃が欠けるのを見せていたが、専門家のコメントなどがあれば、さらに実感が持てたのではないだろうか。両者ともに、すごい技術を持っているのだと思いつつも、見応えがあったのは、ひとりで黙々と鉄を打っている職人で、映像としてその姿はすごみがあって、印象がとても強かった。それに対して、刃物メーカーの取り組みは、工場の内部が撮影しにくかったせいなのかもしれないが、やや印象が薄かった。ただ、アプローチのしかたを対比する点ではよく描かれていた。職人の鍛造における自信やプライド、まず初めに刃物の形状に着眼するところなどはとても興味深かった。２週に分けた場合、前週までの記憶を戻すために、同じ映像を見せるというのはわかるが、もう少し短くてもいいと思う。

○　ともすれば硬い内容になりがちな題材を、極めて軟らかい形式で紹介していてよかった。ものづくりにかけるいろいろな人たちの努力や苦労がよく表現されていた。演出のしかたについて、いろいろな意見が出ているが、内容的には大変よかった。民放では、派手な演出をしているが、今回は、かろうじて許容範囲ではないかという印象だ。なぜ、鍛造で有名な地方ではなく、福岡の八女の職人を選んだのか、また、メーカーは、工業用刃物をデザインして加工する会社だが、素材そのものをどのように調

達しているのか、また、最後に超硬合金に切り替えていたが、その経緯などがわからなかった。今回、切り口が丸に近いという条件だったので、鍛造職人が勝利したが、どちらが勝った負けたではなく、やはりＮＨＫの番組で対決するのであれば、なぜこういう結果をもたらしたのかを分析、判定する審判のような第三者の専門家が、最後にコメントを付ければ､おもしろい中にも少しためになる要素が加わるのではないだろうか。今後、番組の締めくくりのしかたを検討したらよいと思う。後編冒頭での前回のダイジェストが長く、もったいない感じがした。今回は、負けたほうをうまくフォローできる展開でよかったが、今後、対決する番組だけに、負けたほうに気を遣いすぎて、対決の結果があやふやになってしまわないように、きっちりと作っていってほしい。

○　アプローチのしかたが異なるが、それぞれの手法で、これまで蓄積してきたノウハウや経験を生かしながら、いかによいものを作り出すのかに注力し、自分の力の限界に挑戦している姿が描かれていて、勝敗の結果よりもすばらしいことだと思った。持っている力の限界を超えるためには､どういったことが必要なのかについても感じられ、大変興味深い内容だった。対決に関わっていた期間、本来の仕事がストップし、その間の収入にも影響があったのではないかと気になったが、お金ではなく、自分の能力を試すというロマンのようなものも感じられた。

（ＮＨＫ側）

　スタジオのセットについては、ものづくりの現場の臨場感や、緊張感を伝えたいと考え、実際の工場を借りて撮影している。対決のバリエーションによって、変わることもあるので、いろいろな形でブラッシュアップし、よりよい形にしたいと思う。専門家のコメントは、時間の都合で十分に紹介しきれなかったが、判定の場に来てもらっているので、今後、適切に紹介し、視聴者の皆さんが納得できる形にしたい。ハイスピードカメラを駆使して、技のすごさをいかに伝えるか試行錯誤している。これからも楽しんでいただけるように、改善、努力していく。

＜放送番組一般について＞

○　３月１４日(金)の金とく「証言　ビキニ事件　～６０年　語られなかった思い～」は、実際にビキニ事件で被ばくした人のその後の生活、当時の地域の人々の反応、そして、６０年たって、現在どのように地域で扱われているのかなどが、大変よくわかった。あわせて、感銘を受けたのがホームページの構成だ。「東京都立第五福竜丸展示館」の紹介なども掲載され、親切ですばらしいと思う。また、静岡局に特設ホームページがあることも知ったのだが、ビキニ事件について、番組を放送するだけでなく、過去の映像や文章を掲載するということは、事件を風化させないという意味において大変有意義だと思う。番組、ホームページともに、原発問題とは同一視せず、客観的に、かつ適切なスタンスで説明していることもよかった。

○ ３月２４日(月)の「ゆめうつつ一第４回」(総合 前1:55～2:02)は、内藤啓史アナウンサーのすばらしい活躍ぶりを見て、先月に引き続いて発言したい。内藤アナウンサーのさらなる活躍と、続編も期待している。こういった実験的な番組は、さらなる新しいチャレンジと人材の育成につながると思うので、引き続き取り組んでほしい。

○　４月８日(火)～１１日(金)の「ニュース富山人」では、来年に北陸新幹線が開通するのに当たって、北陸新幹線の路線を上空から映す「新幹線空撮シリーズ」を放送していた。上空からの富山県の位置関係がよくわかり、トンネルが多いのは雪が多いからなのだと実感した。せっかくなので、北陸新幹線開通後、新幹線の車内で、例えばトンネルの中にいる時にどこを通過しているかよくわからないので、「今こういうところを通過している」とわかるように、上映するなど活用できればよいと思う。

○　４月１１日(金)のナビゲーション「賃上げの春　社長たちの選択　～中小企業とアベノミクス～」は、中小企業の社長たちの思いが伝わってきて、涙を流す場面も印象的だった。働く人の７割が中小企業だということで、その中小企業の社長たちが今どんな思いでいるのかを丁寧に取り上げていくのは必要なことで、中小企業とアベノミクスに真っ向から向き合った番組づくりはとてもよかった。中小企業の声がもっと多くの人たちに伝えられ、本当にこれでよいのだろうかと考える契機になればよいと思った。

○　４月１１日(金)の金とく「やっほー！日本アルプス　立山　１３００年の祈り　～早春の芦峅寺集落～」を見た。出演者のＫＩＫＩさんが出過ぎず、富山県立山町の芦

峅寺の集落の人たちに寄り添いながら、祭りや行事などを紹介していて、よい案内役になっていた。美しくも、厳しい自然の中で、淡々と続く日常生活をうまく取り上げ、布橋灌頂会(かんじょうえ)や「おんば様」の行事、それらを営々と続けている地域の人にスポットを当てている点がとてもよいと思った。特に、山岳ガイドの役割について、山を案内するだけでなくて、神と仏の言葉を伝える意味で「中語」と呼ばれ、その地域の伝承なども伝えるということを初めて知った。

○　金とく「やっほー！日本アルプス　立山　１３００年の祈り」は、映像がきれいで感心した。春の山開きや「おんば様のお召し替え」など、ちょうどよいタイミングでの企画と取材の番組だった。伝統的な熊猟、山岳ガイドによる立山信仰の歴史や宿坊料理など、盛りだくさんの内容で、芦峅寺の集落を紹介していた。ただ、当時、山は女人禁制だったことについての事由説明や、布橋灌頂会では、僧侶に導かれて「うば堂」まで行ったと紹介していたが、昔は神仏混交だったことなど、もう少しわかりやすい説明がほしかった。黒崎めぐみアナウンサーの体当たりの取材はいつも敬服に値する。

○　２月２８日(金)のＮＨＫスペシャル「聞いてほしい　心の叫びを～バス放火事件被害者の３４年～」の再放送(４月９日(水) 総合 前 1:25～2:14)を見た。新宿バス放火事件の被害者が３４年間、どのように生きてきたのか、また家族との間にどういったことが起こっていったのか、心の叫びや自分自身と向き合う日々、人と出会うことで生まれる心の変化を追っていた。生きるということの意味を考えさせられる内容だった。さまざまな思いを抱えながら生きていく生の被害者の話が聞けたが、どんなに苦しい思いをしてきたのか、事件は忘れ去られていくのかといろいろな思いを抱きながら見た。長い間取材した記録のような番組だったが、こういった記録番組は必要だと感じる内容だった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「聞いてほしい　心の叫びを」については、被害者の杉本さんが名古屋在住ということで、名古屋局のディレクターが２年ほど前から取材を続けていた。非常に重い話だが、最近、無差別通り魔事件などが頻発しているので、ＮＨＫとして今伝えるべき内容だろうという判断から放送に至った。無差別通り魔事件は、起きたときはメディアも大きく報道し、特異な事件として伝えるが、その後被害者の人が、報道されたことによって傷をいっそう深めてしまうという現実もあると、

取材をしながら思い知らされることもあって、そういう意味でも今回の番組では、誠実に杉本さんの言葉をそのまま伝えようという姿勢で編集した。「わかりにくい」という視聴者の声もある一方で、「身にしみた」、「自分の問題として考えられた」という声もあった。

○　ＮＨＫスペシャル　人体　ミクロの大冒険について、３月２９日(土)プロローグ「細胞のミラクルワールドへ」(総合 後 9:00～9:49)、３月３０日(日)第１回「あなたを創る！細胞のスーパーパワー」、第２回「あなたを変身させる！細胞が出す“魔法の薬”」、第３回「あなたを守る！細胞が老いと戦う」を連続で見た。テーマでまとめてシリーズで放送することは、とてもわかりやすくてよいと思う。人間が形成されるところから、誕生、成長、老いまでを時系列で進め、それぞれの回に、最新の研究を紹介し、解説がとてもわかりやすくて、おもしろかった。演出家の野田秀樹さんと京都大学教授の山中伸弥さんの進行もよく、特に、山中さんの語りや説明から、人柄や研究に対する真面目さがひしひしと伝わってきた。また、とても比喩が上手で、ＤＮＡを芝居の台本に例えたり、オキシトシンは、思春期に一斉メールを脳から送り、受けても必要なところが受け取っていくといった説明など、とてもわかりやすくてよかった。細胞自体がひとつひとつ生きていて連携を取って有機的につながっているという山中さんの説明は、愛情のある表現で、とてもわかりやすくて興味深かった。人間は子孫を残すことが最大の使命で、脳の神経細胞は１０代で完成し、この年代を過ぎると、勉強しても成長せず、老いていくだけなのかと思ったが、細胞には経験を反映する仕組みがあるという救いになる話もあり、安心した。細胞は部品ではなく、とても神秘的なもので、自分の存在がいとおしいと感じられるような解説や語りで、とてもよかった。

○　４月５日(土)のＮＨＫスペシャル　人体　ミクロの大冒険　第２回「あなたを変身させる！細胞が出す“魔法の薬”」(総合 後 9:00～9:49)では、思春期は人間にしかなく、ホルモンの効果で、体全体に変化をもたらすという話の中で、オキシトシンというホルモンの役割について丁寧に説明していた。陣痛を引き起こすことをはじめ、母性愛や父性愛、愛着行動、友情、信頼、人との絆などにも働いているということで、特におもしろかったのは、人間の感情はオキシトシンの化学反応によって支配されている面が大きいということだ。そうすると、その化学反応で人間の感情は決まっていて、人間は自分自身で何も持っていないのではないかというわけだが、最近はオキシトシンをコントロールすることによる自閉症の治療などの研究が進んでいるということだった。「生物にとっての最大の役目は子孫を残すことである。」という言葉が印

象的だった。子孫を残すという基本の役割のうえで、オキシトシンが愛情などの感情をコントロールするとのことだが、友情や信頼、人々の絆などの人類愛も生物の元に返れば子孫を残すための自然の目的の一部になっているのではないかと思い、すべてが不思議に思えてきた。

○　ＮＨＫスペシャル　人体　ミクロの大冒険　第２回「あなたを変身させる！細胞が出す“魔法の薬”」は、細胞の動きがわかる大変すばらしい映像だった。自分のことなのだが、自分のことではないような感じがして、細胞が人間の人生をいかに作っていくのかに迫っていてよかった。また、人間をオープンシステムで捉える際に、細胞、器官という捉え方をするのだが、その際の細胞の捉え方とは少し異なって、細胞から人体を見た場合に、その見方によって、ずいぶん違うことを知ることができ、すばらしい内容だった。細胞は何を考えているのか、細胞ひとつひとつに役割があるなどといった話は、自分が生理学や解剖学を学んでいたときには考えられなかった考え方で驚いた。案内人の山中さんと野田さんとゲストの話は、自分の仕事や立場に置き換えて、わかりやすく説明していて、大変よかった。人間の不思議さがわかっていく内容だったが、そのプロセスの中で、科学のすごさやすばらしさが感じられる。若い世代や中高生にも、科学のおもしろさを感じてもらえる内容になっていたと思う。

○　４月６日(日)のＮＨＫスペシャル　人体　ミクロの大冒険　第３回「あなたを守る！細胞が老いと戦う」は、ｉＰＳ細胞がどのように役に立つのかなどが紹介され、ｉＰＳ細胞の技術が進めばＴ細胞を新たに作ることができ、そうすれば免疫細胞が新しくなり、寿命も伸びるといった話だった。人間の寿命をどう捉えるのか、倫理上の問題もはらんでおり、考えさせられる番組だった。このシリーズは、生物に関する最近の動きがわかり、大変勉強になった。

○　４月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「北朝鮮　権力とカネの謎」は、かねがね、あれだけ経済が不振なのになぜ支配力が強いのか疑問に思っていたが、この番組を通して、かなりの部分がよくわかった。国の経済とは別にキム・ジョンウン第一書記が「宮廷経済」という、経済を私物化する仕組みを持っていて、それを自分の支配のために使っている。そのひとつの例として、部下に高級品を贈って人心をつかむことが支配力を維持するための方法だと、北朝鮮の元高官などのインタビューを通じてわかりやすく説明していた。少しわかりにくいと思ったところは、こういった財源の元になっているひとつとして、武器輸出で稼いでいるとしていたが、果たして北朝鮮の武器はそれほど優れているのか、世界中でそれほど買う国があるのかどうか、どういった武器が売れているのかなどについて、説明が少し足らなかったように思う。また、外交

官が金を密輸して、もうけているという話だったが、北朝鮮には金の鉱山がたくさんあり、金の産出国だったのかについても、もう少し説明があるとよかったと思う。また、新たなもうけ口として、銅像ビジネスと、労働者を外国に派遣して、人海戦術で労賃をもらうという話には驚いた。番組は、チャン・ソンテク氏の処刑から、その裏にあるものは何かという問題意識からスタートし、権力の裏に私物化した経済があるということがよくわかった。希望を言えば、経済制裁で体制がカネを握る力が弱まると今後どうなっていくのかといった展望がもう少しあればなおよいと思った。

○　４月３日(木)のクローズアップ現代「埋もれた証拠～“袴田事件”当事者たちの告白～」は、大変感動して、涙を禁じ得ない番組だった。きっと事前に想定し、準備はしていたと思うが、３月２７日(木)に袴田巌さんが釈放されたあと、約１週間で、大変緻密な検証を行っていた。アメリカの事例などを示し、大変すばらしい検証番組だった。また、元裁判官や捜査員、検事、さらに非常に重要な証拠となる服の製造メーカーの人にまで取材していて、その徹底した裏取りとこれまでの取材力に大変感銘を受けた。ほとんど文句の付けようのない番組だったが、あえて言うならば、おそらく事件の起こった当時は、袴田さんが被疑者、被告として扱われていたわけで、当時のメディアはどういう報道をしていたのか、自己検証のようなところも合わせて伝えていればさらによかったと思う。

（ＮＨＫ側）

袴田事件の「クローズアップ現代」は、再審決定から１週間後に放送したが、その前に中部ブロック向けに「ナビゲーション」で取り上げた。３月の下旬に再審の決定が出るだろうということで、名古屋局と静岡局が合同で準備を進めてきた。裁判所の決定の前に大きな番組で放送することは、これまであまりしてこなかったことだが、今回は検察側にも取材を重ねた上で、決定前の３月１４日(金)に「ナビゲーション」で放送した。その際の取材の蓄積が「クローズアップ現代」でも生かされた。

○　４月１６日(水)のクローズアップ現代「イラク派遣　１０年の真実」は、真実をどう見せてくれるのかと思って見たが、若干期待はずれの感があった。自衛隊からの情報はなかなか出てこないと聞いていたので、自衛隊の映像や自殺者の数字やその家族にインタビューをしていた点は、評価できる。しかし、自衛隊の説明だけになっていたので、真実がどうだったのかについて、戦場に取材に行った人など別の立場で、イラクの実態を知っている人の話を入れたほうがよかった。真実が浮き彫りにならず残

念だった。

○　４月１１日(金)のドキュメント７２時間「巨大フェリーの人生航路」は、乗客へのインタビューを通じて、どういう人たちがこういう航路を使っているのかを淡々と取材しているものだった。被災地への帰省や卒業旅行などさまざまな人が出ていたが、中でも、モンゴル人の家族が「モンゴルには海がないから、とてもおもしろい」と興奮している様子は興味深かった。ただ、このフェリーは単に人を運ぶだけではなく、物流の一助になっているという話も聞いたことがあるので、トラックやその運転手が１人も出てこなかったのが気になった。

○　４月１３日(日)うまいッ！「深海のルビー“キンメダイ”～静岡・下田市～」では、高齢化が進んでいると思っていた漁師に、若い人や若い女性が増えているという報告があって驚いた。キンメダイは高値を保っているそうで、地元の試行錯誤もあるのだと思うが、若い女性漁師に魅力的な地域、漁業体制だといった、少し異なった角度で注目されてもよいような気がする。大変おもしろかった。

○　連続テレビ小説「ごちそうさん」は、最終回まで大変楽しく見た。特に、印象深かったのは３月２８日(金)の回で、ふ久が「電気を作りたいんや。風や地下熱や波や太陽やこの世の中に見えへん力があふれとる。それを電気に作り替える仕組みを残したい」というセリフがあり、いろいろと調べてみたら、脚本家の森下佳子さんが公式サイトや「ごちそうさんメモリアルブック」などで、福島の原発問題についても言及していて、そういう背景の中でのセリフを作ったのだと察する。それ自体の是非について、個人的には特段意見はないが、ただ、ニュースだけではなく、ドラマのセリフにも視聴者にリテラシーが求められると感じた。

○　連続テレビ小説「花子とアン」は、花子の幼少時の子役、山田望叶さんの演技が甲州弁と相まってすばらしいと思う。また、吉高由里子さんも、女学生や若いころの花子のイメージにはぴったり合っているような気がしているので、年をとってからの花子をどのように表現するのかが楽しみだ。実在の村岡花子さんの半生を描くということでより身近に感じられ、原案になった本も読んでみたいと思っている。たまに、こういった実在の人物を描く作品があってもよいと思う。

○　消費税の増税に関する報道を注視していた。商品の買いだめなどをあおっているような印象のニュースや、中小企業が苦慮している発言などがあった。私はむしろ、トラック輸送が影響を受けていると思う。また、価格の表示の問題、あるいは、生産に

波があると企業は致命傷で、生産計画がしにくく、管理上難しい。そういった点について、もう少し、増税前に報道してほしかった。増税後の反動などの動きについても目を向けて取材してほしい。

○　４月１２日(土)のアスリートの魂「“最強の補欠”になる　ブルージェイズ　川﨑宗則」を見た。川﨑選手は、野球界の中でも少し異質で、本当に野球が好きで職人気質を持った選手なのだろうと思うのだが、そういった川﨑選手を取り上げてよいと思った。注目される選手だけではなく、少し“変わり種”のような人を、さらにほかのいろいろな番組でも取り上げてほしい。

○　「晴れ、ときどきファーム」は好きな番組で、よく見ている。ぜひ、東海や中部地方版の番組を制作してほしい。例えば、出演者も１県１人ずつ、いろいろな業種の人たちを持ち回りで紹介し、この地域の里山などを紹介すれば、新しい発見が出てくるような気がする。

○　プレミアムドラマを毎回楽しく見ている。４月６日(日)からスタートした「珈琲屋の人々」は、原作もよいが、配役もよくて、よいドラマになっているので、今後も楽しみだ。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局